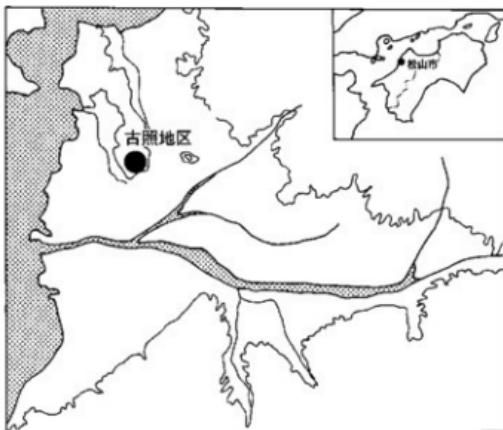


朝美澤遺跡 辻町遺跡

1992

(財)松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

朝美澤遺跡 辻町遺跡



1992

(財)松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター



卷頭図版1 辻町遺跡 S X I 出土遺物

序

本書は、1991年度に宅地開発に伴って事前に緊急調査いたしました、朝美澤及び辻町遺跡の発掘調査報告書であります。

両遺跡は、松山平野の西地域にあります大峰ヶ台丘陵及びその周縁地にあたる遺跡であり、付近には生産遺跡を代表する古照遺跡をはじめ、出現期にかかる有力首長級の墓、朝日谷古墳など著名な遺跡が所在致しております。

近年の調査では、大峰ヶ台山頂から弥生中期の集落形態や古照遺跡5・6次調査での古墳時代の堰周辺環境、さらにはその上層にあたる南江戸闘目遺跡での13世紀代の一括遺物や集落存在などが解り始めております。

今回調査の大峰ヶ台東緩斜面に立地する朝美澤遺跡からは、古代～中世に比定される掘立柱建物を検出した外、弥生前期前半の包含層を検出し、それより一括的様相をもつ土器類の出土がみられ、瀬戸内地方の前期土器研究において貴重な資料になると思われます。

一方、辻町遺跡の調査で検出いたしました古墳期の祭祀的要素をもつ遺構からの一括須恵器類の出土は5世紀代の土器編年等に有効な資料であると思われます。

これら両遺跡の調査は、古照遺跡に関係する宮前川中流域の遺跡様相を知るうえでも貴重な成果を得たものであり、今後一層の調査研究が期待されるところであります。

本報告書が、多方面にわたって広くご活用していただけることを心から願っております。最後になりましたが、調査にあたって多大のご協力、ご理解をいただきました事業者及び地権関係者のほか関係各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成4年8月31日

財團法人 松山市生涯学習振興財団

理事長 田 中 誠 一

例　　言

1. 本書は、松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センターが平成3年に松山市朝美町2丁目1141番地1他、辻町39番地1で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺物の実測・挿図の製図は、調査担当者の責任のもと、水口あをいを中心に関正子、多知川富美子、萩野ちよみ、矢野久子、吉井信枝、白石聖子、瀬戸恭子、藤井宏枝、藤沢真美、森田晶子、山下満佐子、松山桂子、三木和代、兵頭千恵、好光明日香、大西陽子があたった。
3. 遺構は呼称を略号で記述する場合がある。溝：S D、土壤：S K、柵列：S A、柱穴：S P、掘立柱建物：掘立、性格不明遺構：S Xである。
4. 遺構図・遺物図等の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
5. 本書に使用した方位はすべて磁北である。
6. 本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。
7. 本書の執筆は、梅木謙一、宮内慎一、真木潔、水口あをいが分担し行った。浄書は、高橋恒が行った。
8. 写真図版では、遺構写真は宮内慎一、真木潔、大西朋子が行い、遺物写真、写真図版作成は担当者と協議のうえ大西朋子が行った。
9. 調査報告においては、愛媛大学法文学部下條信行先生、勧京都府文化博物館定森秀夫先生に御指導・御教示を頂いた。記して感謝申し上げます。
10. 編集は、調査担当者が協議の上、梅木謙一、宮内慎一が行った。校正においては、田城武志、水口あをいの協力を得た。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに

1 調査に至る経過	〔梅木〕	1
2 調査組織	〔梅木〕	2
3 環境	〔宮内〕	3

第Ⅱ章 朝美澤遺跡2次調査

1 調査の経過	〔宮内〕	11
2 層位	〔宮内〕	14
3 調査の概要	〔宮内・水口〕	18
4 小結	〔宮内〕	41

第Ⅲ章 辻町遺跡

1 調査の経過	〔真木〕	55
2 層位	〔真木〕	58
3 調査の概要	〔真木〕	60
4 小結	〔梅木・真木〕	77

第Ⅳ章 朝美澤遺跡2次調査出土の弥生前期土器

〔梅木・水口〕 87

第Ⅴ章 朝美澤(2次)・辻町遺跡調査の成果と課題

〔梅木〕 90

挿図目次

第1図 古照地区的地質図	3
第2図 松山平野の主要遺跡分布図（縮尺1/50,000）	5
第3図 古照地区的遺跡分布（縮尺1/25,000）	7
朝美澤遺跡 2次調査	
第4図 調査地位置図（縮尺1/5,000）	11
第5図 調査地測量図（縮尺1/600）	12
第6図 北壁土層図（縮尺1/40）	14
第7図 遺構配置図（縮尺1/100）	15
第8図 調査地区割図（縮尺1/200）	17
第9図 1号掘立柱建物測量図（縮尺1/80）	18
第10図 2号掘立柱建物測量図（縮尺1/80）	19
第11図 3号掘立柱建物測量図（縮尺1/80）	20
第12図 S K 1測量図（縮尺1/30）	21
第13図 第II層出土遺物実測図(1)（縮尺1/3）	23
第14図 第II層出土遺物実測図(2)（縮尺1/3）	24
第15図 第II層出土遺物実測図(3)（縮尺1/3）	25
第16図 第II層出土遺物実測図(4)（縮尺1/4）	26
第17図 第III層出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）	28
第18図 第III層出土遺物実測図(2)（縮尺2/3・1/2）	29
第19図 第III層下層部出土遺物実測図(1)（縮尺1/3）	31
第20図 第III層下層部出土遺物実測図(2)（縮尺1/3）	32
第21図 第III層下層部出土遺物実測図(3)（縮尺1/3）	33
第22図 第III層下層部出土遺物実測図(4)（縮尺1/3）	34
第23図 第III層下層部出土遺物実測図(5)（縮尺1/3）	35
第24図 第III層下層部出土遺物実測図(6)（縮尺1/3）	36
第25図 第III層下層部出土遺物実測図(7)（縮尺1/3）	38
第26図 第III層下層部出土遺物実測図(8)（縮尺1/3）	39
第27図 第III層下層部出土遺物実測図(9)（縮尺1/3）	40
辻町遺跡	
第28図 調査地位置図（縮尺1/2,500）	57
第29図 調査地区割図（縮尺1/400）	

第30図	西壁土層図（縮尺1／40）	59
第31図	第V層出土遺物実測図（縮尺1／3）	61
第32図	第VI層遺構配置図（縮尺1／250）	63
第33図	第VII層出土遺物実測図（縮尺1／3）	
第34図	第VIII層上面遺構配置図（縮尺1／250）	
第35図	第VIII層中位部遺構配置図（縮尺1／250）	
第36図	第VIII層出土土師器実測図（縮尺1／3）	65
第37図	第VIII層出土須恵器実測図(1)（縮尺1／3）	67
第38図	第VIII層出土須恵器実測図(2)（縮尺1／3）	69
第39図	S X 1 测量図（縮尺1／30）	71
第40図	S X 1 出土土師器実測図（縮尺1／3）	73
第41図	S X 1 出土須恵器実測図（縮尺1／3）	75
第42図	S X 1 出土臼玉実測図（縮尺1／1）	76
第43図	第IX層遺構配置図（縮尺1／250）	77
第44図	器種構成と施文分類図（縮尺1／6・1／4）	89

図版目次

巻頭図版 1 辻町遺跡 S X 1 出土遺物

朝美澤遺跡 2次調査

- | | | |
|------|--|----------------|
| 図版 1 | 1 調査地遠景（南西より） | 2 遺構検出状況①（南より） |
| 図版 2 | 1 遺構検出状況②（西より） | 2 北東隅壁土層（南より） |
| 図版 3 | 1 掘立 1①（西より） | 2 掘立 1②（南より） |
| 図版 4 | 1 掘立 2（南より） | 2 掘立 3（南より） |
| 図版 5 | 1 遺物出土状況①（西より） | 2 遺物出土状況②（西より） |
| 図版 6 | 1 第II層出土遺物① [上]：外面，[下]：内面 | |
| 図版 7 | 1 第II層出土遺物② [上]：外面，[下]：内面 | |
| 図版 8 | 1 第II層出土遺物③ [上]：外面，[下]：内面 | |
| 図版 9 | 1 第II層出土遺物④ | |
| 図版10 | 1 第II層出土遺物（36・38・42・43）、第III層出土遺物（44・46・50～52） | |
| 図版11 | 1 第III層出土遺物 | 2 第III層出土遺物石製品 |
| 図版12 | 1 第III層下層部出土遺物① [上]：外面，[下]：内面 | |
| 図版13 | 1 第III層下層部出土遺物② [上]：外面，[下]：内面 | |

- 図版14 1 第Ⅲ層下層部出土遺物③ [上] : 外面, [下] : 内面
 図版15 1 第Ⅲ層下層部出土遺物④ [上] : 外面, [下] : 内面
 図版16 1 第Ⅲ層下層部出土遺物⑤ [上] : 外面, [下] : 内面
 図版17 1 第Ⅲ層下層部出土遺物⑥ [上] : 外面, [下] : 内面
 図版18 1 第Ⅲ層下層部出土遺物⑦

辻町遺跡

- 図版19 1 辻町遺跡遠景 (西より) 2 調査区全景 (北より)
 図版20 1 西壁土層 (東より) 2 第Ⅷ層遺構検出状況 (北より)
 図版21 1 第Ⅷ層遺構検出状況 (北より) 2 第Ⅷ層中位部遺構検出状況 (北より)
 図版22 1 S X 1 出土状況 (西より) 2 S X 1 出土遺物② (北より)
 図版23 1 第V層出土遺物 (西より) 2 第V層出土遺物
 図版24 1 第V層出土遺物①
 図版25 1 第V層出土遺物②
 図版26 1 S X 1 出土遺物①
 図版27 1 S X 1 出土遺物②
 図版28 1 S X 1 出土遺物③

表 目 次

表1 調査地一覧	1
朝美澤遺跡 2次調査	
表2 堀立柱建物址一覧	42
表3 土壌一覧	
表4 溝一覧	
表5 第Ⅱ層出土遺物観察表 土製品	43
表6 第Ⅲ層出土遺物観察表 土製品	45
表7 第Ⅲ層出土遺物観察表 石製品	46
表8 第Ⅲ層下層部出土遺物観察表 土製品	47
辻町遺跡	
表9 第V層出土遺物観察表 土製品	79
表10 第V層出土遺物観察表 土製品	80
表11 第V層出土遺物観察表 土製品	
表12 S X 1 出土遺物観察表 土製品	84
表13 S X 1 出土遺物観察表 石製品	85

第Ⅰ章 はじめに

1 調査に至る経過

平成2年5月、松山市朝美2丁目1141-1他と同辻町39-1の宅地開発にあたり、埋蔵文化財の確認願いが開発会社より松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に相次いで提出された。

確認願いが申請された二地点は、いずれも松山市の指定する埋蔵文化財包含地の「34朝美遺物包含地」内に当たり、周知の遺跡として知られている。包含地内では、これまでに弥生時代～古代の集落関連遺構が検出され、同時代の集落の存在が確認されている（辻遺跡・朝美澤遺跡）[松山市教育委員会 1989]。また、包含地は古照遺跡と南接しており、松山平野における古墳時代の重要な集落地帯の内に含まれる。

文化教育課では、確認願いが提出された二地点について埋蔵文化財の有無とさらには遺跡の範囲やその性格を確認するために、順次確認調査、試掘調査を実施した。

確認調査の結果を受け、文化教育課と申請者各位は発掘調査についての協議を行った。発掘調査は、特に朝美包含地内の弥生時代～古墳時代の集落構造解明と南接する古照遺跡の関連資料の調査を主目的とし、文化教育課及び松山市埋蔵文化財センターが主体となり、各申請者の協力のもと平成2年3月～同年7月の間に実施した。

以下、各調査の遺跡名、所在等を略記する。

表1 調査地一覧

遺跡名	所在	面積(m ²)	期間
朝美澤遺跡	松山市朝美2丁目1141-1他	1,298	平成2年3月18日～5月31日
辻遺跡	松山市辻町39-1	654	平成2年4月16日～7月31日

なお、平成2年3月～平成3年9月30日の間は、松山市教育委員会文化教育課が主体となり野外調査及び室内調査を行い、平成3年10月1日以降は財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが主体となり室内調査及び刊行事業を実施した。

[参考文献]

古照遺跡……昭和48年に第1調査を開始以降、平成4年3月までに8次にわたる調査を実施している。

1974 「古照遺跡」 松山市教育委員会

1976 「古照遺跡Ⅱ」 松山市教育委員会

辻遺跡……栗田 茂敏 1989 「辻遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』

松山市教育委員会

澤遺跡……松村淳・高尾和長 1989 「澤遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』

松山市教育委員会

はじめに

2 調査組織

〔平成2年度調査組織〕

調査主体／松山市教育委員会 教育長 池田 尚郷
参事 古本 克
教育次長 井上 量公
教育次長 一色 正士

調査総括／松山市教育委員会 文化教育課 課長 渡部 忠平
松山市立埋蔵文化財センター 所長 森脇 將
調査係長 西尾 幸則
調査主任 田城 武志
調査主事 栗田 正芳

〔平成3年度調査組織〕(平成3年4月1日～同年9月30日)

調査主体／松山市教育委員会 教育長 池田 尚郷
参事 古本 克(～5月19日)
参事 池田 秀雄(5月20日～)
教育次長 西森 寛彦
教育次長 一色 正士(～5月19日)
教育次長 渡部 泰輔(5月20日～)
教育次長 日野 正寛(5月20日～)

調査総括／松山市教育委員会 文化教育課 課長 渡部 忠平(～5月19日)
課長 岩本 一夫(5月20日～)
松山市立埋蔵文化財センター 所長 和田祐三郎
次長 田所 延行
調査係長 西尾 幸則
調査主任 田城 武志
調査主事 栗田 正芳

〔平成4年度刊行組織〕

刊行主体／財団法人松山市生涯学習振興財團 理事長 田中 誠一
事務局長 渡辺 和彦
事務次長 鶴井 茂忠
埋蔵文化財センター 所長 和田祐三郎
次長 田所 延行
調査係長 西尾 幸則
調査主任 田城 武志
調査主事 栗田 正芳(文化教育課職員)

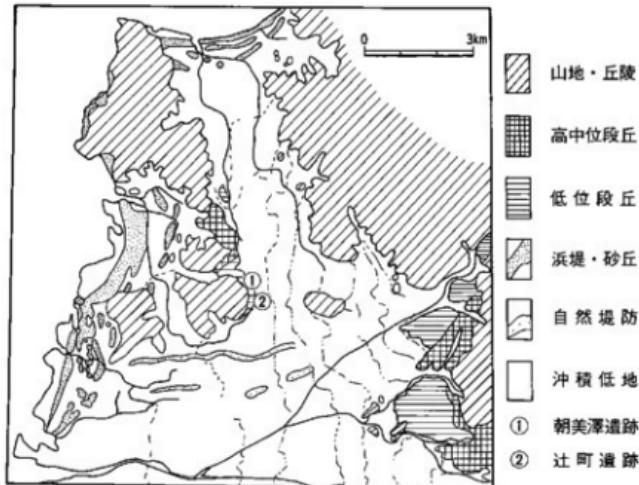
3 環 境

(1) 遺跡の立地

松山平野は、伊予灘と燧灘とを二分するように北に突き出た高縄半島のつけね部分にあたる。高縄半島の中央部には半島の最高峰、東三方ヶ森をはじめとして、伊之子山、北三方ヶ森、高縄山からなる高縄山地が形成されている。この高縄山に源を発した河川が伊予灘に流れ出て形成した沖積平野が松山平野である。

古照地区は、この松山平野の西端、勝山（城山）と大峰ヶ台・岩子山・弁天山といった独立丘陵とに挟まれた丘陵・平野部に立地する。

松山平野を流れる河川のうち、平野を東から西へ向かって流れる重信川と、北東から平野を斜めに横切って流れ込む石手川は、松山市の南端で合流し、伊予灘へ注いでいる。古照地区に關係の深い石手川は、高縄山にその水源を発し、湯山渓谷を経て岩塙で分岐した後、道後城北地区を流れて大宝寺川となり、朝美に達する。その後、宮前川となって大峰ヶ台丘陵の南麓を迂回し、さらに分岐して北・西の2条の流れとなって三津湾に注いでいる。これら、ふたつの河川は山地の浸触開拓や、平野での土砂礫の堆積が急激なため、流域面積が非常に広く、その結果、扇状地を形成し海岸平野に粗粒の堆積物がもたらされることになる。これが現在の古照地区の土壤基盤となっている。



第1図 古照地区的地質図

(2) 歴史的環境（第3図）

古照地区は、古墳期の大規模な灌漑施設として有名な古照遺跡〔松山市 1974〕をはじめとして縄文時代から中世に至るまで多くの遺跡が立地している。古墳遺跡周辺においては、市道「千舟一高岡線」建設工事に伴いこれまでに5度にわたる発掘調査が行われているほか、大峰ヶ台丘陵では松山総合公園整備に伴い発掘調査・確認調査が継続的に行われている。それらのうち、近年発掘調査された遺跡を中心に時代別に述べていくこととする。

縄文時代

古照地区において、これまでに明確な縄文時代の遺構は検出されていない。わずかに、古照遺跡の調査で縄文後・晩期の遺物が壠を埋めた砂礫層から他の時代の遺物と共に数点出土している程度である。

弥生時代

弥生時代には、丘陵部・平野部を問わず遺跡の分布が広く認められる。弥生前期では、弁天山低丘陵の齊院鳥山遺跡（1）〔松山市 1986〕より、前期末段階の濠を検出しており、壺形土器・壺形土器・蓋形土器などの出土がある。また、同丘陵中央東麓、宮前川左岸の後背湿地に立地する宮前川遺跡別府地区（2）〔西尾幸則 1986〕では、前期末から中期初頭の遺物が包含層中より多数出土している。

中期では、大峰ヶ台丘陵山頂部の大峰ヶ台遺跡（3）〔栗田茂敏 1989〕において、中期中葉段階の竪穴式住居址を含む集落間連遺構と遺物が検出されているほか、同丘陵東裾部、澤遺跡（4）〔松村淳 1989〕や辻遺跡（5）〔栗田茂敏 1989〕では、包含層中より中期中葉の遺物の出土が多数みられる。

後期になると、遺跡の分布がさらに広範囲にその広がりを見せている。前述の澤遺跡では壺形墓3基が確認されているほか、津田島越遺跡（津田中学校構内）1次調査（6）〔松山市 1986〕では、土錘9個を伴った火災住居址のほか数棟の住居址群が検出されており、各住居址からは、土錘・石錘などの魚撈具をはじめ、壺形土器・壺形土器・鉢形土器・支脚形土器などがセットになって出土している。また同2次調査〔西尾幸則 1975〕では大量の遺物が土器溜りより出土し、辻遺跡からは、後期の土器群が投棄された状況で集中出土している。他に大峰ヶ台丘陵東麓、朝美遺跡（7）〔松山市 1986〕においては、高床式倉庫に使用したと考えられる「ねずみ返し」や舟形状の盆（ヒノキ材）などの木製品が、後期後半の土器とともに出土している。

弥生時代の遺物として、松山平野で特徴的なものに分銅形土製品がある。愛媛県内で39点の出土があり、そのうち、古照地区出土のものは2点ある。大峰ヶ台遺跡および宮前川遺跡別府地区のもので、ともに包含層中からの出土である。

境



第2図 周辺の遺跡分布図

古墳時代

古墳時代になると、大峰ヶ台、岩子山、弁天山など各丘陵部に多数の古墳が確認されている。平野部においても古照遺跡をはじめとして、数多くの遺跡が検出されている。

古墳では、大峰ヶ台丘陵北西斜面に朝日谷古墳（8）があり、2号A主体部内より、2面の舶載鏡と40本を越える銅鏡・鉄鏡のほか、直刀・ガラス玉・朱などが出土している。また、同丘陵南西部にて、古墳後期の群集墳である客谷古墳群（9）〔栗田茂敏 1989〕が確認されている。他に、大峰ヶ台丘陵から西に派生する岩子山丘陵においては、頂上尾根部に岩子山古墳群（10）〔名本二六雄 1975〕があり、中期末から後期段階の須恵器とあわせて素環頭太刀や、円筒埴輪、人物・動物埴輪が出土している。また、同丘陵南西麓の齊院茶臼山古墳（11）〔西尾幸則 1983〕では、5世紀後半段階の須恵器に伴って、円筒埴輪や朝顔型埴輪などの出土があり、御産所古墳群（12）〔森光晴 1976〕11号墳からは人骨7体の重葬が確認されている。他に、岩子山丘陵に対岸する弁天山丘陵には、弁天山古墳群（13）〔松山市 1986〕があり、古墳前期から中期段階の古墳の築造がみられる。その他、注目すべきものとしては、伝岩子山出土とされているものに、五鈴鏡・乳文鏡などがある。

平野部においては、古墳時代前期の大規模な灌漑施設として名を馳せた古照遺跡がある。同2次調査では、堰と取水口が検出され、堰を埋める砂礫層の中から、古墳前・中期の遺物を中心にその出土がみられる。他に、宮前川遺跡北齊院地区（14）〔松山市 1986〕では古墳前期の消失住居のほか、自然堤防状遺構や堰堤状遺構などが検出されている。出土遺物のうち、特殊なものとしては、鶏をかたどった注口土器や乳房をもった犬・鹿・馬などの動物型土製品がある。他に、瓢形土器・鼓形土器などの山陰系土器や畿内系土器など、当時の交流・交易の一端をうかがわせる土器類の出土もみられる。そのほか、大峰ヶ台丘陵東麓辻遺跡2次調査（15）〔栗田正芳 1991〕では古墳期の掘立柱建物址が検出されている。

中世

中世の遺跡は比較的多く、古照遺跡及び同2～5次調査では包含層中より多数の中世土器の出土がある。澤遺跡では平安時代の掘立柱建物跡が検出され、古照遺跡の北、南江戸闇目遺跡（16）〔上田真 1991〕からは、平安時代から鎌倉時代の集落関連遺構と大量の土師器類が出土している。また、北齊院地内遺跡（17）〔宮崎泰好 1989〕では、室町時代から江戸時代にかけての掘立柱建物址や土壙墓を、南江戸桑田遺跡（18）〔重松佳久 1989〕では江戸時代の桶棺墓が多数検出されている。

第3図 古照地区の遺跡分布図

縮尺 1/25,000



はじめに

〔参考文献〕

- 松山市 1974 「古照遺跡」『松山市文化財調査報告書Ⅳ』
- 松山市 1986 『松山市史料集第2巻 考古編Ⅱ』
- 西尾幸則 1986 「宮前川遺跡調査報告書」『松山市文化財調査報告書18』
- 栗田茂敏 1989 「大峰ヶ台遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』
- 松村 淳 1989 「溝遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』
- 西尾幸則 1975 「津田鳥越遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』
- 栗田茂敏 1989 「客谷古墳群」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』
- 名本二六雄 1975 「岩子山古墳」『松山市文化財調査報告書Ⅳ』
- 西尾幸則 1983 「齊院茶臼山古墳」『松山市文化財調査報告書16』
- 森 光晴 1976 「御産所11号墳」『松山市文化財調査報告書9』
- 栗田正芳 1991 「辻遺跡2次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』
- 上田 真 1991 「南江戸蘭目遺跡」『松山市文化財調査報告書22』
- 宮崎泰好 1989 「北斎院地内遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』
- 愛媛県 1986 『愛媛県史資料編考古』
- 重松佳久 1989 「南江戸桑田遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』

第Ⅱ章

アサミサオ

朝美澤遺跡

— 2次調査 —

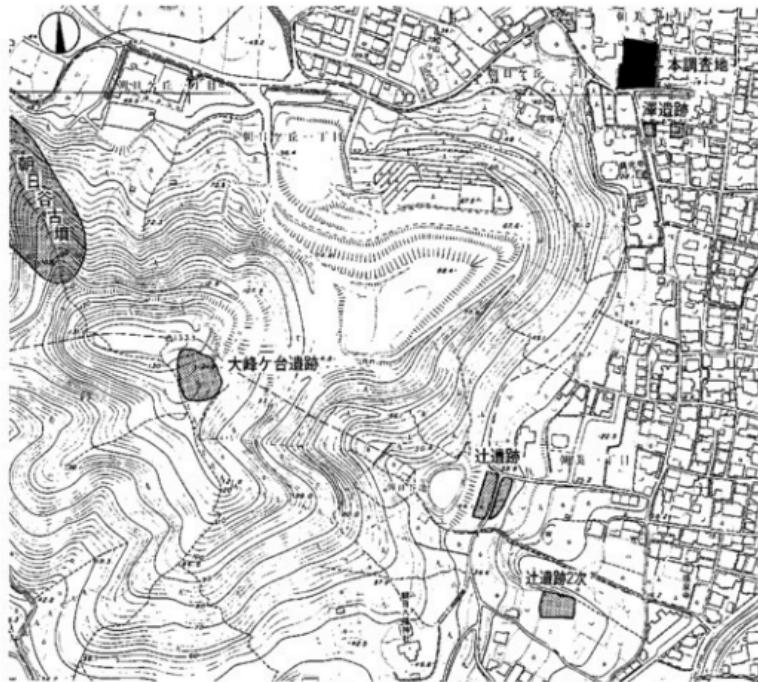
第Ⅱ章 朝美澤遺跡2次調査

1 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1990(平成2年)5月22日、株式会社 県都住宅より、松山市朝美2丁目1141-1地他内における宅地開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課・松山市立埋蔵文化財センター(以下、市教委・埋文センター)に提出された。

当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『34朝美遺物包含地』内にあたり、周知の遺跡として知られている。同包含地内ではこれまでに、弥生時代後期の壺棺墓や掘立柱建物址を検出している澤遺跡〔松村淳 1899〕や、弥生時代後期後葉の遺物が出土している辻遺跡〔栗田茂敏 1899〕などがある。周辺地域においては、松山市総合公園建設に伴い数多くの調査が行われている。



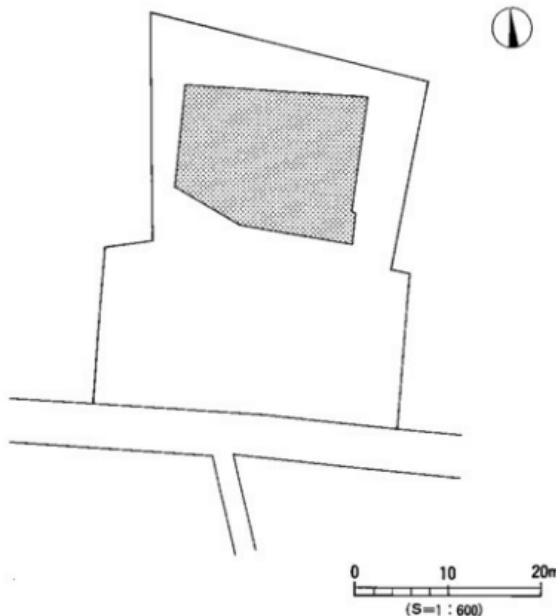
第4図 調査地位置図 (S=1:5,000)

朝美澤遺跡 2次調査

これらのことから、市教委・埋文センターは、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認するために、1990（平成2）年8月17日に試掘調査を実施した。試掘の結果、柱穴5基と遺物包含層2層を確認した。この結果を受け、市教委・埋文センターと県都住宅の両者は遺跡の取扱いについて協議を行い、宅地開発によって失われる遺構について、記録保存のために発掘調査を実施することとなった。発掘調査は当地域の弥生時代～中世における集落構造解明を主目的とし、埋文センターが主体となり、県都住宅の協力のもと1991（平成3）年3月18日に調査を開始した。

（2）調査の経緯

1991（平成3）年3月13日より重機により表土剥ぎ取り作業を開始した。調査地は以前、宅地であったためコンクリート基礎や配管跡などがあり、それらの除去等を行ったため、掘削に4日間を費した。



第5図 調査地測量図

調査の経過

3月18日より作業員を増員し本格的な発掘調査を開始した。初めに調査区内に東西・南北に各1本ずつのベルトを設定した。その後、試掘結果及び深掘りによる土層確認の結果、3層の遺物包含層を確認した。そのうえで、各層ごとに掘り下げをし、遺構検出を行った。

4月16日、第V層上面にて遺構検出を行い、4月25日、完掘状況の写真撮影をする。

4月27日～4月30日、出土遺物・調査用具等を撤去する（野外調査終了）。

5月1日～5月31日、松山市立埋蔵文化財センターにて整理作業を行う。

(3) 調査組織

調査地 松山市朝美2丁目1141-1、同1145、1145-2、1146、1147、1148、1149

遺跡名 朝美澤遺跡2次調査

調査期間 野外調査 1991(平成3)年3月18日～4月30日

室内整理 1991(平成3)年5月1日～5月31日

調査面積 1,330.95m²

調査委託 県都住宅株式会社 代表取締役 兵頭作一

調査担当 梅木謙一 宮内慎一

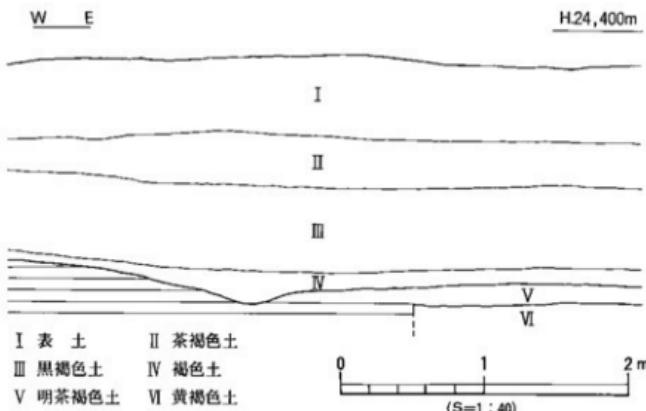
作業員 高橋 恒、亀山 健一、志賀 夏行、原田 英則、池ノ上 昇、大久保英昭、
中島 宏、西原 聖二、富山 寛之、相原 宏淳、政本 和人、浅海 誠、
渡辺 秀一、兼久 一郎、川井 正、是沢 嘉昭、田中 茂樹、波多野植彦、
藤家 厚美、松本 正義、三江 元則、福葉 靖司、岡宮 廉也、白石 審征、
仙波亨一郎、中矢 正明、浜本 司、町田 仁司、山本 武敏、渡辺 誠興、
水口あをい、大西 朋子、岡根なおみ、白玉 典子、新出寿美子、閑 正子、
萩野ちよみ、矢野 久子、吉井 信枝、森田 利恵、松本美知子、黒田 令子、
多知川富美子

2 層 位 (第 6 図、図版 2-2)

本調査地の基本層位は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層茶褐色土、第Ⅲ層黒褐色土、第Ⅳ層褐色土、第Ⅴ層明茶褐色土、第Ⅵ層黄褐色土である。

第Ⅰ層は近現代の造成工事による客土で、地表下60~80cmまで開発が行なわれている。調査区西半では、開発による削平等のため、第Ⅰ層ではなく、Ⅱ層以下の層が既に現われている。第Ⅱ層は調査区西端部を除く全域でみられ、北西から南東に向けて緩傾斜をなす。北半部は厚さ20cm程度であるが、南に行くにつれ、厚さを増し、南東隅では約60cmの堆積である。第Ⅱ層中より土師器・須恵器等が出土している。第Ⅲ層は、調査区南西部には見られず、第Ⅳ層上に第Ⅱ層が堆積している。第Ⅱ層と同様、北西から南東に向けて傾斜堆積をなし、北西部で厚さ50cm、南東部で厚さ80cmを測る。遺物は弥生土器・土師器・須恵器他が出土している。第Ⅳ層は、調査区東半部のみにみられ、厚さ10~20cmの堆積で、弥生土器片が数点出土している。第Ⅴ・Ⅵ層は無遺物層である。第Ⅵ層については、表土剥ぎ取り段階で、調査区南西部において既に露出していたところがある。

遺構は主に第Ⅲ層及び第Ⅴ・Ⅵ層上面での検出である(第7図)。第Ⅲ層中より掘立柱建物址1棟、第Ⅴ層上面では土壙1基、柱穴35基、第Ⅵ層上面では、掘立柱建物址2棟、溝状遺構3条、柱穴51基(掘立柱建物柱穴を含む)他である。ただし、第Ⅵ層上面検出の掘立柱建物址については、土層観察により、本来は第Ⅱ層中から掘り込まれたものである。



第6図 北壁土層図



第 7 図 遺構配置図

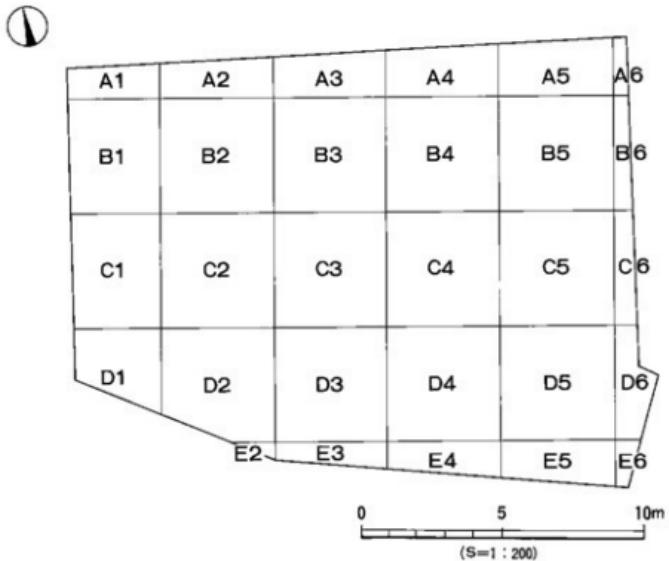
調査の経過

遺物は遺構及び包含層からの出土であり、特に第Ⅲ層下層部からは、弥生時代前期の土器が多量に出土している。土製品としては、第Ⅲ層中より紡錘車が1点出土しており、石製品は、石斧等が出土している。

これらのことから、各層は出土遺物、検出遺構から判断すると、第Ⅱ層は中世以後、第Ⅲ層は古墳時代～古代、第Ⅳ層は弥生時代～古墳時代までに堆積したものと判断される。

第V層上面の標高を測量すると、調査区西から東に向けて傾斜をなしており、その比高差は最大で約150cmを測る。

なお、調査にあたり調査区内を4m四方のグリットに分けた。4mグリットは、北から南へA・B・C・D・E、西から東へ1・2・3・4・5・6として、A1・A2…E6といったグリット名を付した(第8図)。



第8図 調査地区割図

3 調査の概要 (遺構と遺物)

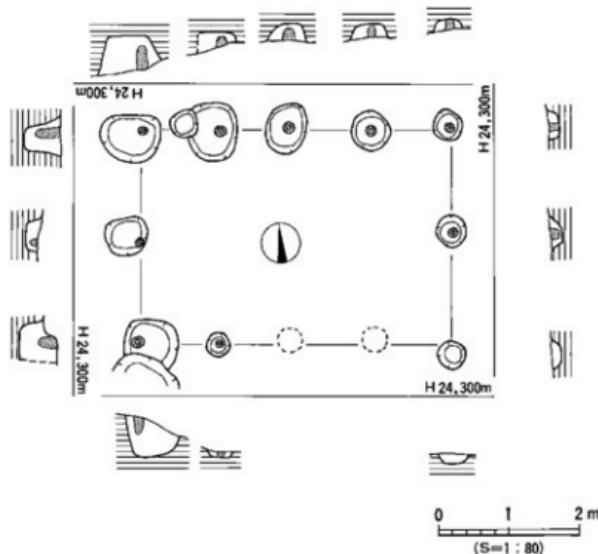
今回の調査において確認した遺構は、掘立柱建物址3棟、土壙1基、溝状遺構3条、柱穴91基（掘立柱建物址柱穴24基を含む）他である。

(1) 古代～中世

古代～中世の遺構は掘立柱建物址3棟を検出した。第Ⅲ層及び第Ⅵ層上面での検出であるが、第Ⅵ層上面検出のものは本来は第Ⅱ層中から掘り込まれたものである。

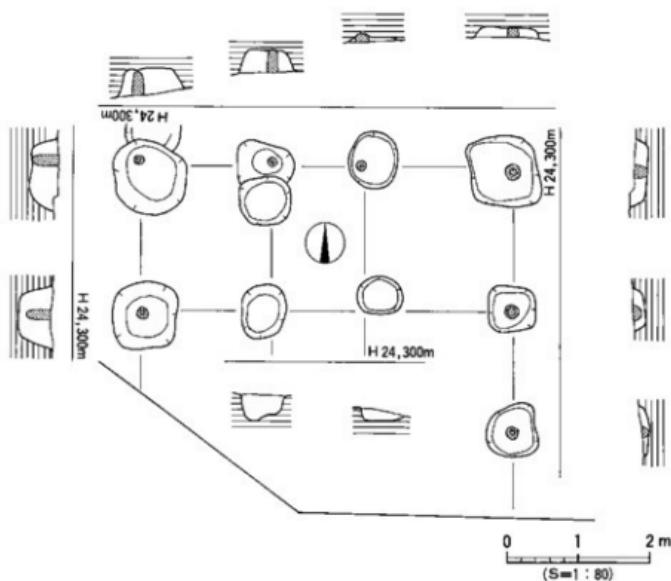
1号掘立柱建物址 (第9図、図版3)

調査区中央部西寄りC2～C3区に位置する。第Ⅵ層上面での検出である。南側は試掘トレンチによる削平のため未検出であるが、2×4間の建物址と考える。梁行長3.0m、桁行長4.4mを測る東西棟で、ほぼ東西に主軸をとる。平均柱間は、東西1m、南北1.5mである。各柱穴は円または楕円形を呈し、径40～90cmを測る。深さについては、検出面が西から東に向けて傾斜をなしているため、西隅で60cm、東隅で20cmである。柱痕径は18～20cmであり、深さ15～40cmを測る。柱穴埋土は第Ⅱ層と同様の茶褐色土である。柱穴内からは須恵器・土師器小片が数点出土している。



第9図 1号掘立柱建物測量図

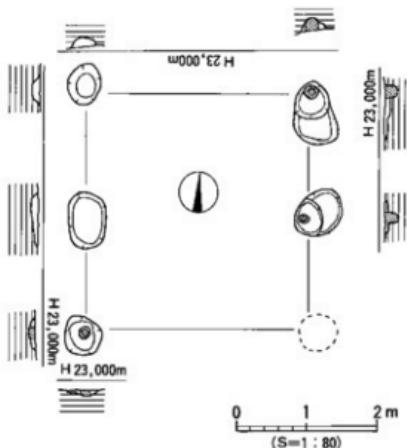
調査の概要



第10図 2号掘立柱建物測量図

2号掘立柱建物址 (第10図、図版4-1)

調査区南西D2-D3区に位置する。第Ⅶ層上面での検出であるが、土層観察により、本来は第Ⅱ層中から掘り込まれたものである。南隅は調査区外のため未検出であるが、3×2間以上の純柱建物址と考えられる。梁行長3.6m、桁行長5.4mを測る東西棟で、主軸は1号掘立柱建物址に較べてやや南に偏している。平均柱間は東西1.6m、南北1.8mである。柱痕径は15-20cmであり深さ40cm前後である。柱穴埋土は1号掘立柱建物址に較べやや砂質を帯びた茶褐色土である。一部、1号掘立柱建物址と柱穴が重複しており2号建物址が1号建物址に先行する。柱穴内から弥生土器・土師器・須恵器が出土している。



第11図 3号掘立柱建物測量図

3号掘立柱建物址（第11図、図版4-2）

調査区南東C4～D5区に位置する。南東隅は擾乱により削平されているが、1×2間の建物址と考えられ、ほぼ磁北に等しい主軸方位をとる。第Ⅲ層上面での検出であり、梁行長3.4m、桁行長3.5mを測る南北棟である。各柱穴は円または楕円形を呈し、径50～80cm、深さ10～20cmを測る。ただし、柱穴の深さなどから判断すると、第Ⅱ層以上の層から掘り込まれた可能性が高い。柱穴埋土は第Ⅱ層と同様の茶褐色土である。柱穴内からは須恵器・土師器の小片が僅かに出土している。

以上の掘立柱建物址については、柱穴内からの遺物が僅かであり詳細な年代付けは難しいが、層位関係等から、古代～中世段階の建物址と考える。

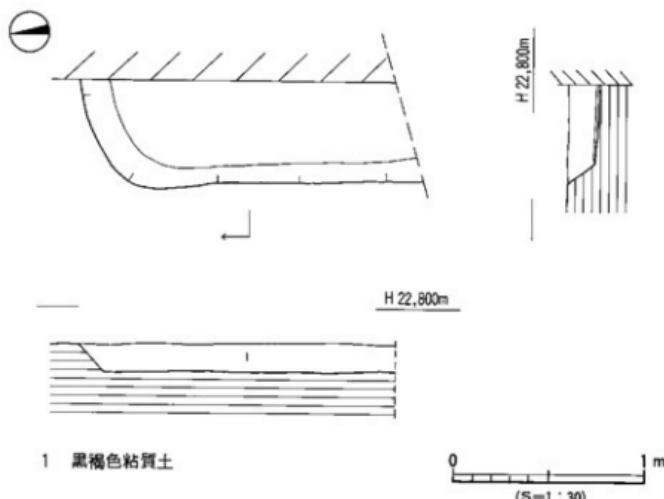
(2) 古墳時代

古墳時代の遺構は溝状遺構3条を確認した。すべて第Ⅵ層上面での検出である。

S D 1 調査区南側D2～D3区に位置する。東隅は2号掘立柱建物柱穴に切られ、西隅は消失している。断面「U」字状で、規模は幅0.3m、検出長5.0mを測る。北西から南東に向けて傾斜をなし、深さは北西隅で5cm、南東隅で17cmである。溝底は平坦で、埋土は褐色土一層であり、第Ⅲ層が覆う。遺物は須恵器片が少量出土している。

S D 2 調査区南西D2区に位置する。北側で、東に曲がり、2号掘立柱建物柱穴に切られており、南側は調査区外へ続く。断面「U」字状で、規模は幅0.3m、検出長2.8m、深さ12cmを測る。北東から南西に向けて緩傾斜をなしている（比高差約3cm）。溝底は凹凸がみられ、

調査の概要



第12図 SKI測量図

平坦ではない。埋土は茶褐色土一層であり、第Ⅱ層が覆う。遺物は土師器・須恵器片が出土している。

S D 3 調査区中央やや西寄り C 3～D 3 区に位置する。溝中央部は試掘トレンチにより削平され、なおかつ 2 号掘立柱建物柱穴に切られており、北隅は消失している。断面「V」字状で、規模は幅 0.3m、検出長 8.2m、深さ 10cm を測る。北から南に向けて緩傾斜をなし、比高差は約 5cm である。溝底は比較的平坦で、埋土は茶褐色土一層である。溝北半部では第Ⅱ層が覆い、南半部では第Ⅲ層が覆う。遺物は土師器高环片が出土している。

以上の溝状遺構については、検出面の層位関係や出土遺物から古墳時代の遺構と考えられる。

(3) 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は土壙 S K 1 があげられる（第12図）。調査区南東隅 D 5 区に位置する。第Ⅴ層上面での検出であり、第Ⅳ層が覆う。南半部は攪乱により削平され、東半部は調査区外に続く。平面形は不整規円形を呈すると考えられ、規模は南北 1.6m、東西検出長 0.7m、深さ 12cm を測る。断面逆台形状で、床面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土一層である。遺物は弥生土器片が数点出土している。

(4) その他の遺構と遺物

本調査において確認された柱穴は 91 基である。第Ⅲ層及び第Ⅴ・Ⅵ層上面での検出である。第Ⅲ層上面検出の柱穴埋土は茶褐色土であり、第Ⅴ・Ⅵ層上面検出のそれは茶褐色土、褐色土、

黒褐色土に分けられる。少なからず三時期に区別されるものと考えられるが、出土遺物が僅かであるため、詳細な年代は判断しがたい。

第Ⅱ層出土遺物（第13～16、図版6～10）

〔須恵器〕

环蓋（第13図1～10） 1～3は身受けのかえりを有する环蓋。1は口径12cmを測る大型品で、かえりは口縁端部より下方へ下がる。2・3は口径9～10cm前後のもので、笠形の天井部をもつ。かえりは口縁端部よりは下がらない。4は擬宝珠様つまみの付く环蓋、5～10は身受けのかえりを有さない环蓋である。天井部の形態は、まるく笠形を呈するもの（5～8）と、ほぼ平坦なもの（9・10）とがあり、天井部と口縁部の境界が段をなすものは10のみである。口縁部は下方へ屈曲するものがほとんどであり、5のみ、やや下内方へ屈曲する。口縁端部はすべて丸く仕上げられている。天井部外面には、回転ヘラ削り調整を行ったのち、回転ナデ調整を施す。

环身（第13図11～18・第14図19～24） 11～18は高台の付く环身。底部と体部の境界は丸みをもつものがほとんどで、13のみ、わずかに稜をもつ。高台は底部と体部の境界から内側に入ったところに付き、内端面で接地するもの（11～15）、平坦に接地するもの（16～18）とがある。底部は回転ヘラ削りの後、回転ナデ調整を施すもの（15）、回転ナデ調整のみを施すもの（11・12・14・16～18）、不整方向のナデ調整を施すもの（13）がある。11は斜め上方にたちあがる体部をもち、口縁部は外反する。高台は「ハ」の字状に付き、高台端部には、沈線状の凹みが認められる。19～24は内傾するたちあがりをもつ环身。口径は19・20が12～13cm、21～24は9～10cm前後である。たちあがり端部は尖り気味なものと丸いもの（34）とがあり、受部は上外方にのび、受部端部が丸くつまみ上げているもの（22～24）がある。23は平底風の底部をもち、底部外面に回転ヘラ切り痕が残る。底部外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデ調整を施す。

1～10の环蓋、11～18の环身は7世紀～8世紀中頃、19～24の环身は6世紀後半～7世紀前半頃のものと思われる。

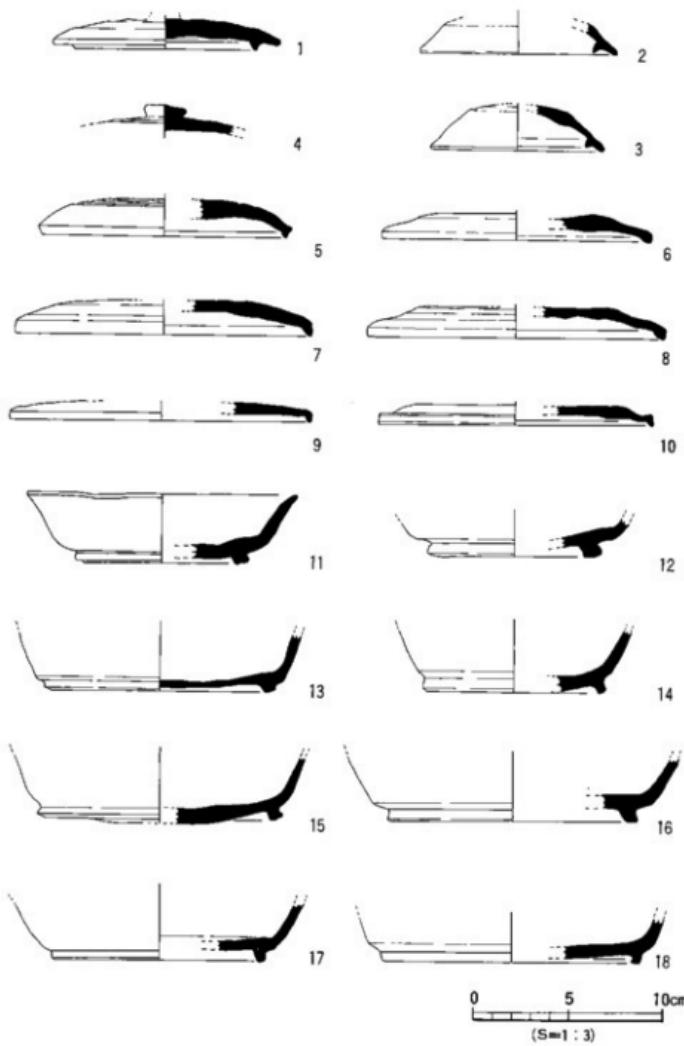
高环（第14図25～28） 25・26は無蓋高环の环部。やや内湾気味に立ち上がる体部をもち、中央付近に稜をもつ。25は口縁部がやや外反し端部は丸く仕上げられている。内外面ともに回転ナデ調整を施す。27・28は高环脚部。27は「ハ」の字状に開く脚部に透かしがみられる。28は比較的細い脚基部をもち、脚中位付近に2条の沈線が巡る。内外面ともに回転ナデ調整を施す。

これら高环は、25・27は6世紀後半、26・28は7世紀前半代に比定されよう。

壺（第14図29・30） 29は口径25cmを測るやや大型の壺である。口縁端部は下外方へ肥厚し端部は丸く仕上げられている。30は壺の肩部片。内面には円弧叩きを施す。外面はナデ調整を施し、頭部にヘラ記号が認められる。

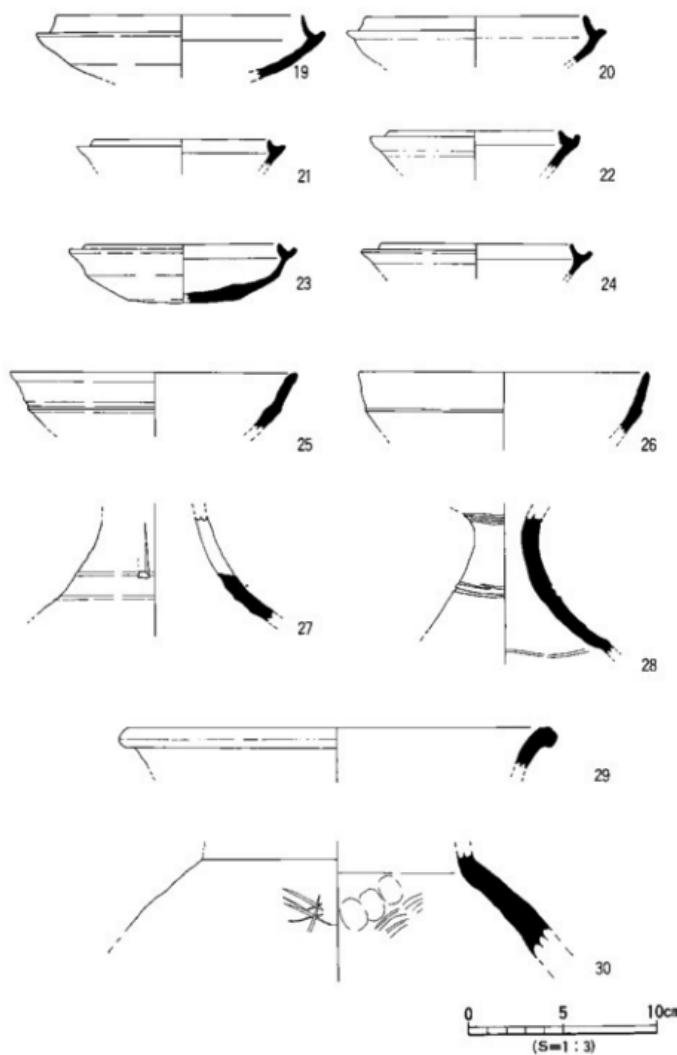
壺（第15図31～35）

調査の概要



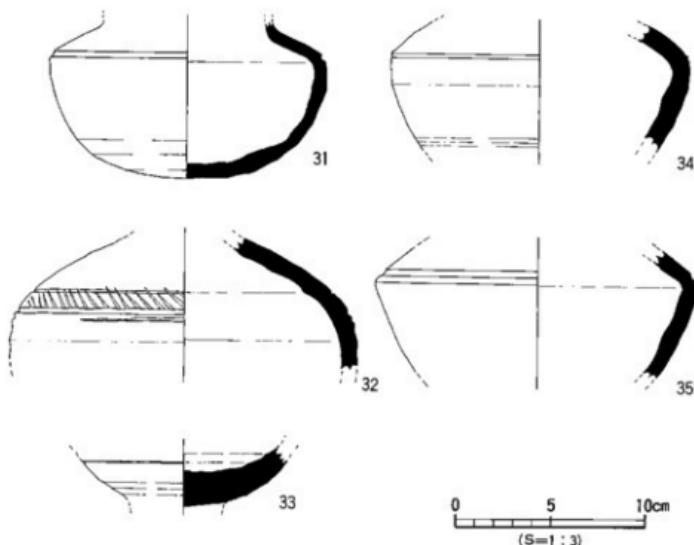
第13図 第II層出土遺物実測図(1)

朝美澤遺跡 2 次調査



第14図 第II層出土遺物実測図(2)

調査の概要



第15図 第II層出土遺物実測図(3)

短頸壺 (31) 口縁部は欠損している。扁球形の体部から鋭く屈曲する肩部には1条の凹線が巡る。体部下半部には回転ヘラ削り調整が施され、その他は内外面ともに回転ナデ調整を施す。

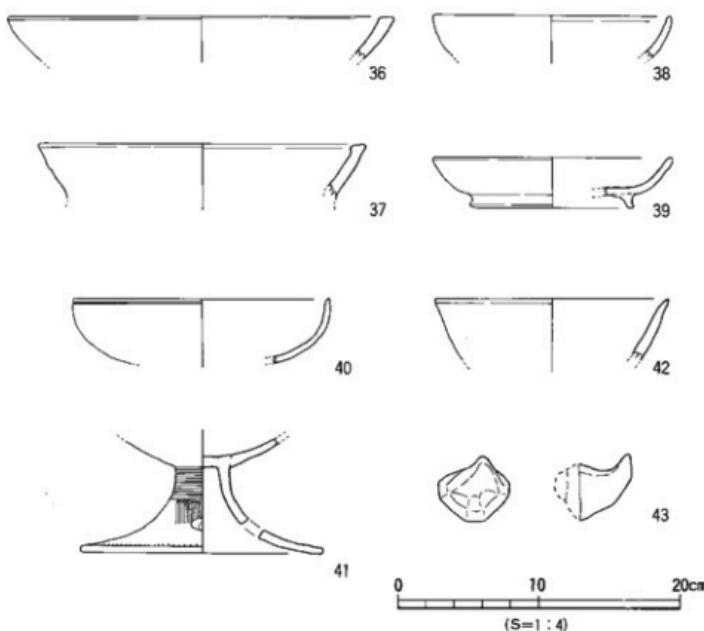
長頸壺 (32~35) 32は体部から鈍く屈曲する肩部に2条の凹線が巡り、凹線間に左上がりの列点文を施す。33は台付き長頸壺と思われ、底部に台部貼り付けによる接合痕が認められる。34は半球形の体部から稜をもって屈曲する肩部には1条の凹線が巡る。外面体部下半には回転ヘラ削り調整を施す。その他は内外面ともに回転ナデ調整を施す。35は半球形の体部から稜をもって屈曲し、肩部は「ハ」の字状に強く内傾する。屈曲部には段状の凹線が1条巡る。内外面ともに回転ナデ調整を施す。

これらの壺については、31・32は6世紀後半に、33~35は7世紀代に比定されよう。

(土師器) (第16図36~43)

変形土器 (36・37) 口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は内傾する不明瞭な段をなす。37は、わずかに内端部が肥厚する。

楕形土器 (38) やや内湾気味に立ち上がる口縁部をもち、口縁端部は丸く仕上げる。端部内面に不明瞭な稜をなす。内外面ともに丁寧なヨコナデを施す。



第16図 第II層出土遺物実測図(4)

有台坏 (39) 高台の付く坏。外上方にやや内湾しつつのびる口縁部をもち、端部は丸い。高台は「ハ」の字状に付き、平坦面で接地する。

高坏 (40~42) 40は高坏の坏部で内湾気味に立ち上がる口縁部をもち、口縁端部はわずかながら面取り調整がみられる。口縁部外面に1条の沈線が巡る。内外面共にミガキ調整を施す。41は直立気味な柱部と、大きくラッパ状に聞く裾部とからなる。柱部には14条の沈線が巡り、裾部中位には、3方向の円孔を穿ち、裾端部外面には半截竹管文が巡る。外面は縱方向のミガキを施す。40・41は出土状況から同一個体と考えている。42は内湾気味に立ち上がる口縁部をもち、端部付近でわずかに外反する。端部は尖り気味に丸い。内外面ともにヨコナデを施す。

瓶 (43) 瓶の把手と思われる。

これらの土師器は5~6世紀代のものと考えられる。

調査の概要

第Ⅳ層出土遺物（第17・18図、図版10・11）

壺形土器（44～46） 44・45は口縁が断面逆「L」字状の壺形土器。いずれも、口縁部内面がわずかに突出している。口縁端部は44が、やや丸みを帯びた面をなすのに対し、45は丸く収めている。内面は、いずれも横方向のヘラミガキを施す。46は口縁が「く」字状の壺形土器。口縁端部は丸い。内外面ともにヨコナデを施す。44・45は弥生中期中葉、46は後期のものであろう。

壺形土器（47～52） 47は壺の頸部に凸帯を貼り付け、その上下に各1条の沈線を施す。凸帶上に刷毛状工具による刻目がみられる。48・49は広口壺である。48は口縁部が直線的に大きく外方に開き、内面には円形浮文（径2cm）を貼付している。口縁部は下方に肥厚し、端面は外傾する。49は口縁部が上下に肥厚し、口縁端面は、わずかに内傾する凹面を呈している。口縁内部に粘土紐の貼付を施す。50は複合口縁壺。口縁の接合部は「く」字状を呈し口縁拡張部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸く仕上げる。口縁拡張部外面に波状文を施す。51・52は凹線文壺である。51は口縁端部が下方に肥厚し、2条の凹線が巡る。頸部外面には縱方向、内面は横方向の刷毛目調整を施す。52は口縁端部が上下方に肥厚し、6条の凹線が巡る。内外面共に刷毛目調整の後、ナデ調整を施す。以上の壺形土器については、47・50が弥生後期後半、51・52が中期末～後期初頭、48・49が中期中葉段階のものであろう。

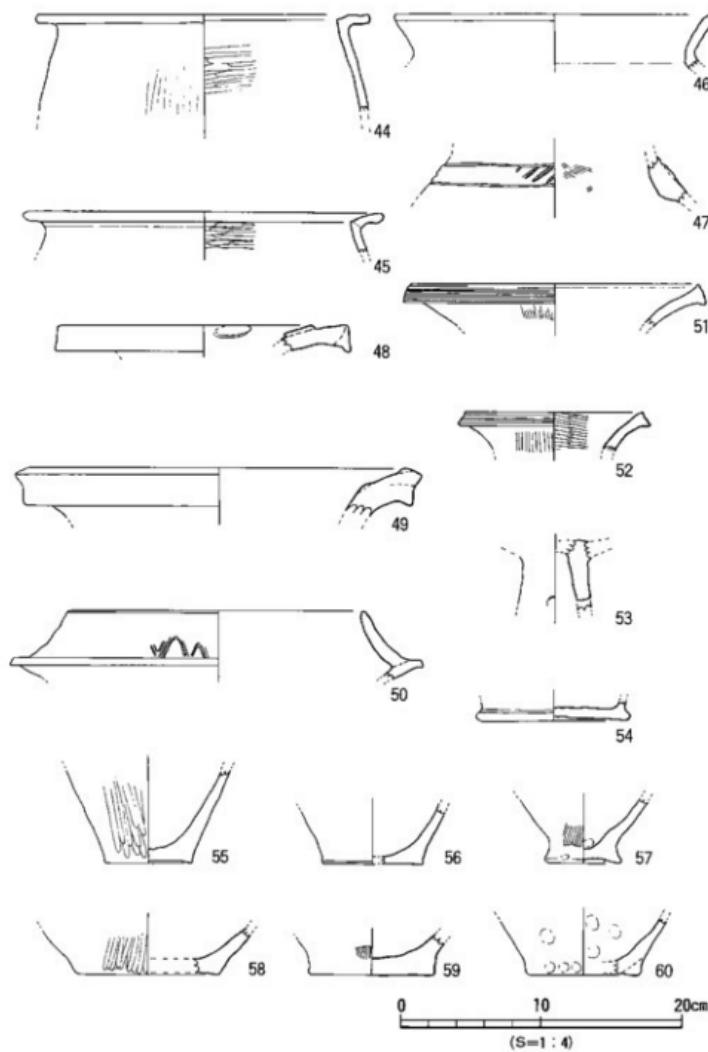
高坏形土器（53） 脚部片。小片のため器形ははっきりしないが、わずかに円形の透かしあとが看取される。手法的には、内面はナデ調整を施す。弥生後期後半のものであろう。

ジョッキ形土器（54） ジョッキ形土器の底部片。上げ底で突出部をもつ。内外面共にナデ調整を施す。弥生中期中葉段階のものであろう。

底部（55～60） 55～57は壺形土器、58～60は壺形土器の底部である。55はやや上げ底で、底部より直立気味に上外方に立ち上がる。胴部外面にヘラミガキ、底部外面はナデ調整を施す。56はやや突出した平底の底部片。内面に指頭圧痕が確認でき、外面はナデ調整である。57はくびれのやや上げ底の底部。内湾気味に立ち上がる胴部をもち、胴部外面は刷毛目調整、底部外面には指頭圧痕が認められる。58は推定底径10cmを測るやや上げ底の壺の底部。外面はヘラミガキ、内面はヨコナデ調整を施す。59はやや突出した平底の底部片。胴部外面はわずかに刷毛目調整がみられ、底部外面は、ナデ調整を施す。60は断面三角形の突出部を貼付した壺の底部。わずかに上げ底で、底部より内湾気味に立ち上がる。胴部外面に、指頭圧痕が顕著にみられる。底部外面はヨコナデ、内面はナデ調整を施す。以上の底部については、弥生中期中葉から後期のものである。

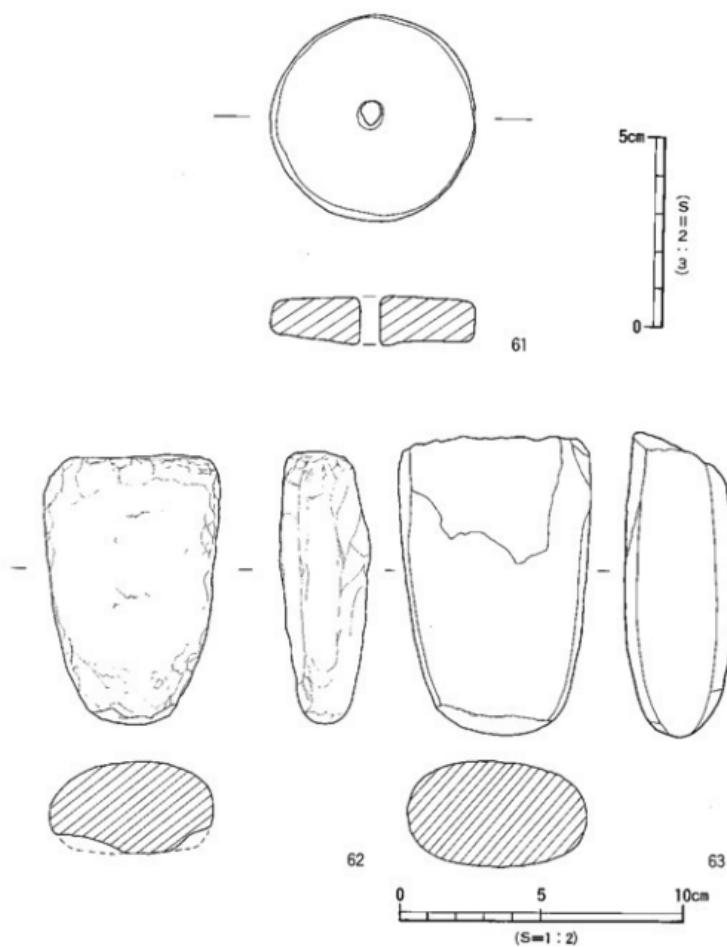
紡錘車（61） 61は土製紡錘車である。法量は、直径5.2～5.3cm、厚さ1.2～1.3cm、重さ45.6gである。円孔は焼成前穿孔で、径6～7mmを測る。

石斧（62・63） 姫刀石斧である。63は仕上げの研磨は丁寧である。



第17図 第Ⅲ層出土遺物実測図(1)

調査の概要



第18図 第Ⅲ層出土遺物実測図(2)

第Ⅲ層出土遺物 (第19~27図、図版12~18)

臺形土器 (64~88) 64~79は如意形の口縁部で、口唇部に刻目を施すものである。刻目は、口唇部全面に施すもの (64・70~73・77・78) と、下端に施すもの (65~69・76~79) がある。

肩部の張りは64にはみられず、66～68は若干の弱い張りをもつものである。70と75は、口縁部の折り曲げが強く75の外面には横向方向の刷毛目調整が顕著にみられる。金ウンモを多く含む。80～84は、肩・胴部片でいずれも有段で刻目を施す。80は、肩部片で、成形の際の粘土接合痕が顕著にみられる。81～84は胴部片である。また、刻目は、浅くて小さいもの（80～83）と、深く刻み込むもの（84）とがある。85～88は、縄文晚期の凸帯文系の系譜をひくものである。85は、口唇部が尖り、口縁直下に貼り付け凸帯を巡らせ、刻目を施す。内外面共にナデ調整が看取できる。小片である。86は、口縁端部にわずかに凸帯を巡らせ刻目を施す。外面は、縱方向の刷毛目調整が施されており、弥生化した凸帯文系土器とみなすことができる。小片である。87は、口縁部が部分的なつまみ出しにより緩やかに波うつ。口縁直下に凸帯を巡らせ刻目を施す。内面は、丁寧なヘラミガキ調整が看取できる。松山平野において他に出土例をみない。88は口縁内側に刺突文を施す。92～97は壺形土器の底部で、92～95は上げ底で、96・97は平底である。

89～91は縄文後期の遺物である。89は、内溝気味に緩やかに立ち上がる口縁をもち、口唇部がわずかに先細りする。90は、緩やかに外反しながら立ち上がる口縁部である。いずれも、口縁部外面に縄目文を施す。91は磨滅のため調整は明確ではない（条痕か）。

壺形土器（98～148） 口縁部の法量（推定）より、大型品（30cm以上）、中型品（15～30cm未満）、小型品（15cm未満）の三つに分類できる。

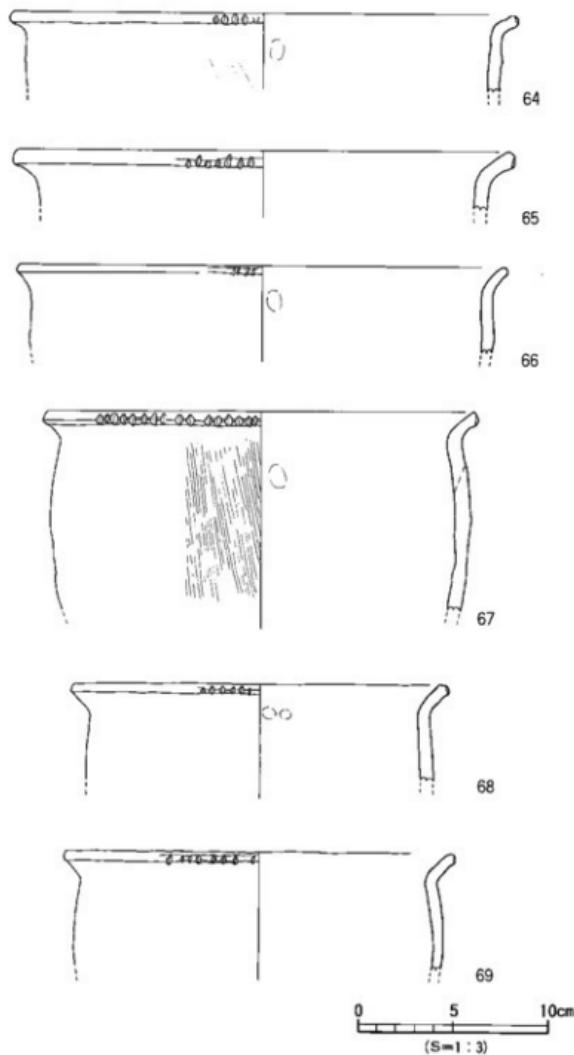
大型品（98～108） 98～100は緩やかに外反し、口縁下には不明瞭な段をもつ。器壁は厚く、口縁端面は「コ」字状を呈する。98は成形時の粘土接合痕が顕著にみられる。101～103は大きく屈曲する口縁で、口縁下には不明瞭な段をもつ。103は口縁直下に指頭痕を顕著に残す。104～108は緩やかに外反し、口縁下には不明瞭な段をもつ。107は小片にて段の有無は不明である。口縁端面には1条の沈線文を巡らす。器壁は厚く口縁端面は「コ」字状を呈する。108は、緩やかに外反する口縁で、口縁部下端に刻目を施す。口縁下には不明瞭な段をもつ。他の土器と様相を異なる。

中型品（109～120） 109～112は、緩やかに外反し、口縁下には不明瞭な段をもつ。113～120は大きく屈曲し、口縁下には不明瞭な段（117～120、小片にて不明）をもつ。また、口縁端部は「コ」字状を呈するもの（109～111・113・115）と、丸く仕上げるもの（112・114・116～120）がある。115・116・119は、成形時の粘土接合痕が顕著にみられる。

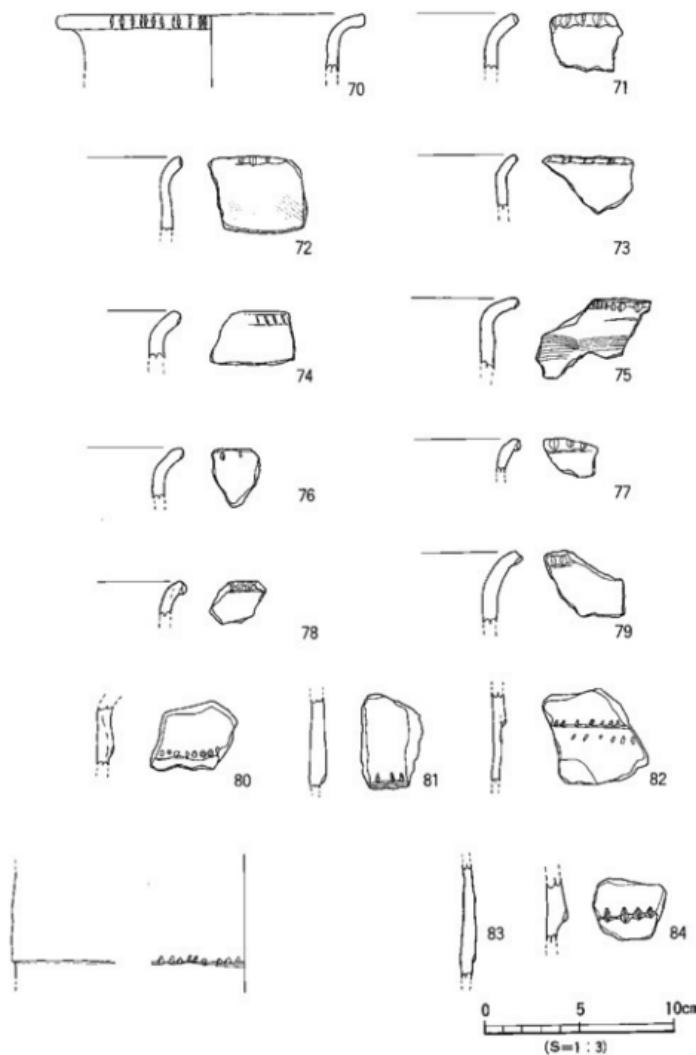
小型品（121～123） 121は、口縁が「く」字状に屈曲し、口縁下には、不明瞭な段をもつ。内外面共に、横向方向のヘラミガキが施され焼成も極めて良いものである。122は、緩やかに屈曲する口縁で、頸部には凸帯を巡らせ凸帯上に刻目を施すもので、他の土器とは異なった様相を示す。123は、緩やかに外反する口縁で、口縁下に段（沈線の可能性もある）をもつ。

頭・胴部片（124～143） 施文で分類すると、横沈線文・木葉文・弧文・山形文・刺突文・竹管文・縱方向の区割と7つに分類できる。

調査の概要

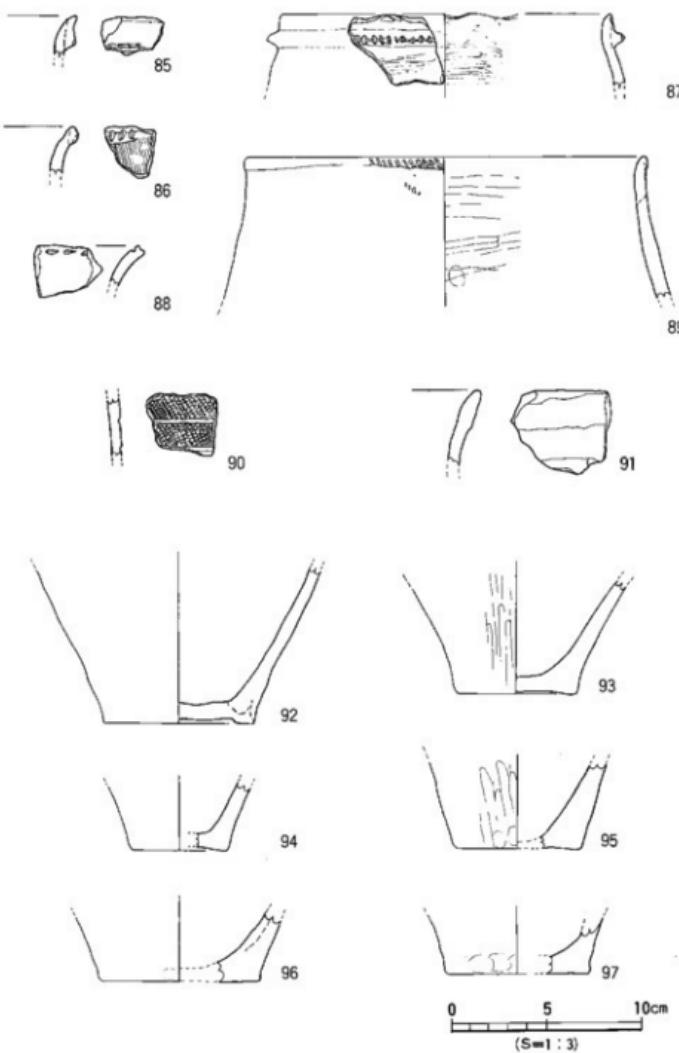


第19図 第III層下層部出土遺物実測図(1)

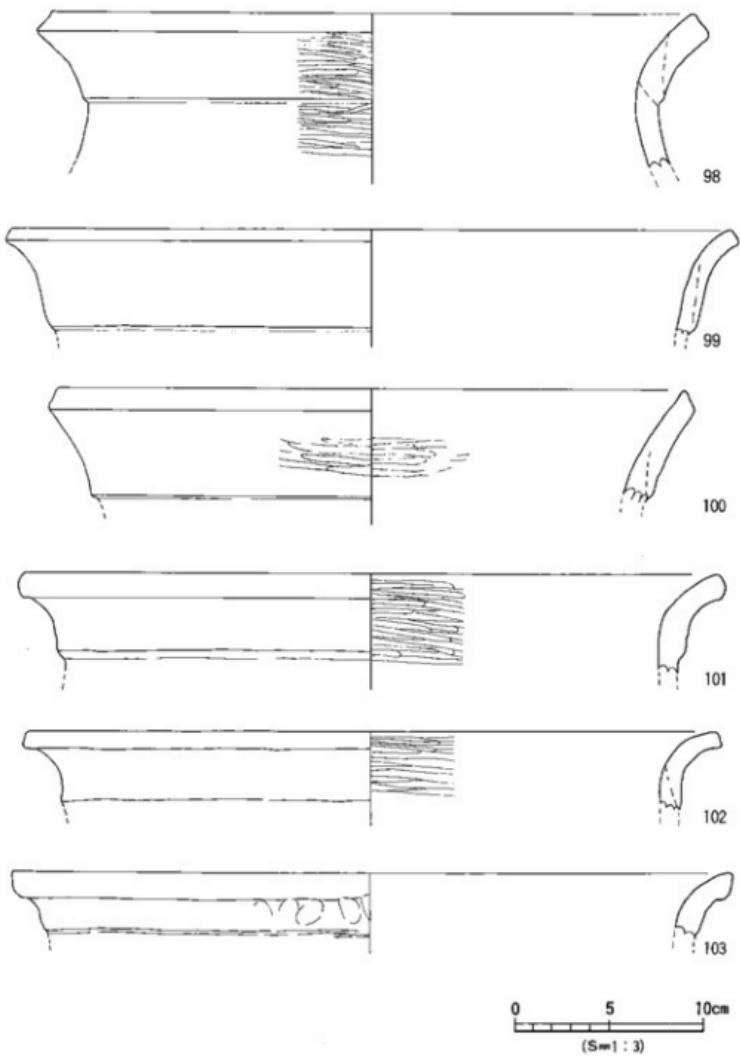


第20図 第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(2)

調査の概要

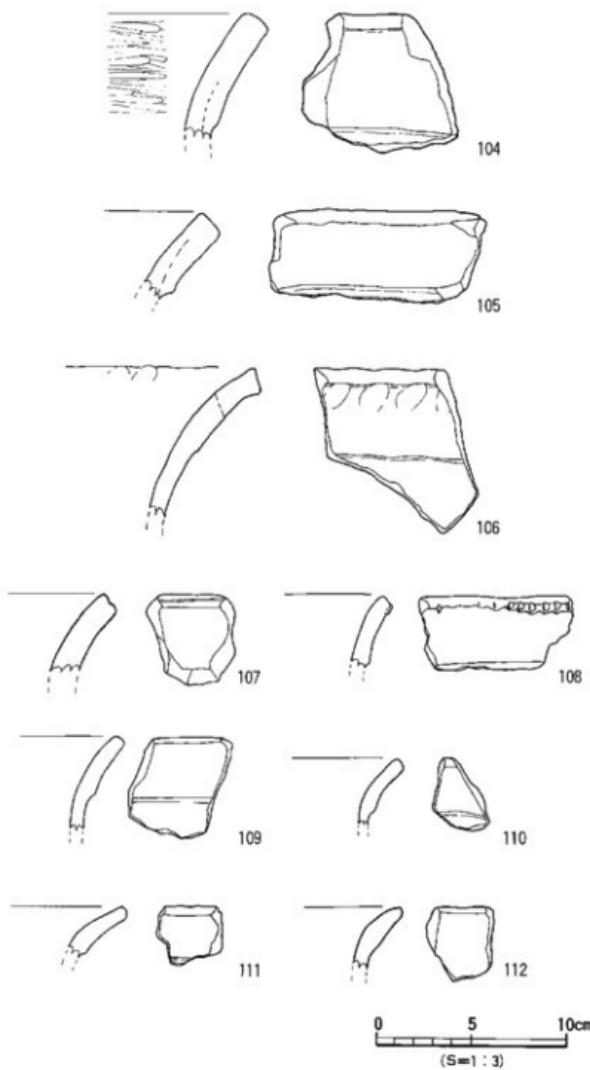


第21図 第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(3)



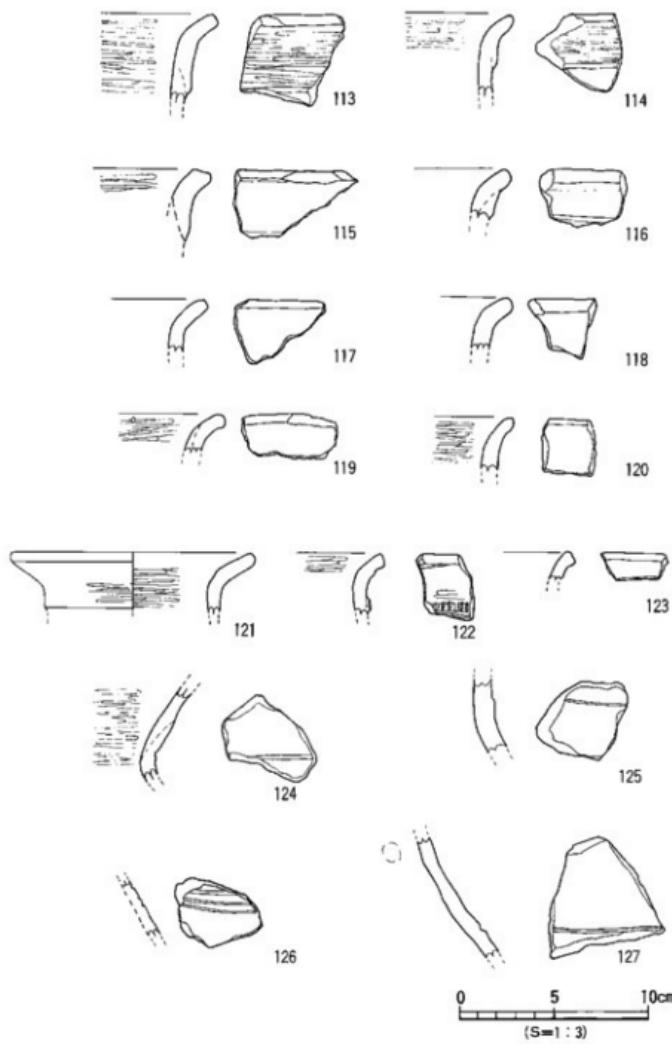
第22図 第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(4)

調査の概要



第23図 第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(5)

朝美澤遺跡 2 次調査



第24図 第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(6)

調査の概要

沈線文（124～127） 124・125は頸部片で、頸部と肩部の境に1条の沈線文を施す。126・127は肩部片である。126の上部は削り出し状で、下部は2条の沈線文を施す。127は、1条の沈線文を施すもので、外面は丁寧な横方向のヘラミガキを行う。

木葉文（128・129） 胴部片である。128は、無軸のもので、ミガキ後4～6条の浅い沈線で木葉を描く。129は無軸で、屈曲下（沈線状）に1条の沈線で木葉を描く。磨滅のため文様構成は明確ではない。

弧文（130～132） 130は、1条の沈線文下に3条の下弦の重弧文を施す。131・132は小片のため文様の構成は明確ではないが、131は浅い沈線文を、132は深めの沈線文を施す。

山形文（133～138） 胴部片である。133は、2条以上の沈線文下に4条の山形文を施す。134は、ミガキ後1条以上の浅い横沈線文下に4条の弧を描くような山形文を施す。135は、小片のため文様構成が不明であるが、深い沈線文を施す。136は、削り出し状の段下に1条の横沈線文を施し2条の山形文を施す。137・138は、胴部最大径部に施すもので、137は山形文を、138は上下に1～2条の横沈線文を施し、沈線文間に斜線文を施すものである。

刺突文（139） 胴部片で、沈線間に刺突文を施す。

竹管文（140） 胴部片である。小片にて文様構成は明確ではないが、横沈線文と直径3mmの大竹管文を施す。

縱方向の区割り（141～143） 141は、数条の沈線文間に施す。142は、頸部片で、沈線文下に縦の浅い沈線文を数条施す。143は横沈線文下に、縦の沈線文を施す。小片。

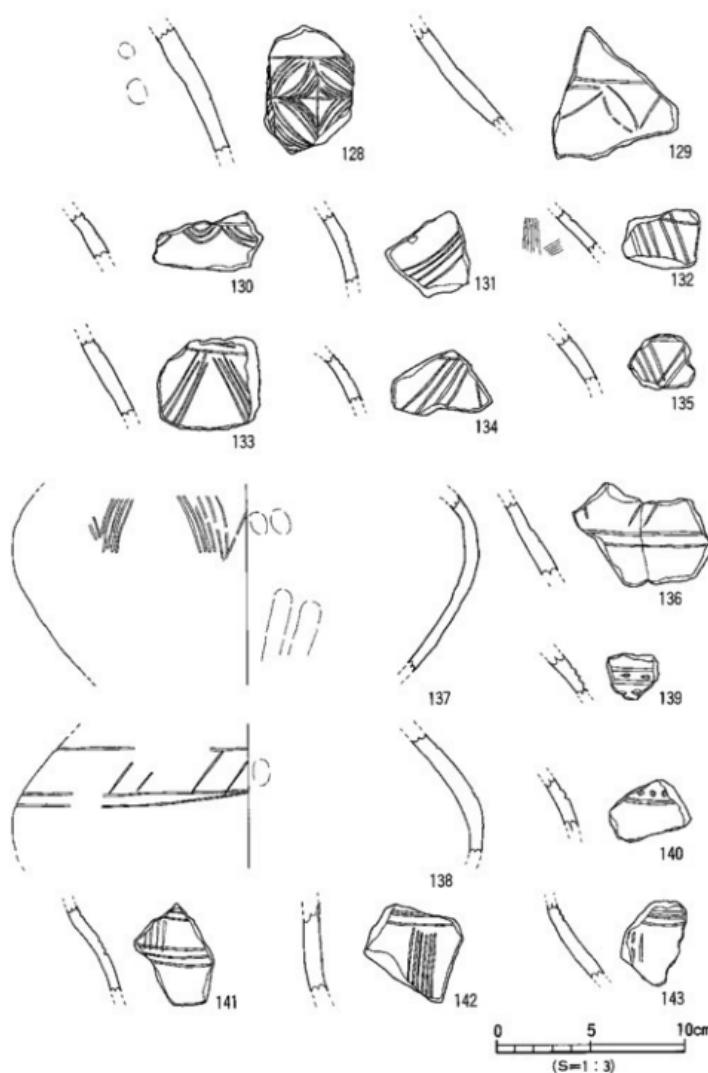
底部（144～148） 144は、大型の臺底部で、平底である。145～148はわずかに上げ底を呈するもので、外面にヘラミガキを施すものもある（145・146・148）。

高环形土器（149～153） 149・150は环部片で、口縁内面は直線的でわずかに肥厚し段をもつ。いずれも口縁端部は「コ」字状を呈する。現時点できれらの出土は当平原内では初例である。151は环部片で、接合部が屈曲し緩やかに外反する（鉢になる可能性もある）。152は内面が肥厚し段をもつ。端部は丸くおさめる。小片である。153は脚部片で、「ハ」の字状に立ち上がる。外面は剥離の為、据部の施文（段・沈線）の有無は確認できない。内面はナデ調整である。

鉢形土器（154～162） 154～160は直立ないし、やや内湾気味に立ち上がる直口の口縁部をもつ。端部は面取りし「コ」字状を呈するもの（154～157）と、丸くおさめるもの（158・159）と、先細りしやや尖り気味のもの（160）がある。また154は、ヘラミガキが、156は、刷毛目調整がみられる。161は大型の鉢で、口縁部が厚く丸い。如意形の口縁で、口縁下に不明瞭な段をもつ。内外面共に丁寧なヘラミガキを行う。162は口縁下に屈曲部をもつ。端部は丸くおさめる。

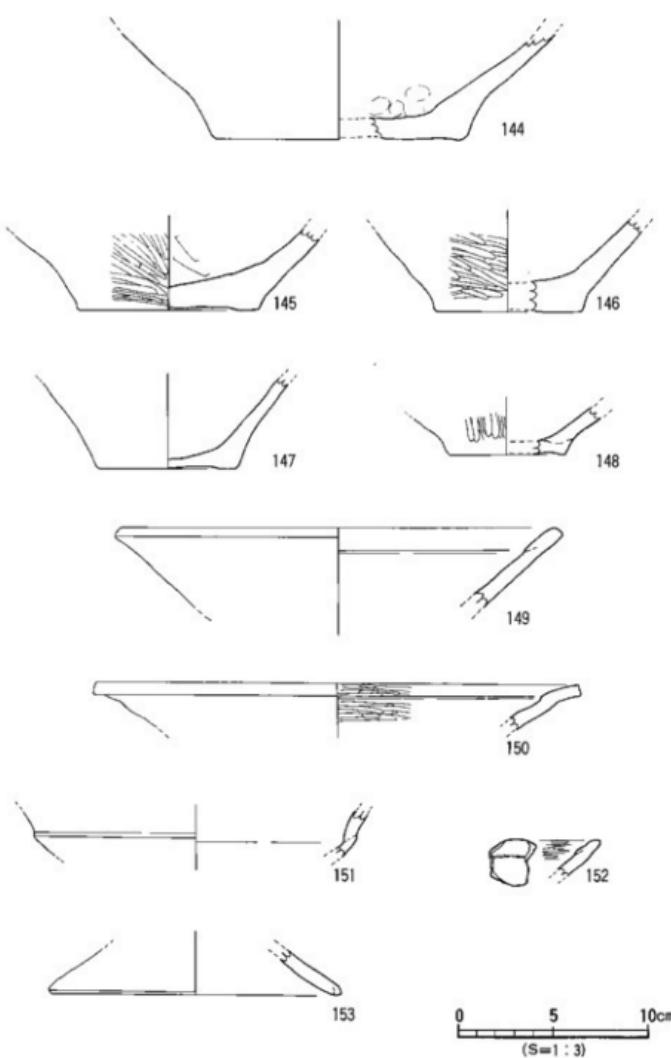
ミニチュア品（163） 平底で、直線的に立ち上がる。外面に工具痕を看取する。

[水口]

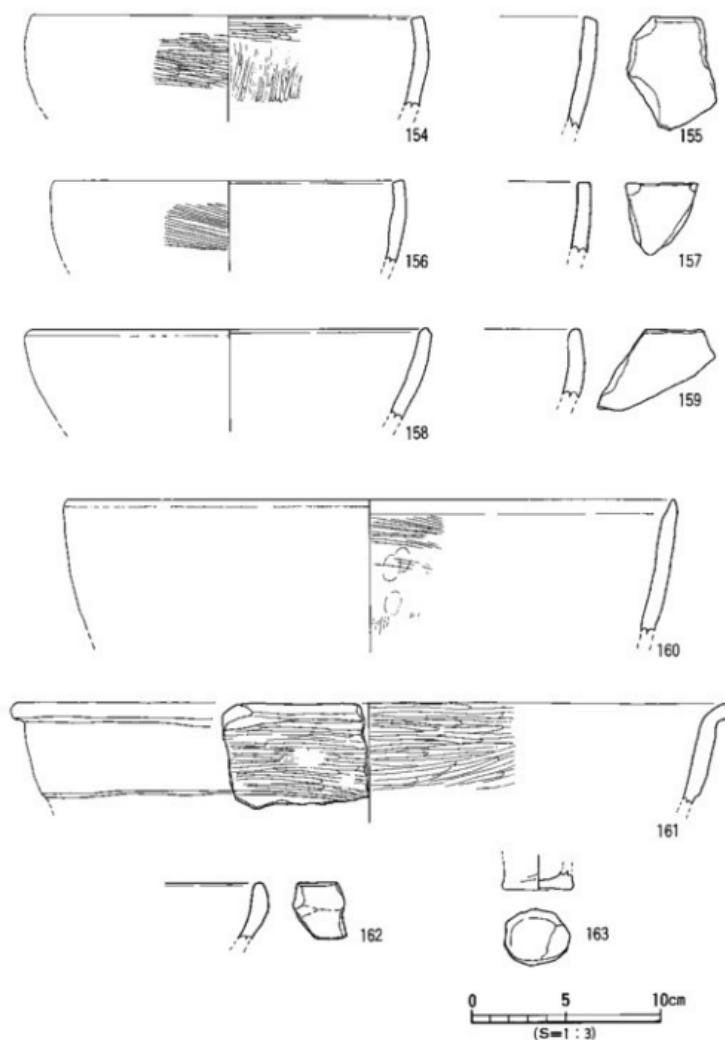


第25図 第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(7)

調査の概要



第26図 第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(8)



第27図 第III層下層部出土遺物実測図(9)

4 小 結

本調査において弥生時代から中世までの遺構と遺物を確認することができた。弥生時代については、土壙SK1と包含層からの弥生土器の検出があったことから、本調査地周辺及び本調査地から上の大峰ヶ台丘陵上～中腹部に、同時代の集落が存在していたことを物語っている。事実、大峰ヶ台丘陵の山頂部、大峰ヶ台遺跡において弥生時代中期の集落関連遺構が検出されている。また、本調査地の南300mの地点の澤遺跡においても、弥生時代後期の壺棺墓などが検出されている。これらのことから、弥生時代を通じて、大峰ヶ台丘陵を基盤として同時代の集落が存続していたものといえよう。

ついで、古墳時代の遺構と遺物が認められる。同時期の遺跡は、辻遺跡2次調査において、掘立柱建物址を検出しているが、本調査地近隣に存在する古墳時代集落に関連して、溝SD1～3などの遺構が存在するものと考えられる。引き続き古代からの中世の遺構と遺物を確認している。掘立柱建物址3棟及び遺物包含層（須恵器・土師器）である。掘立柱建物址については、層位関係・出土遺物等から10世紀以降に建てられたものと考えられる。澤遺跡においても同時代の掘立柱建物址が検出されていることから、当地を含め、ごく近隣地域に同時代の集落が存在し、継続して営まれていたものと考えてよかろう。今後は資料収集を重ね、大峰ヶ台丘陵及び周辺地域の弥生時代から中世にいたるまでの集落の動態を明らかにし、その変遷を考えていかねばならないであろう。

次に、特筆すべきは、本調査検出の第Ⅲ層遺物包含層出土の弥生土器である。上層は、中・後期の遺物が混在しているが、下層では、前期の遺物のみが集中して出土した。この下層出土の弥生土器は、変形土器については、如意形口縁を呈するもの（刻目あり）の頸部に施文を施さず、壺形土器については、口縁部境に段をもち、高环形土器については、环内面に段を有している。これは板付IIa式（福岡県板付遺跡）に相当するものと考えられ、松山平野の弥生前期土器の中でも古い段階のものといえる。第Ⅲ層下層出土の弥生土器については、一括性の高いものであり、松山平野における弥生時代前期の土器編年を考えるうえで貴重な資料となるものである。今後、同時期の弥生土器を考えるうえでのひとつの指標となるものである。

〔参考文献〕

- 松村 淳 1989 「澤 遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』
- 栗田 茂敏 1989 「辻 遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』
- 松 山 市 1989 『松山市史料集 第2巻 考古編II』
- 愛 媛 県 1986 『愛媛県史 資料編 考古』
- 福岡市教育委員会 1976 『板付 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第35集』

朝美澤遺跡 2次調査

遺構・遺物の一覧

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

例) 繩文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。

(3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、

胴底→胴部下部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。

() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長(1~4)多→「1~4 mm大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。 例) ◎→良好、○→良、△→不良。

表2 摺立柱建物址一覧

摺立	規 模 (間)	方 位	桁 行		梁 行		床面積 (m ²)	時 期	備 考
			実長(尺)	柱間寸法(尺)	実長(尺)	柱間寸法(尺)			
1	2×4	東西	440(14.6)	4・3.3・4.0・3.3	300(10)	4.7・5.3	13.40	古代以降	2号摺立に切られる。
2	2×3	東西	550(18.3)	6.7・4.0・3.3	360(12)	6.7・5.3	19.44	古代以降	1号摺立を切る。
3	1×2	南北	350(11.7)	6.0・5.7	340(11.3)	11.3	11.90	古代以降	

表3 土壙一覧

土壤 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出 土 遺 物	備 考	時 期
1	D5	不整梢円	逆台形	1.6×0.7×0.12	褐色粘質土	弥生		弥生以降

表4 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出 土 遺 物	備 考	時 期
1	D2~D3	U字状	5.00×0.30×0.10	褐色土	須恵	摺立2に切られる。	古墳以降
2	D2	U字状	2.80×0.35×0.12	茶褐色土	弥生・須恵	摺立2に切られる。	古墳以降
3	C3~D3	V字状	8.20×0.32×0.10	褐色土	須恵・土師	摺立2に切られる。	古墳以降

遺物観察表

表5 第Ⅱ層 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 燒	土 成	備考	同版
				外 面	内 面					
1	环底	口径(9.5)	扁平な天井部から口縁部に ゆるやかに下がり、かえり は口縁底部より下がる。	回転ヘラ削り 回転ナゲ	回転ナゲ	灰色	密 ○			6
2	环底	口径(10.4)	笠形の天井部を持ち、かえ りは口縁底部より下がらな い。	回転ヘラ削り 回転ナゲ	回転ナゲ	青灰色	密 ○			
3	环底	口径(9.0) 残高 2.4	笠形の天井部を持ち、口縁 底部は丸い、かえりは口縁 底部より下がらない。	回転ヘラ削り 回転ナゲ 回転ナゲ	回転ナゲ	灰色	密 ○			6
4	环底	残高 1.2	扁平な腹宝珠様つまみ。中 央部が突出する。	回転ナゲ	ナゲ	灰色	密 ○			6
5	环底	口径(12.9)	天井部から、ゆるやかな弧 を描いて下がり、口縁部は 下方へ屈曲する。	回転ヘラ削り 回転ナゲ 回転ナゲ	回転ナゲ	灰白色	密 ○			
6	环底	口径(12.8) 残高 1.3	天井部から、わずかに段を なして下がり、口縁部は下 方へ屈曲。端部は丸い。	回転ヘラ削り 回転ナゲ	回転ナゲ	灰色	密 ○			6
7	环底	口径(15.6) 残高 1.8	やや丸味を持つ天井部を有 し、口縁部は下方へ屈曲。 端部は尖り気味に丸い。	回転ヘラ削り 回転ナゲ 回転ナゲ	回転ナゲ	緑灰色	密 ○			6
8	环底	口径(15.4) 残高 1.7	天井部から、わずかに段を なして下がり、口縁部は下 方へ屈曲。端部は丸い。	回転ヘラ削り 回転ナゲ 回転ナゲ	回転ナゲ	灰色	密 ○			6
9	环底	口径(15.7)	平坦な天井部を有し、口縁 部は下方へ屈曲。端部は丸 い。	回転ナゲ	回転ナゲ	灰色	密 ○			
10	环底	口径(14.5)	天井部と口縁部の接縫は明 確な段をなし。口縁部はき らんに下方へ屈曲。	回転ナゲ	回転ナゲ	青灰色	密 ○			
11	环身	口径(14.3) 底径(9.0)	割め上方に立ち上がる体部 をもち、口縁部は外反、高 台は内端面で接地。	回転ナゲ 回転ヘラ削り	回転ナゲ	灰色	密 ○			7
12	环身	底径(9.2)	体部と底部の接縫はわずか に緩くなす。高台は8の字 に開き、内端面で接地。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	緑灰色	密 ○			
13	环身	底径(11.7) 残高 3.0	垂直に対し、比較的厚みの ある高台が付く。高台は内 端面で接地。	回転ナゲ 回転ナゲ	回転ナゲ	灰色	密 ○			7
14	环身	底径(9.0) 残高 3.3	内部剥落味にたちあがる体部 を持ち、高台は底部端につ く。内端面で接地。	回転ナゲ	回転ナゲ	青灰色	密 ○			7
15	环身	底径(12.0)	割め上方に立ちあがる体部 を持ち、高台は底部端につ く。内端面で接地。	回転ナゲ 回転ヘラ削り 回転ナゲ	回転ナゲ	灰白色	砂粒 ○			7
16	环身	底径(13.1)	幅広の高台が底部端よりや や内側に付く。内端面で接 地する。	回転ナゲ	回転ナゲ	緑灰色	砂粒 ○			7
17	环身	底径(11.0) 残高 3.0	やや内溝気味にたちあがる 体部をもち、高台は平坦面 で接地。	回転ナゲ 回転ナゲ	回転ナゲ ナゲ	灰色	密 ○			7

朝美澤遺跡 2次調査

第Ⅱ層 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内面)	胎 焼	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
18	环身	底径(12.6)	高台は体部と底部の境界付近に付き、平坦面で接する。	⑪ 回転ナゲ ⑫ ナゲ	回転ナゲ	灰白色	素 ○			
19	环身	口径(13.1)	たちあがりは内傾し、端部は尖る。受部は上外方に延びる。	⑬ 回転ヘラ削り	回転ナゲ	灰色	素 ○	自然釉		
20	环身	口径(11.5)	たちあがりは内傾し、端部は尖り気味に丸い。受部はほぼ水平。	⑭ ナゲ ⑮ 番誠のため不規	回転ナゲ	青灰色	素 ○			8
21	环身	口径(9.3)	たちあがりは短く内傾し、端部は丸い。受部はやや上外方に延びる。	⑯ 回転ナゲ	⑰ 回転ナゲ	青灰色	素 ○			
22	环身	口径(9.0)	たちあがりは短く内傾し。受部は上外方にひねり出されている。	回転ナゲ	回転ナゲ	灰色	素 ○			8
23	环身	口径(12.0) 基高 3.0	たちあがりは短く内傾。端部は平底氣で回転ヘラ切り痕を残す。	⑱ 回転ナゲ ⑲ 回転ナゲ ⑳ 回転ヘラ削り	回転ナゲ	灰白色	砂粒 ○			8
24	环身	口径(10.0) 残高 1.6	たちあがりは短く、やや内傾し、端部は尖り気味。受部は上方にひねり出し。	回転ナゲ	回転ナゲ	青灰色	素 ○			
25	無蓋 高环	口径(15.1)	長い縫をもち、縫隙上に凹窓がある。内湾気味の体部から口縫部は外反。	回転ナゲ	回転ナゲ	青灰色	素 ○			8
26	無蓋 高环	口径(15.2)	縫をもち、体部はやや内湾気味にたたかがる。口縫端部は尖り気味に丸い。	回転ナゲ	回転ナゲ	青灰色	素 ○			
27	高环	残高 5.0	八の字形に聞く脚部の外側に不明瞭な2条の凹縫。スカシあり。	回転ナゲ	回転ナゲ	灰色	素 ○	自然釉		
28	高环	残高 8.3	比較的細い基部をもつ。中位附近に2条の凹縫を残す。	回転ナゲ	回転ナゲ	灰白色	砂粒 ○			9
29	壺	口径(22.4)	口縫部は下外方へ肥厚し、端部は丸く上げる。	回転ナゲ	回転ナゲ	青灰色	素 △			
30	壺	腹部径 (14.6)	腹部からゆるやかに聞く肩部をもつ。肩部外側にはウズボリあり。	ナゲ	円弧印き ナゲ	青灰色	素 ○			9
31	短頸壺	腹部径 (14.5)	短頸形の体部から強く弧曲する。肩部に1条の凹縫が通る。	⑪ 回転ナゲ ⑫ 回転ナゲ ⑬ 回転ヘラ削り	⑭ 回転ナゲ ⑮ 回転ナゲ ⑯ ナゲ	青灰色	素 ○			9
32	長頸壺	残高 6.5	球形の体部からゆるやかに肩部に至る。肩部に2条の凹縫。凹縫間に判点文。	回転ナゲ	回転ナゲ	青灰色	素 ○	自然釉		8
33	長頸壺	残高 6.5	舌付の長頸壺の底部。外側に台部貼り付けによる接合痕があり。	⑭ 回転ヘラ削り	⑮ 同心円印き	灰色	素 ○	自然釉		9
34	長頸壺	腹部径 (15.5)	半球形の体部から縫をもつて弧曲する肩部に1条の凹縫が通る。	⑯ 上) 回転ナゲ ⑯ 下) 回転ヘラ削り	回転ナゲ	灰色	素 ○			8

遺物観察表

第Ⅱ層 出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面)色調 (内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
35	長筒壺	口径(17.0)	半球形の体部から腰をもって傾曲し、肩部は強く内傾。1条の凹縫あり。	回転ナゲ	回転ナゲ	灰白色	密 ○		8
36	甕	口径(25.6)	内窓気味にたちあがる口縁部をもち、端部は内側する不規則な段をなす。		磨滅のため不明	非褐色	石・長 (1~6) ○		10
37	甕	口径(23.0)	内窓気味な口縁部で端部は内側する段、口縁内端部がわずかに肥厚。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	暗褐色 褐色	石・長 (1~7) ○		
38	甕	口径(16.4)	内窓気味な口縁部で端部は丸い。端部、内面に不明瞭な段をなす。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	乳褐色	密 ○		10
39	甕	口径(16.6) 底径(11.4)	外上方に内窓しつつのびる口縁部をなし、端部は丸い。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	乳褐色	密 ○		
40	高杯	口径(18.2)	内窓する口縁部をなし、端部はわずかに肥厚り。口縁外縁に1条の沈縫。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	褐色	密 ○		9
41	高杯	底径(17.3) 高さ 8.2	直立気味な柱部とウバ状の脚部。柱部4處の捺縫、脚部は半截竹管文。		ヨコナゲ	茶褐色	密 ○		9
42	高杯	口径(16.2)	内窓気味な口縁部をもち、端部付近で外反、端部は尖り気味に丸い。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	褐色	石・長 (1~3) ○		10
43	甕		渦曲しながら上方方にのびる把手。	磨滅のため不明		褐色	石・長 (1~5) ○		10

表6 第Ⅲ層 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面)色調 (内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
44	甕	口径(23.4)	口縁述「L」字状。口縁端部はやや丸みを帯びた面をなす。	⑪ ヨコナゲ ⑫ タテハケ	⑪ ヨコナゲ ⑫ 横ミガキ	黄褐色	益 (1~3) ○		10
45	甕	口径(25.0)	口縁述「L」字状。口縁端部は丸い。	ヨコナゲ	⑪ ヨコナゲ ⑫ 横ミガキ	明赤褐色	石・長 (1~6) ○		
46	甕	口径(22.2)	口縁述「し」字状。端部内面は不明瞭な段をなす。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	黑褐色 褐色	石・長 (1~2) ○		10
47	甕	底径(14.2)	端部に凸帶貼付。凸帶上下に1条の沈縫。凸帶上面に刻目を施す。		ハケ (8本/1cm)→ ナゲ	淡灰褐色	石・長 (1~2) ○		
48	甕	口径(23.9)	口縁部は下方に肥厚し、口縁地面は内側する凹面をなす。粘土紐貼付。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	暗褐色	石・長 (1~3) ○		
49	甕	口径(28.7)	口縁部は上下に肥厚し、口縁地面は内側する凹面をなす。粘土紐貼付あり。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	漆褐色	石・長 (1~3) ○		11

朝美澤遺跡 2次調査

第Ⅲ層 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	回数
				外 面	内 面				
50	盃	口径(21.2)	複合口縁型。口縁部外面に波状紋。施部は内面気味で、端部は丸い。	⑪ 磨滅のため不明 ⑩ ナデ	ヨコナデ	褐色	石・長 (1~2) ○		10
51	盃	口径(12.3)	凹輪文盃。口縁端部は下方に肥厚し、2条の凹輪が通る。	⑪ ヨコナデ ⑩ テテハケ (5本/1cm)	ヨコハケ (5本/1cm)	赤褐色	石・長 (1~3) ○		10
52	盃	口径(20.2)	口縁端部は上方方に肥厚し、6条の凹輪が通る。	⑪ 磨滅のため不明 ⑩ テテハケ (5本/1cm)→ナダ	ハケ→ナダ	茶褐色	石・長 (1~2) ○		10
53	高杯	底径 4.7	高杯脚部。円孔が取られる。	磨滅のため不明	ナダ	淡褐色	石・長 (1~2) ○		
54	ショット	底径(10.2)	ジヨッキ型土器の底部。上げ底で突出部をもつ。	⑪ ヨコナデ ⑩ 磨滅のため不明	ナダ	褐色	石・長 (1~2) ○		
55	甕	底径 (6.0)	やや上げ底。底部より直立気味に外方にたらあがる。	⑪ テテミガキ ⑩ ナダ	ナダ	茶褐色 灰褐色	石・長 (1~5) ○		11
56	甕	底径 (8.0)	やや突出した平底の底部。内面に指觸圧痕あり。	⑪ ヨコナデ ⑩ ナダ	ナダ	褐色 灰色	石・長 (1~2) ○		
57	甕	底径 5.0	くびれでやや上げ底を呈する底部。	⑪ ハケ (3本/1cm) ⑩ ナダ(指觸圧痕)	磨滅のため不明	黄褐色 灰褐色	● ○		11
58	甕	底径(10.0)	やや上げ底の底部。	タチミガキ	ヨコナデ	黒褐色 黄褐色	石・長 (1~2) ○		
59	甕	底径 (9.0)	やや突出した平底の底部。内面に指觸圧痕あり。	⑪ テテハケ ⑩ ヨコナデ	ナダ	茶褐色	石・長 (1~3) ○		
60	甕	底径 (8.0)	くびれのやや上げ底。底部より内面気味にたらあがる。内外面に指觸圧痕。	ナダ	ナダ	黄褐色	跡付 ○		
61	特種甕	底径 5.3 厚さ 1.3 重さ 45.6g	焼成前円孔。円孔直徑7mm。中央が突出する。	ナダ		茶褐色	石・長 (1~2) ○		11

表7 第Ⅲ層 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	回数
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
62	石斧	ほぼ完形	綠泥片岩	9.4	6.2	3.3	283.9		11
63	石斧	ほぼ完形	蛇紋岩	10.4	6.6	3.7	427.1		11

遺物観察表

表8 第Ⅲ層下部 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外)色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
64	甕	口径(26.4) 残高 4.0	口沿全面に刻目を施す。	⑪ ヨコナデ ⑫ ハケ→ナデ消し	⑬ ヨコナデ ⑭ ナデ	灰褐色 黄褐色	石・金(1~2) 金 ○		12
65	甕	口径(25.0) 残高 3.1	口沿面取りし下端に刻目を施す。 裏底のため不明		⑮ ヨコナデ	灰褐色 黄褐色	石・金(1~2) 金 ○		12
66	甕	口径(25.1) 残高 4.5	わずかに例が残る。 口沿下端に刻目を施す。	⑯ ヨコナデ ⑰ ナデ	⑯ ヨコナデ ⑰ ナデ	灰褐色 黄褐色	石・金(1~2) 金 ○		
67	甕	口径(22.4) 残高 10.4	例が残る。口沿面取りし下端に刻目を施す。	⑪ ヨコナデ ⑫ ハケ→ナデ消し	⑬ ヨコナデ ⑭ ナデ	灰褐色 黄褐色	石・金(1~2) 金 ○		12
68	甕	口径(20.0) 残高 6.0	例が残る。口沿下端に刻目を施す。 裏底のため不明	⑪ ヨコナデ ⑫ ナデ	⑬ ヨコナデ ⑭ ナデ	黄褐色 黄褐色	石・金(1~2) 金 ○	墨斑	12
69	甕	口径(19.6) 残高 5.0	口沿面取りし下端に刻目を施す。	⑪ ヨコナデ ⑫ ナデ	⑬ ヨコナデ ⑭ ナデ	黄褐色 黄褐色	石・金(1~2) 金 ○		12
70	甕	口径(18.4) 残高 3.0	口縁部強く弧曲する。口沿全面に刻目を施す。	⑪ ヨコナデ	⑬ ヨコナデ ⑭ ナデ	灰褐色 黄褐色	石・金(1~2) 金 ○		12
71	甕	残高 4.0	口沿全面に強い刻目を施す。	ヨコナデ	刻跡	灰褐色 黄褐色	石・金(1~2) 金 ○		12
72	甕	残高 3.9	口沿全面に強い刻目を施す。	⑪ ヨコナデ ⑫ ハケ	磨滅のため不明	灰褐色 黄褐色	石・金(1~2) 金 ○		12
73	甕	残高 2.8	口縁部わずかに細く口沿に強い刻目を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 黄褐色	石・金(1) 金 ○		
74	甕	残高 2.5	口縁面取りし細く強い刻目を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 褐色	石・金(1~2) 金 ○		
75	甕	残高 2.7	口縁の折り曲げが強い。口沿下端に刻目。金ウシモ多含。	⑪ ヨコナデ ⑫ 横ハケ	ナデ	暗褐色 暗褐色	石・金(1) 金 ○		12
76	甕	残高 2.6	環部丸く治まる。口沿下端に刻目を施す。小片である。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 黄褐色	石(1) ○		
77	甕	残高 1.8	小片。口沿全面に刻目を施す。	ヨコナデ	磨滅のため不明	黄褐色 黄褐色	石(1) ○		
78	甕	残高 1.8	小片。口沿全面に刻目を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 褐色	石・金(1~2) 金 ○		
79	甕	残高 3.7	口縁部面取り。口沿下端に刻目を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石・金(1) 金 ○		
80	甕	残高 3.0	肩部片。薄い記号付けによる不明瞭な段をもつ。浅く刻目を施す。	ヨコナデ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石(1) 金 ○		13

朝美澤遺跡2次調査

第Ⅲ層下層部 出土遺物觀察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		外 面 (内 面) 色調	胎 土 焼	備考	図版
				外 面	内 面				
81	甕	残高 5.0	胴部痩。右段で段上に刻目を施す。	ナデ	ナデ	黒褐色 褐色	石・長(1) 金 ◎		13
82	甕	残高 4.6	有段で段上と段下に浅い刻目を施す。	ハケ→ナデ消し	ナデ	黄褐色 褐色	石・長(1) 金 ◎	黒斑	13
83	甕	残高 6.1	右段部の段上に浅い刻目を施す。	ハケ→ナデ消し	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長 金 ◎		13
84	甕	残高 3.2	右段部明瞭。深い刻目を施す。	ナデ	ナデ	暗褐色 暗褐色	石・長(1) 金 ◎		13
85	甕	残高 2.0	口縁部がる。口縁下墜り付凸唇。凸唇上に浅い刻目を施す。	ヨコナデ	ナデ	褐色 褐色	石・具(1) ◎		13
86	甕	残高 2.5	口縁部わざずに貼り付け凸唇。凸唇上に刻目を施す。	横ハケ(8本/1cm)	ヨコナデ	黄褐色 褐色	石・長(1) 金 ◎		13
87	深鉢	口径(17.4) 残高 3.8	口縁部つまみ出し、細やかに凸唇。口縁下凸唇這らせ刻目を施す。	ヨコナデ ヨコナデ ミガキ	ミガキ	黄褐色 黄褐色	石 (1) ◎		13
88	深鉢	残高 2.0	縦やかに外反しながら立ち上がり口縁に横目文を施す。	ヨコナデ	ナデ	黄褐色 黒褐色	砂粒 (G1) ◎		13
89	深鉢	口径(20.8) 残高 7.5	縦やかに内高ぎみに立ち上がり口縁に横目文を施す。	不明	横ナデか?	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~2) ◎		13
90	深鉢	残高 3.6	縦やかに外反しながら立ち上がり口縁に横目文を施す。		ナデ	新褐色 暗褐色	砂粒 黒ウンモ ◎		13
91	深鉢	残高 4.3	縦やかに外反しながら立ち上がり口縁。	齊城(染斑か)	ヨコナデ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~2) ◎		13
92	甕	底径 8.0 残高 8.0	上げ底を堅する。	偏ハケ→ナデ消し	ナデ	新褐色 新褐色	石垂(1~4) 金 ◎		18
93	甕	底径 6.0 残高 6.3	わずかに上げ底を呈する。	筋ヘラミガキ	齊城のため不明	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~4) ◎		18
94	甕	底径 (5.0) 残高 3.7	わずかに上げ底を呈する。	磨滅のため不明	ナデ	新褐色 新褐色	石・具 (1~2) ◎		
95	甕	底径 (6.4) 残高 4.7	わずかに上げ底を呈する。	筋ヘラミガキ	ナデ	黒褐色 褐色	石・具(1) ◎		
96	甕	底径 (8.5) 残高 3.6	平底。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	褐色 褐色	石・長(1) ◎		
97	甕	底径 (7.5) 残高 2.8	平底。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1~2) ◎		

遺物観察表

第三層下層部 出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
98	壺	口径(33.8) 残高 8.2	口縁部緩やかに外反。口縁下に不明瞭な段をもつ。粘土接合痕顯著。	ヘラミガキ	ヘラミガキ→ナデカ	茶褐色 褐色	石-長(I~II) 金 ○		14
99	壺	口径(38.0) 残高 5.5	口縁部緩やかに外反。口縁下に不明瞭な段をもつ。壺面「コ」字状を呈する。		ナデ	黄褐色 褐色	石-長(I~II) 金 ○		14
100	壺	口径(32.2) 残高 5.5	口縁部緩やかに外反。口縁下に不明瞭な段をもつ。器壁厚い。	ヘラミガキ(磨滅)	ヘラミガキ(磨滅)	黄褐色 黄褐色	石-長(I~II) 金 ○		14
101	壺	口径(36.4) 残高 5.0	大きく屈曲する口縁部。口縁下に不明瞭な段をもつ。	ヨコナデ	ヘラミガキ	褐色 褐色	石-長(I~II) 金 ○		
102	壺	口径(36.4) 残高 4.0	大きく屈曲する口縁部。口縁下に不明瞭な段をもつ。	ヘラミガキ→ナデ	ヘラミガキ	褐色 褐色	石-長(I~II) 金 ○		
103	壺	口径(38.0) 残高 3.4	大きく屈曲する口縁部。不明瞭な段をもつ。粘土接合痕顯著。	ナデ	ミガキかナデ	褐色 黄褐色	石-長(I~II) 金 ○		14
104	壺	残高 7.3	緩やかに外反する口縁で不明瞭な段をもつ。壺面「コ」字状を呈する。	磨滅のため不明	ヘラミガキ	黄褐色 黄褐色	石-長(I~II) 金 ○		14
105	壺	残高 4.8	緩やかに外反する口縁で不明瞭な段をもつ。壺面「コ」字状を呈する。	ミガキかナデ	ミガキかナデ	茶褐色 茶褐色	石-長(I~II) 金 ○		14
106	壺	残高 8.6	壺面「コ」字状。指痕痕顯著。沈殿化した不明瞭な段をもつ。	ヘラミガキ(横方向)	ヘラミガキ(磨滅)	黄褐色 黄褐色	石-長(I~II) 金 ○		14
107	壺	残高 4.1	壺面「コ」字状を呈し、1角の浅縫文を残す。小片。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	黄褐色 灰褐色	石-長(I~II) 金 ○		14
108	壺	残高 3.9	口唇下端に刻目を施す。口縁下に不明瞭な段をもつ。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	黄褐色 黄褐色	石-長(I~II) 金 ○		14
109	壺	残高 5.3	緩やかに外反する口縁部。口縁下に不明瞭な段をもつ。小片。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	黄褐色 黄褐色	石-長(I~II) 金 ○		
110	壺	残高 3.8	緩やかに外反する口縁部。口縁下に不明瞭な段をもつ。小片。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	黄褐色 黄褐色	石(I)		
111	壺	残高 3.0	緩やかに外反する口縁部。沈殿化した不明瞭な段をもつ。小片。	ヘラミガキ(横方向)	ミガキかナデ	黄褐色 黄褐色	石-長(I) 金 ○		
112	壺	残高 3.9	不明瞭な段。端部丸く治める。小片。	ミガキかナデ	ミガキかナデ	黄褐色 黄褐色	石-長(I~II) 金 ○		
113	壺	残高 4.8	大きく屈曲する口縁部。不明瞭な段をもつ。壺面「コ」字状を呈する。	ヘラミガキ(横方向)	ヘラミガキ(横方向)	茶褐色 褐色	石-長(I) 金 ○		15
114	壺	残高 4.1	大きく屈曲する口縁部。壺部丸く治める。	ヘラミガキ(横方向)	ヘラミガキ(横方向)	茶褐色 茶褐色	石-長(I~II) 金 ○		15

朝美澤遺跡 2次調査

第Ⅲ層下層部 出土造物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	団版
				外 面	内 面				
115	壺	残高 3.5	大きく屈曲する口縁部。裏面「コ」字状を呈する。	ミガキかナデ	ヘラミガキ (横方向)	灰褐色 黄褐色	石・長(1~2) ○		15
116	壺	残高 3.0	影響早い。口縁部丸く治める。不明瞭な段をもつ。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	褐色 灰褐色	石・長(1~2) 金 ○		
117	壺	残高 3.4	大きく屈曲する口縁部。段の有無は不明。	磨滅のため不明	ヘラミガキ (横方向)	黄褐色 黄褐色	石(1) ○		
118	壺	残高 3.4	大きく屈曲する口縁部、小片。	ヘラミガキ (横方向)	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) ○		
119	壺	残高 3.2	大きく屈曲する口縁部。端部丸く治める。	ナデ	ナデ	黄褐色 茶褐色	石・長(1~2) 金 ○		
120	壺	残高 2.9	小片。端部丸く治める。	ミガキかナデ	ヘラミガキ (横方向)	茶褐色 茶褐色	石・長(1) ○		
121	壺	口径(12.6) 残高 3.0	大きく屈曲する口縁部。中型品。	ヘラミガキ (横方向)	ヘラミガキ (横方向)	褐色 褐色	石・長(1~2) 金 ○		15
122	壺	残高 3.4	大きく屈曲する口縁部。凸部をならせ刻目を施す。	磨滅のため不明	ヘラミガキ (横方向)	茶褐色 茶褐色	石・長(1) ○		15
123	壺	残高 1.5	裏面「コ」字状を呈する。汎化した段をもつ。小片。	ナデ	ミガキかナデ	黒色 黒色	石・長(1) ○		15
124	壺	残高 5.3	口縁と頸部の境に1条の浅い沈線文を施す。	ヘラミガキ (横方向)	ヘラミガキ (横方向)	褐色 黄褐色	石・長(1~2) 金 ○		16
125	壺	残高 4.1	口縁と頸部の境に1条の沈線文を施す。	ナデ	ナデ	黄褐色 灰黄褐色	石・長(1~2) ○		
126	壺	残高 3.6	小片。 3条以上の沈線文。	ヘラミガキ (横方向)	剥離のため不明	褐色 褐色	石・長(1~2) ○		16
127	壺	残高 7.0	肩部片。 1条の沈線文を施す。	丁寧なヘラミガキ (横方向)	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) 金 ○		16
128	壺	残高 7.0	方形に沈線で区切った後、5~6条の沈線で本部文を施す。	ミガキ→陶文	ナデ	里・茶褐色 黄褐色	石・長(1~2) 安山岩 ○		16
129	壺	残高 7.0	横沈線文下に1条の沈線文で本部文を施す。	磨滅のため不明	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) ○		16
130	壺	残高 3.2	横沈線文 1条。 墨藍文 3条。	ミガキかナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長(1~2) ○		16
131	壺	残高 4.5	泓文。 淡く細い沈線文4条。	ミガキ	ナデ	褐色 褐色	石・長(1~2) 金 ○		

遺物観察表

第三層下層部 出土遺物観察表 土製品

(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外)色 調 (内)色	船 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
132	壺	残高 3.2	小片。弧文か?	磨滅のため不明	ナデ	褐色 褐色	石-長(1~2) 金 ○		
133	壺	残高 5.0	側部片。細く浅い沈線で山形文。	磨滅のため不明	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石-長(1~2) 金 ○		
134	壺	残高 3.5	小片。ヘラミガキ後、山形文を施す。	ヘラミガキ	ナデ	褐色 褐色	砂粒 金 ○		
135	壺	残高 3.5	小片。横沈線文2条以上。山形文4条以上。	磨滅のため不明	ナデ	褐色 褐色	石-長(1~2) 金 ○	16	
136	壺	残高 5.3	側部片。2本1組の山形文。削り出しきの段。1条の沈線文。	ヘラミガキ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石-長(1~2) ○	16	
137	壺	残高 9.0	大きく張る側部片。5~6条1組の山形文を施す。	ヘラミガキ(横方向)	ナデ	褐色 褐色	石-長(1~2) 金 ○		
138	壺	残高 8.0	大きく張る側部片。沈線文間に斜線文を施す。	磨滅のため不明	ナデ	黄褐色 黄褐色	石-長(1~2) 金 ○	16	
139	壺	残高 2.5	小片。沈線文間に斜実文を施す。	小片にて不明	ナデ	黄褐色 黄褐色	石-長(1) ○	16	
140	壺	残高 3.4	側部片。小片。3mm以上の竹實文と沈線文を施す。	ヘラミガキ(横方向)	ナデ	灰黄褐色 褐色	石-長(1) ○	16	
141	壺	残高 5.3	3条以上の横沈線文間に4条以上の縦沈線文を施す。	ヘラミガキ(横方向)	ナデ	褐色 褐色	石-長(1) ○	16	
142	壺	残高 5.0	側部片。2条以上の横沈線文下に5条の縦沈線文を施す。	ミガキかナデ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石-長(1) ○	16	
143	壺	残高 4.5	肩部片。 3条以上の横沈線文下に2条以上の縦沈線文。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	褐色 褐色	石-長(1~2) ○		
144	壺	底径(12.5) 残高 5.5	平底で大型の底部。	ナデ	ナデ	黄褐色 暗茶褐色	石-長(1~2) 金 ○		
145	壺	底径 9.7 残高 4.4	わずかに上げ底を呈する。	ヘラミガキ	板ナデ	褐色 褐色	石-長(1~2) 金 ○	18	
146	壺	底径(7.8) 残高 4.9	平底。	ヘラミガキ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石-長(1~2) ○	18	
147	壺	底径 7.4 残高 4.9	わずかに上げ底を呈する。	磨滅のため不明	ナデ	黄褐色 黄褐色	石-長(1~2) 金 ○	18	
148	壺	底径(6.0) 残高 2.5	わずかに上げ底を呈する。	ヘラミガキ	ナデ	褐色 黒灰色	石-長(1~2) ○		

朝美澤遺跡 2次調査

第三層下層部 出土遺物観察表 土製品

(6)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
149	高环	口径(22.6) 残高 4.2	口縁わずかに肥厚し段をもつ。施面「コ」字状を呈する。	磨滅のため不明	ミガキかナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) 金 ○		17
150	高环	口径(25.4) 残高 4.3	口縁わずかに肥厚し段をもつ。施面「コ」字状を呈する。	剥離のため不明	ヘラミガキ (横方向)	黄褐色 茶褐色	石・長(1~2) 金 ○		17
151	高环	口径(18.2) 残高 2.6	口縁下に弧曲部をもつ。跡の可能性もある。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	黄褐色 褐色	砂粒 ○		17
152	高环	残高 2.3	小片。口縁部肥厚し段をもつ。端部丸く治める。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	褐色 褐色	石・長(1) 金 ○		17
153	高环	底径(15.4) 残高 2.2	「八」字状に立ち上がる環部。	剥離のため不明	ナデ	暗茶褐色 暗茶褐色	石・長(1) ○		17
154	鉢	口径(20.6) 残高 4.8	内渕ざみに立ち上がる直口縁。施面「コ」字状を呈する。	ヘラミガキ (横方向)	⑪ ヘラミガキ (横方向) ⑫ ヘラミガキ (横方向)	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) 金 ○		17
155	鉢	残高 5.9	やや内渕ざみに立ち上がる直口縁。施面「コ」字状を呈する。	ナデ	ミガキかナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1) ○		
156	鉢	口径(18.6) 残高 4.3	内渕ざみに立ち上がる直口縁。施面「コ」字状を呈する。	⑬ ハケ→ヨコナデ ⑭ ハケ (注本/1cm)	⑮ ヨコナデ ⑯ ナデ	黄褐色 黑色	石・長(1) 金 ○		
157	鉢	残高 3.8	やや内渕ざみに立ち上がる直口縁。施面「コ」字状を呈する。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 黒褐色	金(石・1) ○		
158	鉢	口径(21.0) 残高 4.8	外反しながら立ち上がる口縁。端部丸く治める。	ヘラミガキ (磨滅)	磨滅のため不明	灰褐色 黄褐色	石・長(1) 金 ○		17
159	鉢	残高 3.6	内渕ざみに立ち上がる口縁。端部丸く治める。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	黄茶褐色 黑色	石・長(1~2) 金 ○		
160	鉢	口径(32.2) 残高 6.0	外反ざみに立ち上がる口縁。端部先尖り。大型品。	磨滅のため不明	⑩ ヨコナデ ⑪ 浅いハケ	茶褐色 茶褐色	砂粒(長2) ○		17
161	鉢	口径(37.5) 残高 5.3	如意形。端部丸く口縁下に不規則な段をもつ。大型品。	ヘラミガキ (横方向)	ヘラミガキ (横方向)	茶褐色 黄褐色	石・長(1) 金 ○		17
162	鉢	残高 3.0	口縁下で弧曲する。端部丸く治める。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1) ○		17
163	ミニチュア	底径 3.6 残高 1.5	わずかに上げ底を呈する。直立ざみに立ち上がる。	工具痕収取	ナデ	黒褐色 黒褐色	石・長(1) 金 ○		17

第 III 章

辻町遺跡
ツジ マチ

第Ⅲ章 辻町遺跡

1 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1990年(平成2年)5月、株式会社清家商事より、松山市辻町39-1の開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。当該地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『34 朝美遺物包含地』内にある。

文化教育課は、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、同年7月2日から5日までの間、試掘調査を実施した。その結果、土層は安定した堆積状況を示しており、遺構面を4面と遺物包含層を3層検出した。遺物は青磁、白磁、土師器、須恵器が出土し、古墳時代～中世の遺跡があることを確認した。

この結果を受け、文化教育課・株式会社清家商事の二者は遺跡の取扱いについて協議を行い、開発によって失われる遺跡について、記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は古墳時代から中世における当該地及び周辺地域の集落構造解明を主目的とし、文化教育課・松山市立埋蔵文化財センターが主体となり、株式会社清家商事の協力のもと、1991年4月16日に開始した。

(2) 立地

本調査地は、JR松山駅より西へ約400m、松山平野西部の標高14.8mに立地する。本調査地周辺には、古墳群や集落址などが確認されている大峰ヶ台丘陵、一般河川石手川と源流を共にし、松山平野を東西に流れる宮前川がある。大峰ヶ台丘陵は標高125mで、山頂部には弥生時代中期中葉の集落址があり(大峰ヶ台遺跡)、北西部に朝日谷古墳、南西部に客谷古墳群、北東裾部には澤遺跡、南東裾部に辻遺跡など数多くの遺跡が確認されている(松山市 1989他)。宮前川は、この大峰ヶ台丘陵の東裾部近くを北から南、そして西へと流れる。本調査地は、宮前川を挟み、大峰ヶ台丘陵の南西約800m、宮前川からは南東約300mに位置している。

〔参考文献〕

松山市教育委員会 1989 「大峰ヶ台遺跡」「客谷B地区古墳群」「澤遺跡」「辻遺跡」

『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』

松山市教育委員会 1991 「朝日谷1号墳」「松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ」

辻町遺跡

(3) 調査組織

調査地 松山市辻町遺跡39-1
遺跡名 辻町遺跡
調査期間 野外調査 1991(平成3)年4月16日～6月15日
室内整理 1991(平成3)年6月18日～7月31日
調査面積 対象面積 654.74m² 実施面積 246.5m²
調査委託 株式会社 清家商事 代表 清家健介
調査担当 調査員 梅木謙一
調査員補 真木潔
作業員 川井 正、栗林 和孝、是沢 嘉昭、田中 茂樹、田丸 竜馬、細田 尚秀、
松岡 欣弘、松本 正義、三江 元則、宮田 昭吾、大西 朋子、関 正子、
多知川富美子、荻野ちよみ、水口あをい、矢野 久子、吉井 信枝

(4) 経過

調査対象面積は654.74m²である。調査地は隣接する水田より約1mの造成がなされており、
安全面及び廃土置場を考慮して実施面積を設定し調査を行った。以下、調査工程を略述する。

平成3年 4月16日 重機による表土剥ぎ取り作業を開始した。調査地は水田を造成しており、
かなりの廃土が予想されるため、客土及び旧水田耕作土は調査区外への
搬出を行った(4月16～17日の間)。

19日 作業員を増員し、本格的な調査を開始する。

30日 第Ⅴ層を完掘し、第Ⅵ層の調査を行う。遺構の検出は、遺構面と遺構埋
土の土色がはっきりと分かれているため容易に行えた。

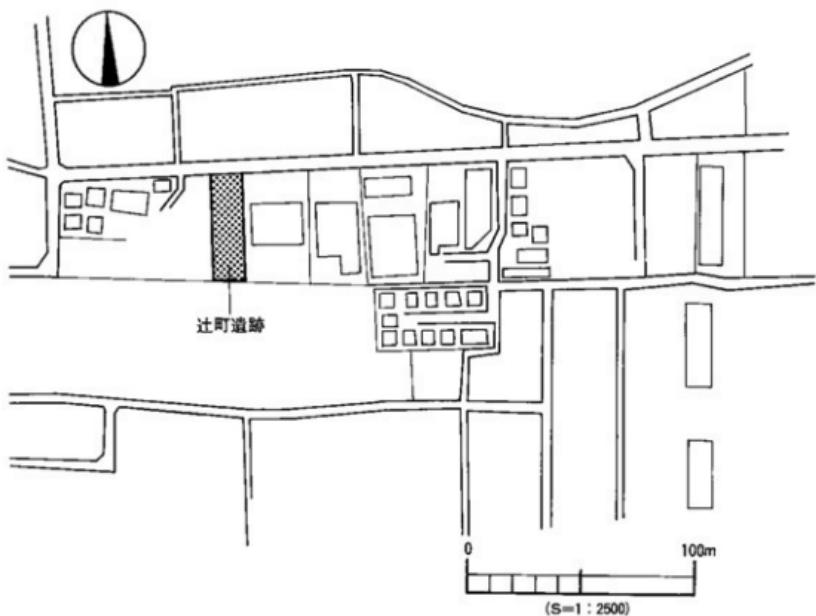
5月 …… 第Ⅵ層を完掘し、第Ⅶ層の調査を行う。第Ⅶ層中より土器の一群を検出
(S X 1)、関連する遺構を検出すべく、遺構検出作業にはいる。2回
に渡り愛媛大学法文学部教授下條信行先生に調査指導を乞う。

6月 …… 第Ⅶ層を完掘し、第Ⅷ層の調査を行う。15日、野外調査終了。

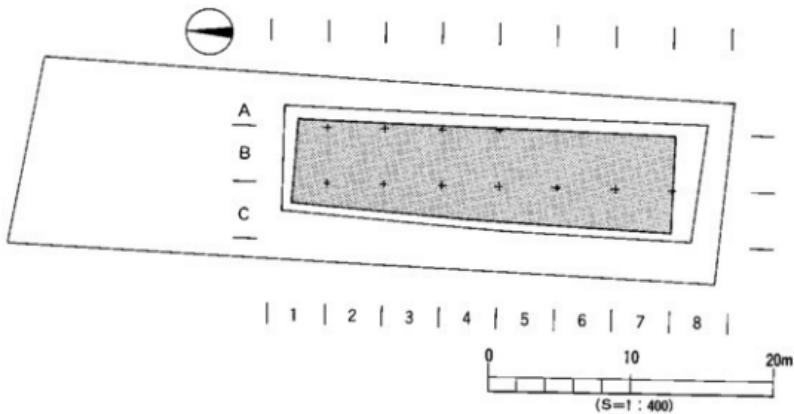
18日 松山市立埋蔵文化財センターにて、室内調査を実施する(～7月31日)。

平成4年2月～3月 報告書整理作業を行う。

調査の経過



第28図 調査区位置図



第29図 調査地区割図

2 層位 (第30図、図版20-1)

本調査の基本層位は、第Ⅰ層造成土 (40~60cm)、第Ⅱ層旧耕作土 (10~25cm)、第Ⅲ層暗赤褐色土 (5~10cm)、第Ⅳ層明黄灰色土 (10~15cm)、第Ⅴ層灰色砂質土 (10~20cm)、第Ⅵ層黃色土 (2~5cm)、第Ⅶ層黃灰色土 (10~20cm)、第Ⅷ層暗茶褐色土 (40~45cm) であり、最下層は第Ⅸ層暗灰色粘質土である。

第Ⅰ層—客土による造成土である。

第Ⅱ層—近現代の水田耕作土である。

第Ⅲ層—水田など、耕作土下に人为的に張られる床土と呼ばれるものである。

第Ⅳ層—第Ⅴ層の漸次層である。

第Ⅴ層—遺物包含層である。調査地全体に堆積しており、青磁、白磁、瓦器、土師器の破片が混在して包含される。

第Ⅵ層—2~5cmと薄く、調査地南に堆積が限られる。

第Ⅶ層—遺物包含層である。調査地全体に堆積しており、土師器、須恵器が出土し、主に土師器片が多く包含される。上面で遺構を検出している。

第Ⅷ層—遺物包含層である。40~45cmと堆積は厚く、調査地全体に堆積する。遺物は土師器、須恵器が出土し、調査地中央の層中位部（上面より約20cm下）より土器の一群が検出される（S X 1）。本層遺物出土状況は上部の約20cmの間に限られ、下部からの遺物の出土はなかった。遺構は上面及び層中位部で検出する。

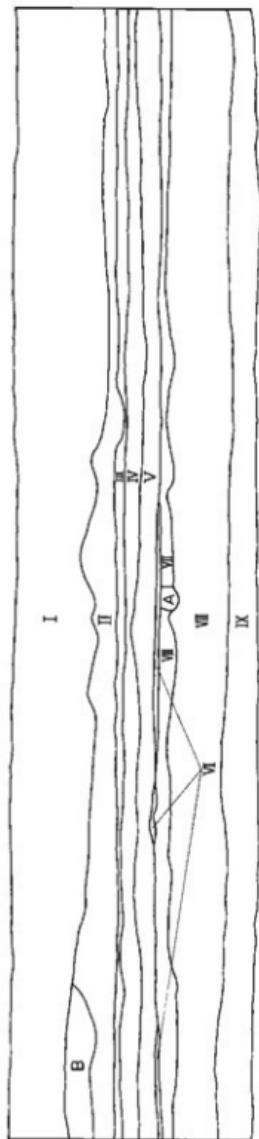
第Ⅸ層—調査地北から南にかけて灰色が強くなり、土色の変化がみられる。上面にて遺構を検出する。

出土遺物より判断すると、第Ⅴ層は中世以後に、第Ⅷ層は古墳時代～中世、第Ⅶ、Ⅸ層は古墳時代に堆積したものと判断される。また第Ⅶ層、第Ⅸ層の出土遺物には、時期差がさほど認められず、よって2層は短期間での堆積土壤であると考える。

第Ⅹ層は、遺物の出土状況より中位部で生活面が少なくとも1面存在すると考えられるが、色調等に変化は認められず分層するに至らなかった。

S-N

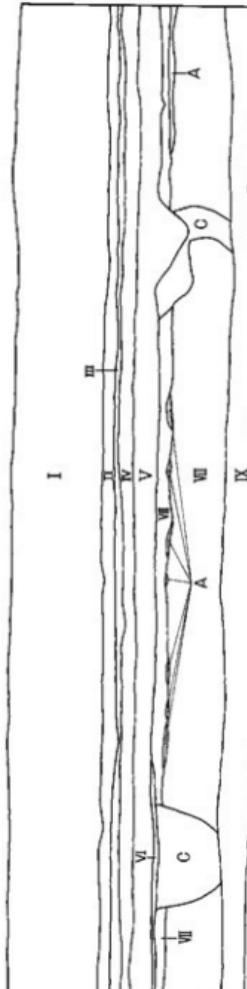
H15.00m



高
度

S-N

H15.00m



2 m
(S=1 : 40)

I 造威土 II 旧耕作土 III 暗赤褐色土(底土) IV 明黄灰色土
V 灰色砂質土 VI 黄色土 VII 黄灰色土 VIII 暗茶褐色土
IX 喙灰色粘質土 A 黄白色砂質土 B 混亂 C 道構

第30圖

西雙土層圖

3 調査の概要（遺構と遺物）

第V層

第V層では、遺構は未検出であった。出土遺物は、土師器、瓦器、須恵器、白磁、青磁の破片である（第31図、図版23-1）。

土師器杯（1～4） 口径11～13.8cm、底径6.2～8cm、器高2.7～3.7cm、内外面共に回転ナデ調整がみられ、底面を回転糸切りするものである。2・4は、口縁端部が外反する。

土師器壺（5） 高台径5.4cm、高台高1.1cmと、土師器壺の高台としてはやや高めで、取り付け後のナデ調整がみられる。

土師器皿（6・7） 6は、口径7.4cm、底径5cm、器高1.2cm、内外面共に回転ナデ調整で、底面は回転糸切り痕が残る。口縁部は丸みを帯びている。

瓦器（8～10） 8は、口径14cm、内外面共に回転ナデ調整がみられ、胎土は白黄色である。形態からみて瓦器壺の焼成前であると考えられる。9は、瓦器壺で、口径16cm、内外面共に回転ナデ調整である。外面は灰色で鈍い輝きを見せる。10は、瓦器壺底部で、高台径4.6cm、高台高0.2cm、貼り付けによる高台は断面形が四角形を呈し、内外面共にナデ調整されている。見込みには2本の暗文が平行に入る。

須恵器（11・12） 11は、東播系須恵器鉢で、口径25cmと広口のスリ鉢形である。12は、高壺の脚部である。スカシは三方とみられ、回転カキ目調整がある。

白磁（13・14） 13は、高台径8.8cm、高台高0.4cm、高台は削り出しによるものである。外面は回転ヘラ削り、内面は底部まで釉が施され、底部よりやや上に沈線の段をもつ。白磁碗IV類に比定できよう（1）。14は、口径14.4cm、内外面共に釉が施されているが、外面の下部には施されていない。口縁部は玉縁状で、玉縁下部には断面形でV字のシャープな凹線がある。白磁碗IV類に比定できる（1）。

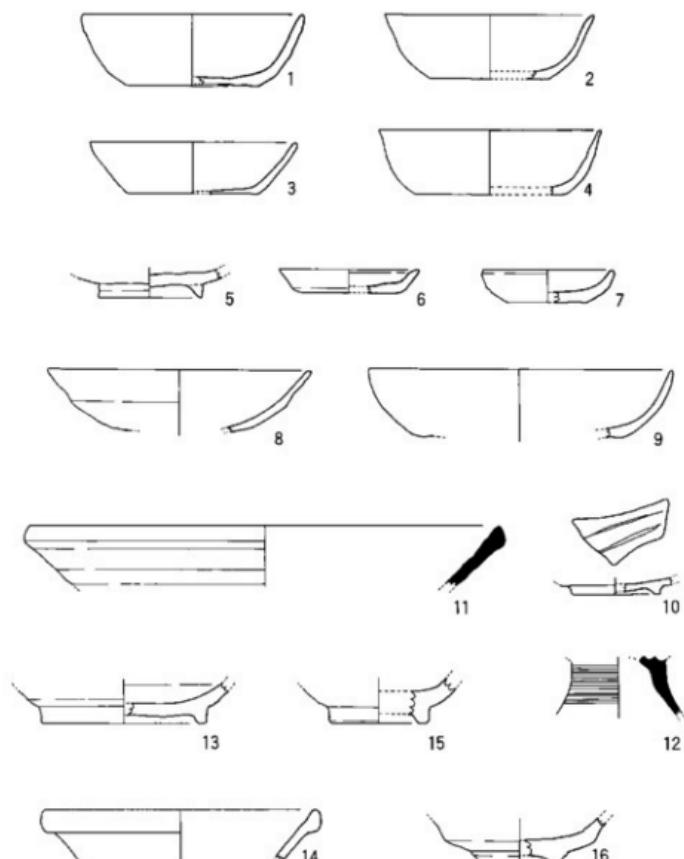
磁器（15） 高台径4cm、高台高0.4cm、高台は削り出しによるものである。外面はヘラ削りによる調整で、内面は灰白色の釉が施され、胎土目痕を残す。

青磁（16） 高台径5.2cm、高台高0.5cm、龍泉窯系青磁碗底部である。高台は貼り付けによるものである。胎土は青灰色をしており、釉は厚く塗り、高台外面にまで及ぶ。

〔参考文献〕

- (1) 森田 晚・横田賢次郎 1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』

調査の概要



第31図 第V層出土造物実測図

第Ⅶ層（第32図、図版20—2）

第Ⅶ層では、上面より遺構を検出している。検出遺構は柱穴15基、性格不明遺構4基である。検出した遺構の柱穴、性格不明遺構の埋土は暗灰色土である。遺構内からは少數の土師器片が出土しているが、器種、時期等を明確に判断できるものではない。柱穴は平面形が不定形で深さが20cm前後で、断面形はスリ鉢状を呈するものがほとんどである。第Ⅶ層からの出土遺物は土師器、須恵器で主に土師器片が多く出土している。

出土遺物（第33図、図版23—2）

土師器（17） 菱形土器である。口径14cm、口縁部断面形が、緩やかなS字状をなし、わずかに輪積みの痕が残る。外面の調整は、口縁部が横ナデ、体部は刷毛目を残す。内面は口縁部が横ナデ、体部は磨滅により調整は不明であるが、指頭痕が看取される。

須恵器（18） 瓶の口縁部である。口径16cmと少しだけ大きめで、外反したのち、段をなして上外方へとのびる。

第Ⅵ層（第34・35図、図版21）

第Ⅵ層は、上面と層中位部に2面より遺構を検出している。

上面での検出遺構は、溝状遺構1条（布堀り状）、柱穴3基である。いずれの遺構も埋土は黄灰褐色土の単一層で、遺物の出土はなかった。

溝状遺構は、溝底に溝に対して直角に梢円のくぼみが等間隔（約30cm）で並列する。深さは約20cmと浅い。

層中位部からの検出遺構は、溝状遺構1条、柱穴6基である。

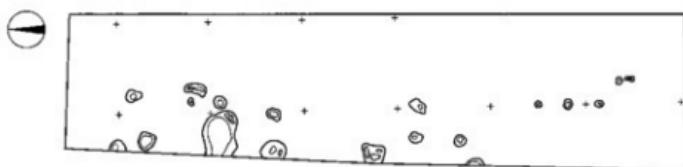
この層中位部は第Ⅵ層上面より約20cm下で、上面の遺構検出とは色調等には変化が認められない。

第Ⅵ層は、試掘調査の結果から豊富に遺物を包含していることが判明しており、約1cmずつの掘り下げを行った。その結果、層中位部より土器の一群（以下この土器の一群をSX1とする）を検出した。また、上面からは検出できなかった新たな遺構をSX1と同レベルにて検出した。よって、このレベルでの文化面の存在を確認するに至った。

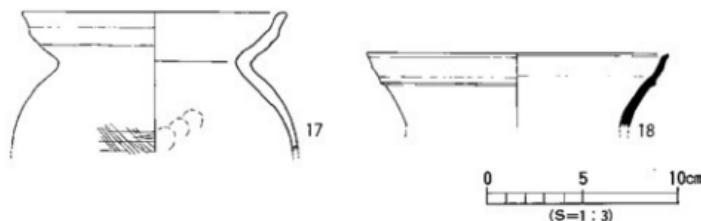
SX1は、土師器の高壺形土器、壺、滑石製の白玉等が出土している。SX1の遺物は完形品が多数をしめ、遺物の散らばりはほとんどなく、原位置を保ったまでの出土と考えられる。この出土状況からは、遺物の配列らしきものがうかがえるが、SX1に関連すると思われる人為的な掘り込み等は検出されなかった。

第Ⅵ層からの出土遺物は土師器、須恵器である。遺物はすべて上面から層中位部までの約20cmの間で出土した。層中位部より下からの遺物の出土はなかった。

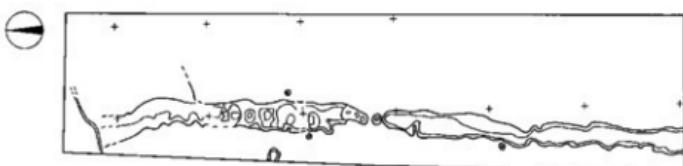
調査の概要



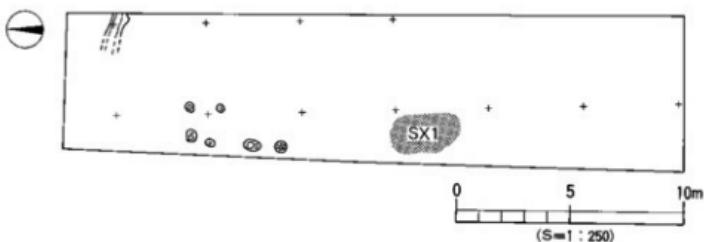
第32図 第17層遺構配置図



第33図 第17層出土遺物実測図



第34図 第17層上面遺構配置図



第35図 第17層中位部遺構配置図

辻町遺跡

土師器（第36図、図版24）

壺形土器（19～22） 19～21は、内湾して立ち上がる口縁部をもつ。口縁端面は傾斜し、ナデによる面をもつ。19は口径19cmである。体部外画はハケ目調整がほどこされ、わずかに指頭痕が残る。内面は磨滅により調整は不明であるが、指頭痕が看取される。20は口径23cmで、21は口径18cmである。21は内外面共に調整は磨滅により不明である。22は口径14cmで、口縁部は緩やかに外反し、端部は先細りする。外面は口縁部、体部共にハケ調整が施され、わずかに指頭痕が残る。内面は、口縁部がナデ調整、体部はヘラ削り後にナデ調整が施されている。

壺形土器（23・30） 23は口径11cm、口縁部は外反したのち、直立して立ち上がる。内外面共に磨滅により調整は不明である。30は小型の丸底壺形土器の体部である。全体に器壁が厚く、内面底部は指圧痕が顕著に残り、輪積みの痕がはっきりとうかがえる。外面はハケ目調整がほどこされる。

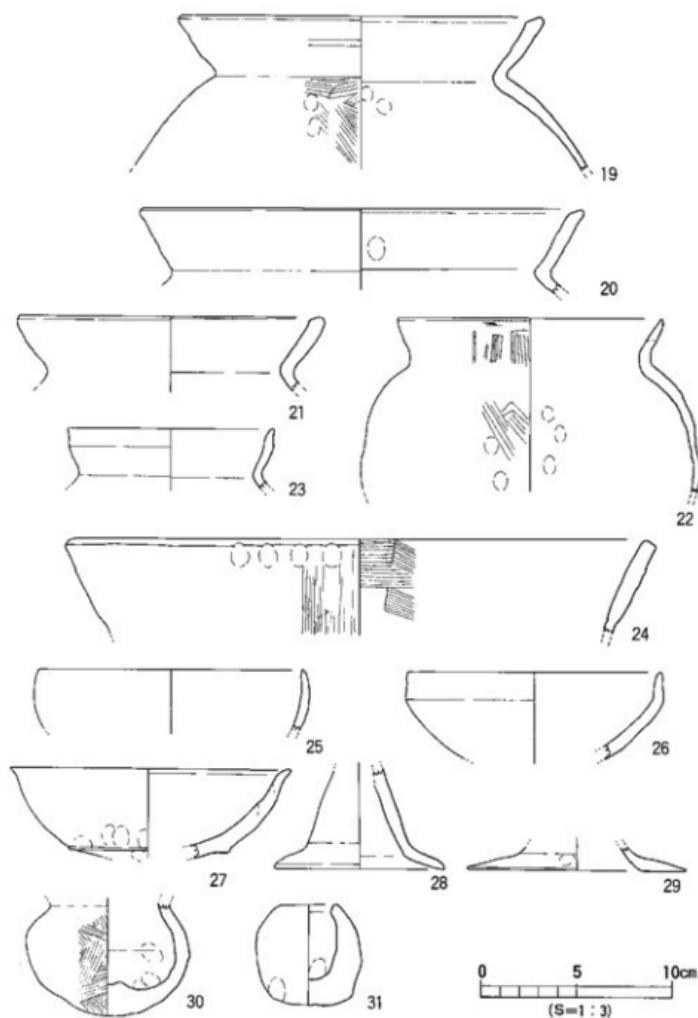
壺形土器（24） 口径30cm、口縁端部「コ」の字状で、ナデ調整が施される。内外面共に刷毛目が残る。

壺形土器（25・26） 25は口径14cmで、体部は内湾して立ち上がる。口縁端部は丸く尖る。内外面共にナデ調整である。26は口径13.4cmで、体部は底部から大きく外反したのち、口縁部は直立して立ち上がる。内外面共にナデ調整である。

高环形土器（27～29） 27は环部である。口径は15cmで、口縁部は鈍い稜線をもって外反する。外面はナデ調整で、黒斑がある。内面はナデ調整である。28は脚部片である。底径は9.2cmで、柱部は円錐状にひろがり、裾部は内湾してひらく。調整は内外面共に磨滅により不明である。29は裾部片である。28とは違い、裾部が水平にひろがる。内外面共にナデ調整である。

ミニチュア土器（31） 口径3cm、底径2.2cm、器高5.3cmを測る。器壁は厚く、底部から口縁端部にかけて薄くなる。器形は全体的に丸い。口縁部は内湾し、内傾する。内外面共に指頭痕があり、手すくねによるものである。

調査の概要



第36図 第5層出土土師器実測図

辻町遺跡

須恵器（第37・38図、図版24・25）

壺蓋（32～47）

出土壺蓋には破片が多く、ちょうど高壺の蓋であれば、つまみの部分にあたる天井部のないものがあるため、高壺の蓋として使用された可能性もあるが、あえて壺蓋として扱うこととする。

径により分類すると、A類11.0～11.2cm（32・33・46）、B類11.4～11.6cm（34～39）、C類11.8～12.2cm（40～45）、D類12.5cm（47）に分類できる。

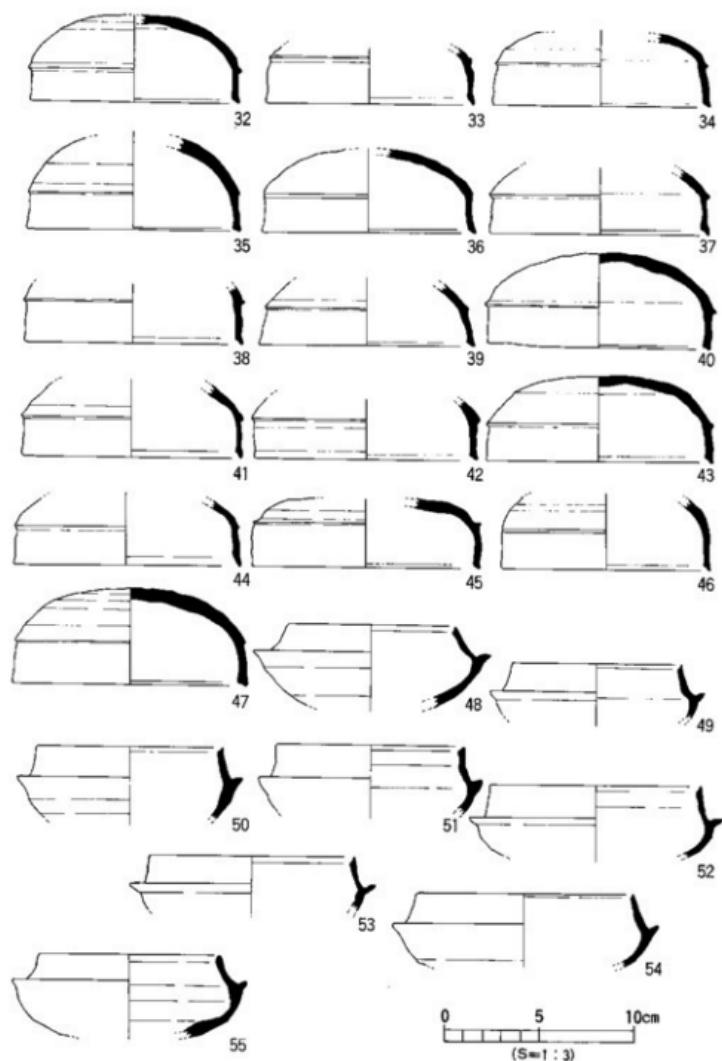
A類（32・33・46） 32は天井部が丸みを帯び、外方に短く伸びる稜を境に口縁部は直下に下る。口縁端部はわずかに凹面をなして内傾する。調整は、天井部外面の半分を回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。33は32ほど明確な稜でなく、短く丸い。口縁端部はシャープに尖り、わずかに凹面をなして内傾する口縁端部を持つ。調整は、内外面共に回転ナデ調整である。

B類（34～39） 天井部は丸みを帯び、特に35は丸く器高が高い。稜は34・37・38が短く外方にのび、35・39は天井部と口縁部との段差による稜をもつ。36は少し異なり、沈線によって稜を浮かび上がらせている。口縁部は稜を境に直下に下るもので、39のみわずかに外反する。口縁端部はわずかな凹面をなして内傾する。37は内傾する明瞭な段を有する。調整は、35は天井部外面が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整、36は天井部外面の3／4が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。34・37・38・39は口縁部の破片で、回転ナデ調整を内外面共に見るのみである。

C類（40～45） 天井部は丸みを帯び、45のみが扁平で他の天井部と異なる器形をもつ。稜は40・43が短く外方に伸びる稜で、41・42・44は段による稜である。45は40・43とおなじく外方に伸びる稜をもつが、40・43のそれとは少し異なり、シャープで短く上外方に伸びる。口縁部は稜を境に直下に下り、端部はわずかな凹面をなして内傾する。40は内傾する明瞭な段を有する。調整は、40は天井部外面が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整、43は天井部外面の3／4が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。41・42・44は回転ナデ調整を内外面共に見るのみである。

D類（47） 口径12.5cmとやや大型で、器形は類似している。天井部は丸みを帯びて下がり、天井部と口縁部の境界は段による稜をもつ。口縁部は直下に下り、端部はわずかな凹面をなして内傾する。調整は、天井部外面半分が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整をみる。

調査の概要



第37図 第四層出土須恵器実測図(1)

辻町遺跡

壺身 (48~55)

口径により分類すると、A類9.0cm (48・49)、B類10.0~10.4cm (50・51)、C類11.0~11.6cm (52~55) に分類できる。

A類 (48・49) 48の底部は丸く浅い。たちあがりは内傾し、端部は凹面をなして内傾する。受部は長くシャープで受部端に沈線が巡る。調整は底部外面半分が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。49はたちあがりが48ほどではないが内傾し、端部は内傾する明瞭な段を有する。受部はやや外方に伸び、シャープさに欠ける。調整は内外面共に回転ナデ調整である。

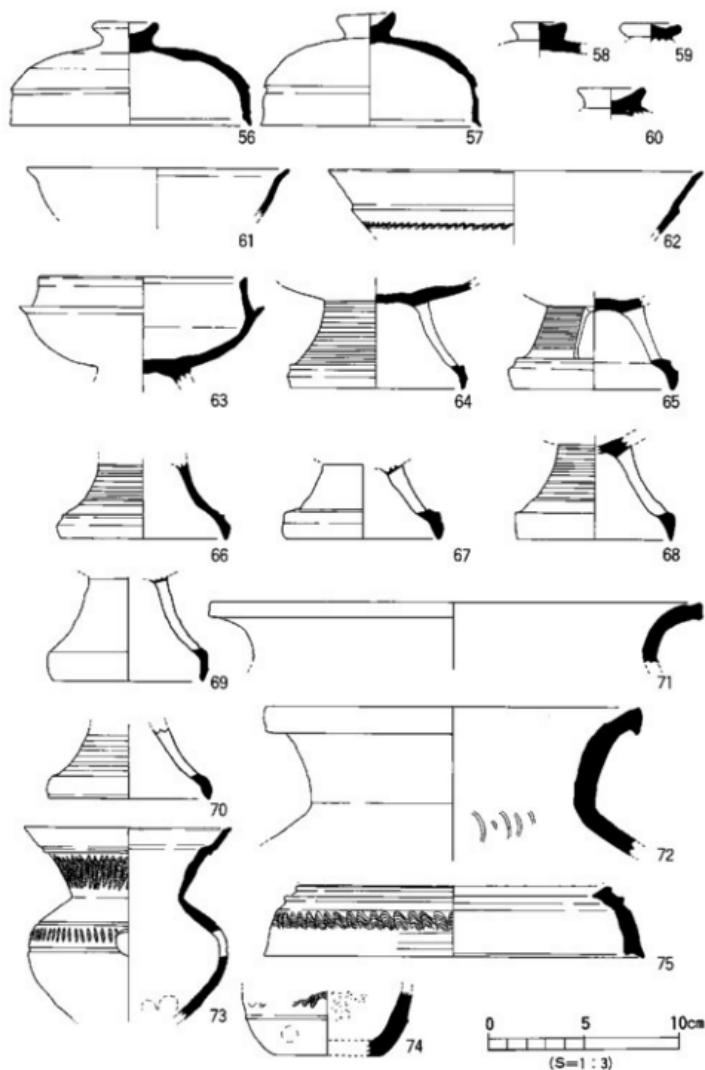
B類 (50・51) 50はたちあがりはやや内傾し、端部はわずかな凹面をなして内傾する。受部は外方に伸び、シャープさに欠け、受部端に沈線が巡る。調整は内外面共に回転ナデ調整である。51はたちあがりは内傾した後、直立し、端部は肥厚してわずかな凹面をなして内傾する。受部はほつたりとしてやや上外方に伸びる。調整は内外面共に回転ナデ調整である。

C類 (32~55) 32はたちあがりはやや内傾し、端部はわずかに凹面をなして内傾する。受部はシャープで長く、外方に伸びる。底部はやや扁平な感がある。調整は底部外面が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。53はたちあがりはやや内傾し、端部はわずかな凹面をなして内傾する。受部は薄く上外方に伸びる。調整は内外面共に回転ナデ調整で、底部に自然軸がかかる。54はたちあがりは内傾し、端部は薄く、内傾する。受部は上外方に伸び、受部端に沈線が巡る。調整は底部外面が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。55は底部は丸く深めである。たちあがりは内傾し、端部は丸い。受部は短く丸く、上外方に伸びる。調整は底部外面半分が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。

高壺 (56~70)

56・57は高壺の蓋である。56は天井部がやや丸みを帯び、稜は突起せず、沈線により浮かび上がらせた感がある。口縁部は直下に下り、端部は内傾する明瞭な段を有する。つまみは丸く中央が凹む。調整は、天井部外面が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。57は天井部が丸く、沈線による稜をもつ。口縁部は直下に下り、端部は緩やかな凹面をもって内傾する。つまみは丸く中央が凹む。調整は天井部外面の1/3が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。58~60は高壺の蓋のつまみである。58・59は56・57のつまみとは違い、中央部が突出する。60は56・57のつまみと同じく、中央が丸く凹む。61・62は無蓋高壺の口縁部である。61は口径14cmと小型で、口縁部は「く」の字形に外反し、端部は丸い。調整は内外面共に回転ナデ調整である。62は口径20cmと大型で、口縁部は広く外反し、端部は丸い。外面の中位部に段をもち、その段下に波状文を施す。調整は、内外面共に回転ナデ調整である。63是有蓋高壺の壺部である。底部は丸く、たちあがりは内傾し、端部は細く内傾する。受部は上外方に伸び、受部端に沈線が巡る。脚部は壺部の調整後取り付けられたことがうかがえる。調整は底部外面1/3が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。64~70は高壺

調査の概要



第38図 第7層出土須恵器実測図(2)

の脚部である。いずれも「ハ」の字形にゆるやかに外反し、端部付近では64は上外方に伸びる凸線、65は短い凸線と段、66はゆるやかに膨らみ短い凸線、67は大きな段とゆるやかな凹面、68はゆるい段、69はゆるやかな膨らみ、70はわずかに段をなす。端部は丸く尖りぎみで、直下に下がる。長方形のすかしが三方に脚部付け根から端部近くまではいる。調整は、64~66、68・70の外面に回転カキ目調整がみられ、67・69は回転ナデ調整である。内面はいずれも回転ナデ調整である。

壺 (71.72)

71は壺の口縁部である。口径26.2cmで、外方に大きく外反し、端部はわずかに凹面をなす。調整は磨滅により不明である。72は口縁部がゆるやかに外反し、口縁端部は下方に肥厚する。調整は内外面共にナデ調整で、頭部内面に円弧叩きがみられる。

壺 (73・74)

73は小型の壺である。口径は11.1cmで、体部最大径を上回る。外反する口縁部はさらに段をなして端部へつづく。端部はゆるやかな凹面をなして内傾する。口縁部に波状文、体部には上下2本の沈線によって囲まれた刺突列点文を施す。74は小型の壺の底部である。推定底径6cmの平底壺の底部で、体部に凸線と波状文が施される。

器台 (75)

器台の脚部である。推定脚底径20.2cmで、「ハ」の字形に膨らみながら外反し、端部は水平で凹面をもつ。波状文を施し、上部に透かしが看取される。

S X 1 (第39図、図版22)

S X 1は、第Ⅳ層上面より約20cm下の層中位部（海拔13.5m）調査地ほぼ中央部に位置し、土師器の高環形土器、壺形土器、須恵器の高環、蓋環、壺、滑石製の白玉が約3m×3mの範囲において出土した。

出土状況は、土師器の高環形土器、壺形土器、須恵器の高環の完形品が約60cm四方の範囲で出土し、さらにその周辺より蓋環等が出土した。この中心となる遺物群は、完形品で、整然と原位置を保ったままの出土と考えられる。さらに器高の高いものが中心に分布しており、遺物の配列がうかがえる。また、この中心部より白玉が19個出土している。19個中5個は土師器の長頸壺の中から、残りの14個は長頸壺周辺からの出土であった。長頸壺は、土器群中心に向かって傾き、口縁部が体部よりずれ落ちたかたちで出土した。

調査の概要



第39図 S X 1 測量図

土師器（第40図、図版26・27）

高環形土器（76～81）

76～78は完形品であり、同器形である。76は口径16.6cm、器高12.8cm、脚部底径12.2cmである。环部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。环屈曲部は稜をもつ。脚部の柱部は円錐形で、裾部は屈折してひらく。环底部は充填技法がみられる。調整は、外面は磨滅により不明で、脚部内面は巻き上げ痕が残る。77は口径15cm、器高11.8cm、脚部底径10.4cmである。調整は内外面共にナデ調整が行われている。78は口径15.9cm、器高13.5cm、脚部底径11.2cmである。器形は76・77と同様であるが、器壁がやや厚い。环底部は充填技法がみられる。調整は、内外面共にナデ調整である。79～81は脚部片である。79は脚部底径11.2cmで、柱部は円錐形で、裾部は屈折してひらく。調整は、磨滅により不明である。80は环底部から脚部にかけての破片である。脚部底径10cmで、环底部には接合痕が明瞭に残り、充填技法が見られる。調整は内外面共に磨滅により不明である。81は环底部から脚部にかけての破片である。脚部底径10.2cmで、80と同器形、同技法であるが、80よりも脚部高が高い。

壺形土器（82・83）

82は口径10.8cm、胴部径13.2cm、器高16cmである。胴部は球形を呈し、口縁部は上外方に基部から直線的にのびる。調整は、内外面共に磨滅により不明である。83は口径8.6cm、胴部径10.1cm、器高9.9cmである。胴部は球形を呈し、底部内面が粗悪で器壁は厚い。口縁部は上外方に基部から直線的にのびる。調整は、外面及び口縁部内面はナデ調整で、胴部内面は粗悪で巻き上げ痕がのこる。

甕形土器（84・85）

84は口径11.6cmで、口縁部はゆるやかに外反する。調整は、内外面共にナデ調整である。85は口径11.9cmで、口縁部は外傾する。調整は、内外面共にナデ調整である。

塊形土器（86）

口径13.4cm、器高5.6cmである。底部は丸底で、口縁部は直立する。調整は内外面共にナデ調整である。

須恵器（第41図、図版27・28）

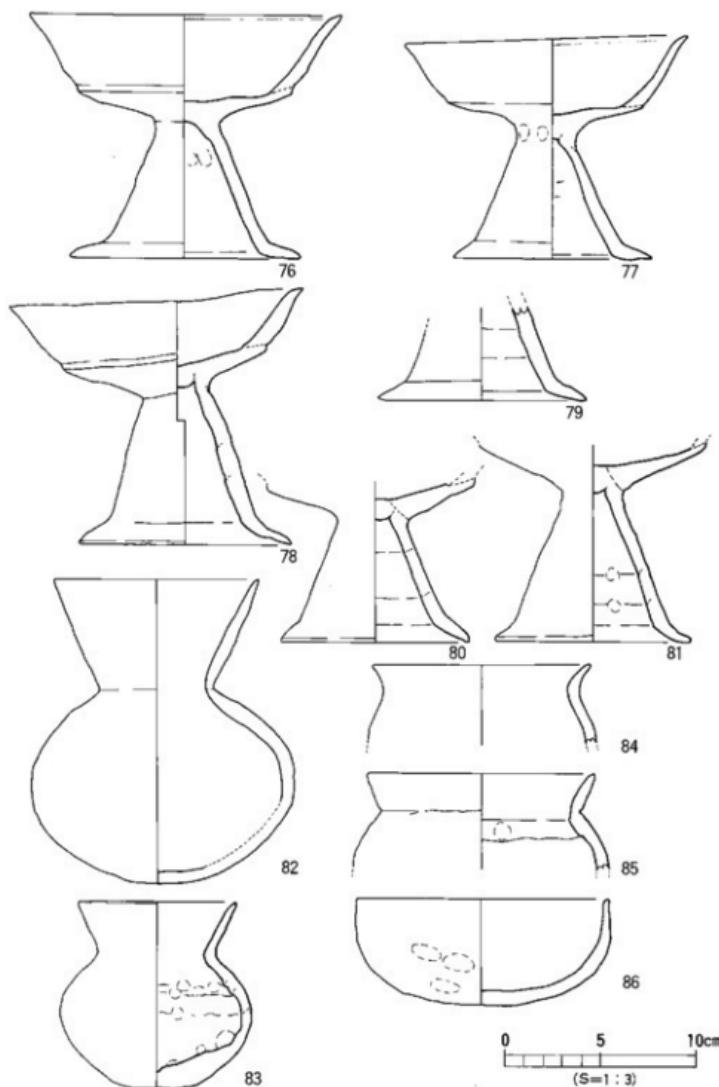
环蓋（87）

口径12.8cmである。天井部は丸みを帯びて低い。稜は外方に伸びて短く丸い。口縁部は直下に下がり、口縁端部はわずかに凹面をなして内傾する。調整は、天井部外面半分を回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。

块身（88～91）

88は口径11cm、器高4.95cmで、底部はやや丸みを帯びる。たちあがりは真上に伸び、端部は凹面をなして内傾する。受部は外方に伸び、受部上面は丸みを帯びる。調整は、底部外面が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。89は口径10.6cm、器高5.2cmで、底部は

調査の概要



第40図 S X 1 出土土器実測図

丸みを帯びる。たちあがりはわずかに内傾し、ほぼ真上に伸びる。端部は凹面をなして内傾する。受部は外方に伸び、受部上面は丸みを帯びる。調整は、底部外面半分が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。90は口径8.8cm、器高4.8cmで、底部は丸みを帯びる。たちあがりは内傾した後、端部近くで外反し、端部は内傾する段をもつ。受部は上外方に伸び、受部端に沈線が巡る。調整は、底部外面半分が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。91は底部が浅く、受部は上外方に伸びる。調整は、底部外面半分が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。

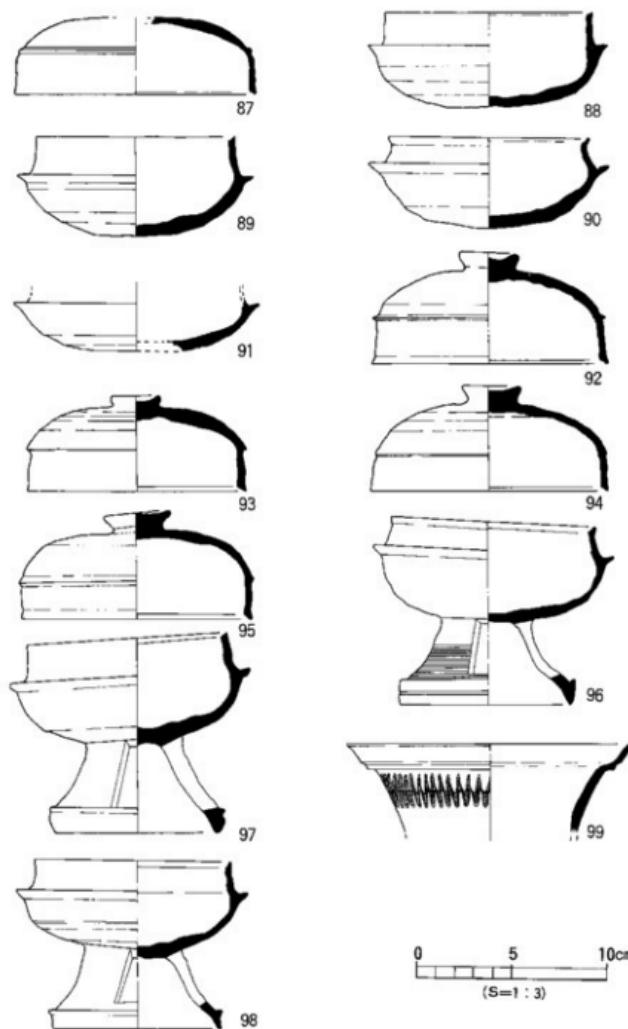
高坏 (92~98) 92~98は有蓋高坏である。

高坏蓋(92~95) 92は口径12.5cm、器高5.9cmである。天井部は丸みを帯びる。稜は短くシャープに外方に伸びる。口縁部は直下に下り、端部は凹面をもって内傾する。つまみは上面がくぼみ、中心部が少しふくらむ。調整は、つまみ及びその周辺が回転ナデ調整、のこり天井部外面半分が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。93は口径11.6cm、器高5cmで、天井部は丸みを帯びる。稜は天井部と口縁部との段差からなる。口縁部は直下に下り、端部は内傾する。つまみは上面がくぼむ。調整は、天井部外面半分が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。94は口径12.6cm、器高5.5cmで、天井部は丸い。稜は沈線により浮かび上がらせた感がある。口縁部はやや外方へ広がりながら下がり、端部はわずかな凹面をもって内傾する。つまみは上面がくぼむ。調整は、天井部外面半分が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。95は口径12.2cm、器高5.8cmで、天井部は丸く少し平たい。稜は小さく外方に突起する。口縁部は中央が少しふくらみをもって下がり、端部は内傾する。つまみは上面がくぼみ、中心部がふくらむ。調整は、天井部外面半分が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。

高坏 (96~98)

96は口径10.8cm、脚底径9cmである。坏底部は丸みを帶びて平たい。口縁部はやや内傾し、端部近くで外反する。端部は内傾し、受部は上外方に伸びる。脚部は「ハ」の字状にゆるやかに外反し、端部近くで上外方に伸びる凸線をもって下る。三方に長方形のすかしが入る。調整は、坏底部外面半分が回転ヘラ削り、その他の坏部内外面は回転ナデ調整で、脚部外面は回転カキ目調整を施す。97は口径10.6cm、脚底径8.5cm、器高10.5cmで、坏底部は丸い。口縁部はやや内傾し、端部は内傾する。受部は外方に短く伸びる。脚部は「ハ」の字状にゆるやかに外反し、端部近くで段をなす。三方に長方形のすかしが入る。調整は、坏底部1/3が回転ヘラ削り、その他の坏部内外面は回転ナデ調整で、脚部は内外面共に回転ナデ調整である。98は口径10.4cm、脚底部8.8cm、器高8.9cmで、坏底部は丸みを帯びる。口縁部は湾曲して内傾し、端部はゆるやかな凹面をもって内傾する。受部は外方に伸びる。脚部は「ハ」の字状に外反し、端部近くで段をなして真下に下る。三方に長方形のすかしが入る。調整は、坏底部外面が回転ヘラ削り、その他の坏部内外面は回転ナデ調整で、脚部は内外面共に回転ナデ調整である。

調査の概要



第41図 S X 1 出土須恵器実測図

辻町遺跡

玉 (99)

玉の口縁部である。口径15.4cmで、外反する口縁部はさらに段をなして端部へ続く。端部はゆるやかな凹面をなして内傾する。調整は内外面共に回転ナデ調整で、頸部外面に波状文が施される。

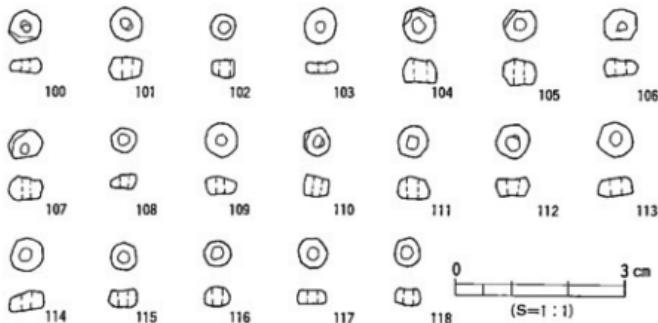
白玉 (第42図)

100~118は直径0.4~0.6cmの白玉である。色調は緑灰色である。114~118の5個は長頸壺(82)の中からの出土である。

第Ⅳ層 (第43図)

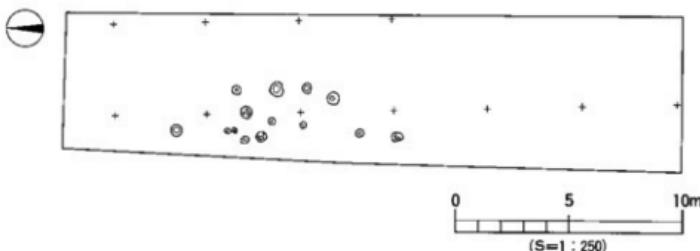
第Ⅳ層は暗灰色粘質土で、北から南へと灰色が強くなる傾向がある。検出遺構は、柱穴14基である。遺構は断面形がすり鉢状のものが多く、大きいもので直径50cm程度、深さ40cmほどである。遺構面からの遺物の出土はなかった。

調査地南端部C7区の層上面で、約30cm四方に、厚さ約3cmで堆積する炭化物を検出した。この炭化物は調査地西壁及び東壁断面には検出されず、南壁断面にわずかな層をなし、調査地外南方へ続くと思われる。焼土及び、関連すると思われる人為的掘りこみ等は検出されなかつた。



第42図 S X 1 出土白玉実測図

小 結



第43図 第IX層遺構配置図

4 小 結

本調査は、古墳時代から中世における当該地及び周辺地域の集落構造解明を目的として実施された。

調査の結果、古墳時代・中世の文化面と遺物包含層を確認した。

古墳時代

第Ⅶ・Ⅷ層より5世紀後半～6世紀前半の遺物が出土し、第Ⅸ層中位部で、一群の土器（SX1）を検出した。

SX1は、出土状況及び遺物の依存状況より、何らかの祭祀行為の遺物群として考えることができる。まず、遺物の配列をみると、須恵器は北側に、土師器は南側に分布が濃い。くわえて高環形土器、長頸壺といった器高の高いものが、土器分布の中心部で検出された。出土遺物の器種構成では、高環形土器が土師器・須恵器共に多く、土師器では壺形土器他が、須恵器では环身・环蓋、疊がそれに次ぐ。一方、土師器の壺形土器、須恵器の壺といった祭祀性の低い器種の出土が希薄であった点は注意される。この他、滑石製の白玉が長頸壺（第40図83）の中とその周辺の土壤より出土した。長頸壺に当初より投入したか否かは判断しがたいが、土器群と一緒に用いられた可能性は充分に考えられる。これ等のことより、この一群の資料が祭祀行為に関係するものであることは確かであろうが、その対象については特定できない。松山平野では、出作遺跡（伊予郡松前町）で水利に關係すると考えられる祭祀資料がある（相田則美1983）。5c後半を中心とする土器（土師器・須恵器）、石製模造品、鉄製品が大量に出土しており、本事例とは規模を別とするが、高環形土器、石製品が多く用いる点においては共通点がみうけられる。出作遺跡の整理と分析が進めば、本資料に対する位置付けも可能になることであろう。

辻町遺跡

第Ⅶ・Ⅷ層出土遺物は、SX1と同時期ないし、わずかに下る時期のもの（6世紀前半）である。SX1の時点で生活面が存在し、その後約半世紀間で両層が堆積したものと判断される。

中世

第V層は、13世紀を主体とした遺物が出土した。近接する古照遺跡及びその周辺地で、同時期の遺構と遺物を検出している（註1）。古照遺跡の地に經營された集落との関連を示す資料となるものである。

本調査は、狭範囲に対するものであったが、松山平野における5世紀後半～6世紀前半の生活様式の一端と土器様相を確認するものとなった。また、古照遺跡の北東部の様相を知る資料となった。今後は、今回得られたSX1の資料を基に、古墳時代の小規模祭祀（日常祭祀）の様相や松山平野における古墳時代後期前半の土器相について調査・研究しなければならない。

〔参考文献〕

相田 則美 1983「愛媛県出作遺跡」『季刊考古学』第2号 雄山閣

（註1）

古照遺跡についての主文献

- | | |
|---------------|--|
| 松山市教育委員会 | 1974 『古照遺跡』 |
| | 1976 『古照遺跡Ⅱ』 |
| | 1989 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』 |
| | 1991 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』 |
| 松山市立埋蔵文化財センター | 1991 『南江戸園目遺跡』 |
| 松山市史料集編纂委員会 | 1980 『松山市 史料集』第1巻 考古編
1987 『松山市 史料集』第2巻 |
| 愛媛県史編纂委員会 | 1982 『愛媛県史』原始・古代I
1986 『愛媛県史』資料編 考古 |

遺物観察表

遺構・遺物一覧

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

例) 繩文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。

(3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、

胴底→胴部～底部。

胎土・勝成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。

() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長(1～4)多→「1～4 mmの大砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。 例) ○→良好、○→良、△→不良。

表9 第V層 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(色)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	环	口径(13.0) 底径(7.0) 器高 3.7	口縁部は内凹気味に立ちあがり、底部は丸く上げ底をなし、圓軸系切り痕が残る。	(口縁) ナデ ② 圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰白色	害(長) ○		23
2	环	口径(11.0) 底径(3.1) 器高 3.3	内凹気味に立ちあがる口縁部 底部付近でわざかに外反する。 底部圓軸系切り。	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰白色	害 ○		
3	环	口径(10.9) 底径(7.0) 器高 2.7	口縁部は外反し、底部は丸い。 底部は平底で、切り離しは圓軸系切りによる。	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰白色	害(石) ○		
4	环	口径(13.8) 底径(8.0) 器高 3.4	直立気味に立ちあがる口縁部。 底部は平底。圓軸系切り より底が残る。	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰白色	害(石) ○		23
5	环	高台5.4 高台1.1	表面三角形の比較的高い高台 をもつ土器器。高台は輪付 による。	ナデ	ナデ	灰白色	害(石) 金ウンモ ○		
6	皿	口径(7.4) 底径(5.0) 器高 1.2	比較的器径の深い土器器。 底部切離しは圓軸系切りによ る。	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰白色	害 ○		
7	皿	口径(6.8) 底径(4.2) 器高 1.7	内溝して立ちあがる口縁部。 底部切離しは圓軸系切り。	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰白色	石(1-2) ○		23
8	皿	口径(14.0)	内溝気味に立ち上がり、中位 付近でわざかに縁をなす。	圓軸ナデ	圓軸ナデ	白黄色	石・長(1-3) ○		23

辻町遺跡

第V層 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(色)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
9	碗	口径(16.0)	瓦器類。口縁部内溝してた ちあり、底部は尖り気味に 丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色	青(石) ○		23
10	碗	高台径4.6 高台高0.2	断面方彌の輪付高台をもつ瓦 器類。内面見込みに2本の施 文あり。	ナデ	ナデ	暗灰色	青 ○		23
11	鉢	口径(25.0)	束縛系須恵器群。	底底の為不明	底底の為不明	青灰褐色	青(長) ○		25
12	高环	残高 3.0	環状器高环の部分。	回転カキ目	回転ナデ	青灰褐色	長(1~2) ○		
13	碗	高台径8.8 高台高0.4	白磁焼。高台は削り出しによ る。底部内面に1条の沈線模 の段あり。	ナデ	ナデ	明灰色	青 ○	柱	23
14	碗	口径(14.4)	白磁焼。口縁部は玉縁状。基 部下にV字状の凹溝あり。口 縁外側のみ輪付状。	ナデ	ナデ	明灰色	青 ○	柱	23
15	碗	高台径5.2 高台高0.5	亂朱空系青磁焼。外面に蓮弁 文があり。粗が高台部分にまで 及ぶ。	ナデ	ナデ	綠灰色	青 ○	柱	23
16	碗	高台径4.0 高台高0.4	粗認焼。高台は削り出しによ る。敷土目痕あり。	ヘラ削り	回転ナデ	灰白色	青 ○	柱	23

表10 第VI層 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(色)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
17	壺	口径(14.0)	「S」字状口縁をなし。口縁部 部は丸くおさめる。	⑪ ナデ ⑫ ハケ	⑬ ナデ ⑭ 滾渦江戸	黄褐色	石・長(1~2) 全 ○	黒底	23
18	壺	口径(16.0)	口縁部は外反し、段をなして て外方にのびる。口縁端部は 内摺する形をなす。	⑮ 回転ナデ	⑯ 回転ナデ	青灰褐色	青 ○	自然柱	23

表11 第VII層 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(色)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
19	壺	口径(19.0)	内溝する口縁部。端部は内傾 する。内面は指捺痕がある。	⑰ ヨコナデ ⑱ ハケ	⑲ ヨコナデ ⑳ ナデ	黄褐色	石・長(1~2) 全 ○		24
20	壺	口径(23.0)	内溝する口縁部。端部は内傾 する。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色	石・長(1~2) ○		
21	壺	口径(18.0)	内溝する口縁部。端部は内傾 に肥厚し、やや内傾する。	横筋の為不明	底底の為不明	黄褐色	石・長(1~2) ○		
22	壺	口径(14.1)	外反する口縁部。端部は尖り 気味に丸い。内面は指捺痕有 る。	⑪ ハケ ⑫ ハケ	⑬ ヨコナデ ⑭ ナデ ⑮ ヘラケズリ→ナデ	黄褐色	青(長) ○		24

遺物観察表

第四層 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(色)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
23	盃	口径(31.2)	内面してたちあがる口縁部。口縁端部は丸い。	唇底の為不明	唇底の為不明	黄灰色	石・黄(1~2) ○		
24	瓶	口径(30.1)	外板する口縁部。口縁端部はコの字状。	⑩ ハケ (指頭痕跡者)	⑪ ハケ→ミコナデ	黄灰色	石・黄(1~2) ○		24
25	瓶	口径(34.2)	口縁部は内湾し、口縁端部は尖り氣味に丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ'	黄灰色	石・黄(1~2) ○		
26	瓶	口径(13.4)	腹部は外反気味にたちあがり、口縁部は直立する。口縁端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色	石・黄(1~2) 金 ○		
27	高杯	口径(35.2)	片縁曲部は後となる。口縁部は外反し、端部は先締りする。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰色	石・黄(1~2) 金 ○	黒底	24
28	高杯	高底径 9.2	柱部は円錐状に広がり、腹部は外反。柱→腹端部に斜め棱あり。	唇底の為不明	唇底の為不明	黄灰色	石・黄(1~2) ○		
29	高杯	高底径 11.6	長く外反する腹部。端部は先締り。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰色	石・黄(1~2) ○		
30	盃	底径径 8.9	建形の胴部、底部はやや丸底。器壁は厚い。	ハケ→ナデ	ナデ (指頭痕跡者)	黄褐色	石・黄(1~2) 金 ○	黒底	24
31	レニチュウ	口径(3.0) 底径(2.2) 器高 5.3	手づくね土器	ナデ	ナデ	黄褐色	砂粒 ○	黒底	24
32	环蓋	口径(11.2) 器高 4.6	天井部は丸みをもち、棱は外方に短く延びる。口縁部は直下に下がり、端部は内傾。	⑩ 回転ヘラ削り 回転ナデ ⑪ 回転ナデ	回転ナデ	黄灰色	石(1~2) ○		24
33	环蓋	口径(11.2)	口縁端部はシャープに尖り凹面をなして内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	黄灰色	石(1~2) ○		
34	环蓋	口径(11.4)	やや扁平な天井部をもち、棱は外方に短くのびる。口縁部は内傾する。	⑩ 回転ヘラ削り 回転ナデ ⑪ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色	石(1~2) ○		
35	环蓋	口径(11.5)	天井部は丸く高い。棱は段差により表わされる。	⑩ 回転ヘラ削り 回転ナデ ⑪ 回転ナデ	回転ナデ	灰褐色	石・黄(1~2) ○		24
36	环蓋	口径(10.0)	天井部は比較的丸く、棱は沈入によって序かび上がりさせた感がある。	⑩ 回転ヘラ削り 回転ナデ ⑪ 回転ナデ	回転ナデ	灰色	石(1~4) ○		
37	环蓋	口径(11.6)	棱は外方に短くのび、口縁端部は凹面をなして内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	石・黄(1~4) ○		
38	环蓋	口径(11.6)	棱は短く、口縁部はやや内湾気味に下がり、口縁端部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	砂粒 ○		
39	环蓋	口径(11.6)	棱は段差によるもので、口縁部は外反し、端部は内傾する段をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	砂粒 ○		

辻町遺跡

第Ⅳ層 出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(表面) 色調(裏面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
40	坪蓋	口径(11.8) 器高 5.0	天井部は丸味を帯び、後は短く上外方にのびる。口縁端部は内傾。	⑩ 回転ヘラ削り ⑪ 回転ナダ ⑫ 回転ナダ	回転ナダ	灰色	石-長(1~2) ○		
41	坪蓋	口径(11.8)	後は段差により表わされ口縁端部は凹面をなして内傾する。	回転ナダ	回転ナダ	灰白色	長(1~3) ○		24
42	坪蓋	口径(11.9)	後は段差により表わされ口縁端部は内傾する段をもつ。	回転ナダ	回転ナダ	青灰色	密(長1) ○		
43	坪蓋	口径(12.0) 器高 4.5	比較的丸い天井部をもち、後は短く外方にのびる。口縁端部は内傾。	⑩ 回転ヘラ削り ⑪ 回転ナダ ⑫ 回転ナダ	⑩ ナダ ⑪ 回転ナダ	灰色	石-長(1~2) ○		
44	坪蓋	口径(12.0)	後は段差によるもので、口縁端部はやや外反気味に下がり、端部は内傾する。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	青灰色	密 ○		
45	坪蓋	口径(12.2)	天井部は丸味をもち、後は上外方にのびる。口縁端部は内向気味に下がり、端部は丸い。	⑩ 回転ヘラ削り ⑪ 回転ナダ ⑫ 回転ナダ	回転ナダ	灰色	石-長(1~2) ○		24
46	坪蓋	口径(11.0)	天井部は丸味を帯び、後は浅く上外方にのびる。	回転ナダ	回転ナダ	灰色	砂粒 金 ○		24
47	坪蓋	口径(12.5)	天井部は丸味を帯び、後は浅く上外方にのびる。口縁端部は純く内傾する。	回転ナダ	回転ナダ	灰色	密 ○		
48	坪身	口径(9.0) 受部径11.3	たちあがりは内傾し、端部は凹面をなして内傾。受部は長く上外方にのびる。	回転ナダ	回転ナダ	灰色	密 ○		
49	坪身	口径(9.0) 受部径11.3	たちあがりは内傾し、端部は凹面をなす。受部は上外方にのびる。	回転ナダ	回転ナダ	灰色	密 ○		
50	坪身	口径(10.0) 受部径12.0	たちあがりは内傾する段をもつ。受部はやや上外方にのびる。	⑩ 回転ナダ ⑪ 回転ナダ ⑫ 回転ヘラ削り	回転ナダ	灰色	密 ○		
51	坪身	口径(10.4) 受部径12.0	たちあがりは内傾した後、直立し、端部は斬をなす。受部は太く続い。	回転ナダ	回転ナダ	灰色	密(長1) ○		
52	坪身	口径(11.2) 受部径13.4	たちあがりは内傾し、端部は凹面をなす。受部はシャープで尖り、底部は扁平。	⑩ 磨滅の為不明 ⑪ 回転ヘラ削り	回転ナダ	灰白色 灰色	密(長1~2) ○		
53	坪身	口径(11.0) 受部径13.2	たちあがりは内傾し、端部は内傾する。受部は長く上外方にのびる。	磨滅の為不明	回転ナダ	灰白色	密(長1) ○	自然胎	25
54	坪身	口径(11.6) 受部径14.2	たちあがりは内傾し、端部は尖り気味に丸い。	⑩ 回転ナダ ⑪ 回転ナダ ⑫ 回転ヘラ削り	回転ナダ	灰白色	密 ○		
55	坪身	口径(11.4) 受部径12.5	たちあがりは内傾し、端部は尖り気味。受部は短く丸くおさめている。	⑩ 回転ナダ ⑪ 回転ナダ ⑫ 回転ヘラ削り	回転ナダ	灰色	密 ○		25
56	蓋	口径(12.8) 器高 5.4	天井部は丸く、口縁端部は内傾する凹面をなす。つまみは丸く、中央部がくぼむ。	⑩ 回転ヘラ削り ⑪ 回転ナダ ⑫ つまみ ナダ ⑬ 回転ナダ	回転ナダ	灰色	密 ○		25

遺物観察表

第Ⅵ層 出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形 茜・施 文	調 整		色調(外面)	胎 烧 成	備考	図版
				外 面	内 面				
57	甕	口径(11.8) 器高 6.0	縁は比較により浮かび上がり せている。口縁部は内縮する 底面をなす。	⑤ 回転ヘラ削り ⑤ 回転ナダ ⑦ つまみナダ ⑨ 回転ナダ	回転ナダ	灰褐色	密○		25
58	甕	つまみ径 2.9 つまみ高 0.9	中央部がやや突出する。底蓋 底环のつまみ。	ナダ	ナダ	青灰色	密○		
59	甕	つまみ径 3.2 つまみ高 0.6	扁平なつまみ。中央部が突出 する。	ナダ	ナダ	灰褐色	密○		
60	甕	つまみ径 3.5 つまみ高 1.1	中央部がくぼむ直面环のつ まみ。	ナダ	ナダ	灰褐色	密○		
61	無蓋 高环	口径(14.0)	内側する口縁部から、縁部付 近で外反し、端部は丸くおさ める。	② 回転ナダ	⑤ 回転ナダ	灰褐色	石・灰白～2 ○		
62	無蓋 高环	口径(20.0)	口縁部は外反し、縁部は丸い。 口縁中位部に段をなし、段下 に波状文を施す。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	灰褐色	石・灰白～2 ○		25
63	有蓋 高环	口径(10.8)	有蓋高环の形。たちあがり 端部は内縮し、受部は丸く上 外方にのびる。	② 回転ナダ ④ 回転ナダ ⑤ 回転ヘラ削り ⑤	回転ナダ	灰白色	石・灰白～3 ○		25
64	高环	脚底径 9.2	ハの字状に外反し、脚底部付 近に上外方にのびる凸縁が添 える。	(回転) 回転ヘラ削り ④ 回転カキ目 (回転) 回転ナダ	(回転) ナダ ④ 回転カキ目 (回転) 回転ナダ	灰褐色	密○		
65	高环	脚底径 8.4	脚底部付近に 1 条の凸縁があり、 高環部は口縁をなして内傾する。三 方に外反形をとす。	④ 回転カキ目 (回転) 回転ナダ	回転ナダ	灰褐色	密○		25
66	高环	脚底径 8.8	脚底部は外反気味に下がり、脚 底部付近に 1 条の凸縁が添 える。	④ 回転カキ目 (回転) 回転ナダ	回転ナダ	灰褐色	密○		
67	高环	脚底径 8.2	脚底部付近に 1 条の凸縁があり、 脚底部は口縁をなして内傾す る。スカシあり。	回転ナダ	回転ナダ	灰白色 灰褐色	密△		
68	高环	脚底径 8.2	脚底部はハの字状に外反し、脚 底部は内傾して下がる。直方 形スカシあり。	④ 回転カキ目 (回転) 回転ナダ	回転ナダ	灰褐色 灰白色	密○		
69	高环	脚底径 8.0	脚底部はハの字状に外反して下 がり、脚底部は内傾気味に下が る。スカシあり。	回転ナダ	回転ナダ	灰白色	密○		
70	高环	脚底径 8.6	脚底部付近でわずかに段をな し、内傾して下がる。スカシ あり。	④ 回転カキ目 (回転) 回転ナダ	回転ナダ	灰白色	密△		
71	甕	口径(25.2)	口縁部は大きく外反し、口縁 底部はわずかに凹面をなす。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	灰白色	粗△		
72	甕	口径(20.0)	口縁部はゆるやかに外反し、 口縁部は下方に肥厚する。	⑤ ヨコナダ ⑥ ナダ	⑤ ナダ ⑥ タキオーナダ消し	灰褐色	密○		25
73	甕	口径(11.1) 残高 9.0	口縁部が体部最も大體を上覆る。口縁 部は内傾する段をなし、縁部に 波状文、底部に上下 2 本の沈度と 脚底部点穴あり。	⑤ 回転ナダ (回転) 回転ナダ (回転) ナダ	⑤ 回転ナダ (回転) 回転ナダ (回転) ナダ	灰白色	密○		25

辻町遺跡

第V層 出土遺物観察表 土製品

(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
74	円筒	底径(6.0)	平底の底部。底部下半に1条の凸縁が走り、凸縁上に波状文を施す。	⑩ ナデ	⑪ ナデ	灰白色	素 ○		
75	器台	底径(20.2)	ハの字形に開く脚部。底部はほぼ水平で、凹面をなす。底 状文を施す。スカシあり。	⑫ 上ヨコナデ ⑬ 下ミガキ	ヨコナデ	暗灰色 灰色	素 ○		25

表12 S X 1 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
76	高环	口径 16.6 脚底径 12.2 器高 12.8	外縁部は段をもつ。口縁部 外反。短くやや内凹する脚部。 基盤は外反し、端部は先鋒り。光 塗技法。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	黄灰色	石-長(1~2) ○		26
77	真环	口径 15.0 脚底径 10.4 器高 11.8	環屈部は棱となる。口縁部 は外反し、端部は先鋒り。光 塗技法。	ヨコナデ	⑪ ヨコナデ ⑫ ヘラケズリ	黄灰色	石-長(1~2) ○		26
78	高环	口径 15.9 脚底径 11.2 器高 13.5	環屈部は段をもつ。器壁は 厚い。光塗技法。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰色	素粒 ○		26
79	高环	脚底径 11.2	柱屈部は内凹気味に開き。柱 部内面に棱をもつ。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	黄灰色	石-長(1~2) ○		
80	高环	脚底径 11.0	柱屈部は内凹して開き。器底 は先鋒り。光塗技法。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	黄灰色	石-長(1~2) ○		26
81	高环	脚底径 10.2	環屈部は比較的丸い。器底は 短く内凹する。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	黄灰色	石-長(1~2) ○		26
82	壺	口径 10.8 肩部径 13.2 器高 16.0	扁球形の腹底から、上外方に 直線的にたちあがる口縁部。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	橙色	石-長(1~2) ○		27
83	壺	口径 8.6 肩部径 10.1 器高 9.9	肩部が強く張り、肩下半はす ばまる。口縁部は内凹し器底 は先鋒り。	ヨコナデ	⑪ ヨコナデ ⑫ ヨコナデ (指標痕観察)	橙色	長(1~2) ○		27
84	壺	口径(11.0)	口縁部はゆるやかに外反し、 器底は丸い。	⑬ ナデ ⑭ ヨコナデ	ヨコナデ	橙色	長(1~2) ○		27
85	壺	口径(11.9)	わずかに内凹する口縁部。器 底は丸い。	ヨコナデ	⑮ ヨコナデ ⑯ ヘラケズリ	橙色	長(1~2) ○		27
86	壺	口径 13.4 器高 5.6	内凹した後、直線的にたちあ がる口縁部。器底は丸い。丸 みのある平底。	ナデ(指標痕観察)	ナデ	灰白色	石-長(1~2) ○		27
87	壺蓋	口径(12.8)	やや丸味をおびた天井部。被 は短く丸い。口縁部は直下に 下がり、底部は内凹。	⑰ 回転ヘラ削り ⑱ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色	石-長(1~2) ○		27
88	壺身	口径 11.0 器高 4.9	完形品。たちあがりは直線的 にのび、器底は内傾する凹面。 底部は丸い。	⑲ 回転ヘラ削り ⑳ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色	石-長(1~2) ○		27

遺物観察表

S X 1 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	基種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(色)	胎土焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
89	环身	口径 10.6 器高 5.2	完形品。たちあがり縁部は凹面。受部は外方に水平にのびる。底部は丸い。	⑩ 回転ヘラ削り ⑪ ⑫ 回転ナダ	回転ナダ	青灰色	密○		27
90	环身	口径 8.8 器高 4.8	完形品。たちあがり縁部は外方に、受部は長く外方にのびる。底部は丸い。	⑩ 回転ヘラ削り ⑪ ⑫ 回転ナダ	回転ナダ	灰白色	石-長(1-2) ○		27
91	环身	器高 2.8	比較的浅い底部。受部はやや上外方にのびる。	⑩ 回転ヘラ削り ⑪	回転ナダ	灰白色	石-長(1-2) △		27
92	蓋	口径 12.5 器高 5.9	完形品。天井部は大きく、断面三角形のシャープな様をもつ。口縁部は内傾。	⑩ 回転ヘラ削り ⑪ ⑫ 回転ナダ	回転ナダ	青灰色	石-長(1-2) ○		28
93	蓋	口径 11.6 器高 5.0	完形品。天井部は丸く、縁は段により表わされる。口縁部は内傾する段をなす。	⑩ 回転ヘラ削り ⑪ ⑫ 回転ナダ	回転ナダ	青灰色	長(1-2) ○		28
94	蓋	口径 12.6 器高 5.5	完形品。天井部は丸く、縁は沈線による。口縁部は内傾する段をなす。	⑩ 回転ヘラ削り ⑪ ⑫ 回転ナダ	回転ナダ	青灰色	石-長(1-2) ○		28
95	蓋	口径 12.2 器高 5.8	完形品。天井部は丸く、縁は強く外方に突出する。つまみ中央部が突出。	⑩ 回転ヘラ削り ⑪ ⑫ 回転ナダ	回転ナダ	青灰色	石-長(1-2) ○		28
96	有蓋 高环	口径 19.8 脚底径 9.0 器高 9.6	环部は深く、环底部は丸い。脚部附近に凸筋があり、脚部に凹筋のくぼみあり。完形品。	⑩ 回転ヘラ削り ⑪ ⑫ 回転カキキ その他 回転ナダ	回転ナダ	青灰色	石-長(1-2) ○		28
97	有蓋 高环	口径 10.6 脚底径 8.5 器高 10.5	完形品。脚部はハの字状に開き、脚底部附近に凸筋がある。三方にスカシあり。	⑩ 回転ヘラ削り ⑪ ⑫ 回転ナダ	回転ナダ	青灰色	密○		28
98	有蓋 高环	口径 10.4 脚底径 8.8 器高 8.9	完形品。脚部附近に凸筋があり、脚部はやや凹面をなす。三方にスカシあり。	⑩ 回転ヘラ削り ⑪ ⑫ 回転ナダ	回転ナダ	青灰色	密○		28
99	脚	口径 15.4	口縁部附近で段をなし、立脚部は内傾する凹面をなす。底部外縁に波状文あり。	回転ナダ	回転ナダ	青灰色	密○		28

表13 S X 1 出土遺物観察表 石製品

(1)

番号	品種	残存	色	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
100	白玉	完形	緑灰色	0.2	0.6	0.2	0.1		28
101	白玉	完形	緑灰色	0.4	0.6	0.2	0.2		28
102	白玉	完形	緑灰色	0.3	0.4	0.1	0.1		28
103	白玉	完形	緑灰色	0.2	0.6	0.2	0.1		28
104	白玉	完形	緑灰色	0.4	0.6	0.2	0.2		28
105	白玉	完形	緑灰色	0.4	0.55	0.2	0.25		28
106	白玉	完形	緑灰色	0.25	0.6	0.2	0.1		28

辻町遺跡

S X 1 出土遺物観察表 石製品

(2)

番号	品種	残存	色	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
107	臼玉	半	緑灰色	0.4	0.6	0.2	0.1		28
108	臼玉	完形	緑灰色	0.25	0.45	0.15	0.09		28
109	臼玉	完形	緑灰色	0.3	0.55	0.2	0.15		28
110	臼玉	完形	緑灰色	0.4	0.45	0.15	0.1		28
111	臼玉	完形	緑灰色	0.35	0.55	0.15	0.15		28
112	臼玉	完形	緑灰色	0.3	0.6	0.2	0.2		28
113	臼玉	完形	緑灰色	0.3	0.6	0.2	0.2		28
114	臼玉	完形	緑灰色	0.3	0.6	0.2	0.15	82内	28
115	臼玉	完形	緑灰色	0.3	0.5	0.15	0.1	82内	28
116	臼玉	完形	緑灰色	0.35	0.45	0.15	0.09	82内	28
117	臼玉	完形	緑灰色	0.2	0.5	0.15	0.1	82内	28
118	臼玉	完形	緑灰色	0.3	0.45	0.15	0.1	82内	28

第Ⅳ章 朝美澤遺跡 2次調査出土の弥生前期土器

梅木謙一、水口あをい

はじめに

松山市朝美澤遺跡 2次調査では、弥生時代前期の良好な遺物包含層を検出するにいたった。松山平野の弥生時代前期、特に前半期の資料は数少なく、よって器種構成や器形態等その土器様相は不明な点が多い。

今回確認した包含層からは、100数十点もの前期土器片の資料が出土した。しかし、土器片は小さく、器形の全てを知れるものではなかった。だが、器種や口縁部形態、施文、調整を知り得る資料としては貴重な資料であり、弱干の分析を試みるものである。 (梅木)

(1) 形式分類

器種は、壺形土器、壺形土器、高環形土器、鉢形土器（ミニチュア品）で構成される。
壺形土器 口縁部の出土は29点で、胴部片は12点の出土を見る。口縁部の形態は大きく2つに分けられる。aは如意形の口縁部（22点）で、bは縄文晩期の凸帯文系の系譜をひく（4点）ものである。aはすべて無沈で、口縁端部に刻目を施す。刻目は口縁端部全面（7点）に施すものと、口縁部下部（10点）に施すものがあり（不明：5点）、面取りした口縁端部に刻目を施すものが大半である。bは凸帯を巡らすもの（3点）と、巡らさないもの（1点）がある。胴部片では12点のうち11点が有段で刻目を施し、1点は無段である。

壺形土器 口縁部片49点、体部片85点がある。口縁部は法量（推定）より、大型品（16点）、中型品（28点）、小型品（5点）の3つに分類できる。いずれも口縁下に曖昧な段（整形時の粘土接合によるもの）を持つ（小片のため不明なものもある）。122のように頸部に凸帯をもつような異例なものもある（1例だけ）。

高環形土器 坏部片3点、脚部片1点で、坏部はいずれも内側にわずかに段をもつ。

鉢形土器 如意形口縁を有するもの1点と、内湾気味に立ち上がる直口口縁を有するもの12点がある。直口口縁には端面を「コ」字状（5点）に仕上げるものと、丸く仕上げるもの（6点）と、尖り気味に仕上げるもの（1点）がある（不明1点）。

ミニチュア 底部片が1点出土している。 (水口)

(2) 施文

壺形土器 体部に沈線ではなく、口縁端部に刻目を施す。刻目は浅く刻むものと、深く刻むものがある。縄文晩期の凸帯文系のものに刺突文（内面1点、外側1点）を施すものである。

壺形土器 大型品一口唇に1条の横沈線文（1点）を施すものと、口縁下に段をもつもの（1点）がある。中型品一口唇に2条の横沈線文と刻目を施す（1点）。小型品一頸部に2条以上の沈線文を施す（1点）ものと、凸帯を巡らす（1点）ものがある。体部片は85点で、うち口

朝美澤遺跡 2次調査出土の弥生前期土器

頸部片と思われるものが12点、胴部片が73点である。施文は七種のものがみられる。沈線文、弧文、木葉文、山形文、段部、刺突文、竹管文である。口頭部片では、横沈線文（7点）、横沈線に綴沈線を組み合わせたもの（1点）と、段部（4点）がある。胴部片では、横沈線文（19点）、横沈線文に綴沈線文を組み合わせたもの（2点）、弧文（13点）、無軸の木葉文（2点）、山形文（13点）、沈線化した段（14点）、刺突文（1点）、竹管文（1点）、不明（7点）がある。なお、ヘラ書きは、浅く施されるものが大半をしめる。

（水口）

（3）調整

調整方法は、刷毛目調整を顕著に残すもの、刷毛目調整（木口）後ナデ消しするもの、ナデ調整をするもの、磨き調整をするものがある。

甕形土器 最終仕上げにナデ調整が施されることが多い。刷毛目調整は、a・b類両方にみられるが、刷毛目調整を顕著に残すものは少ない。

壺形土器 口縁部は内外面共に横方向のヘラ磨きが大半をしめる。体部片は、小片、または磨滅のため明確な調整方法は不明である。

高坏形土器 坏部内面に横方向のヘラ磨きがみられる。

鉢形土器 如意形口縁は内外面共に横方向のヘラ磨きで、直口口縁は内外面共にナデ及び、磨き調整が主体となる。

（梅木・水口）

（4）小結

朝美澤遺跡 2次調査出土の弥生前期土器は、甕形土器、壺形土器、高坏形土器、鉢形土器で器種が構成される。器種構成比率は、調査条件より資料としては充分なものではないが、高坏形土器の存在が注意される。市内の弥生前期土器ではこれまで高坏形土器の存在が不明確であった、よって、稀少資料として価値あるものである。出土品は、甕形土器では板付系統と縄文晩期凸帯文系統のものの二種が存在し、前者は体部に沈線文を施さない。壺形土器では不明瞭ながら口頭部境に段を有し、未だ沈線化していない。高坏形土器では坏・脚部ともに段を有し、鉢形土器では如意形口縁と直口口縁を呈するものの二種がある。これらの特徴は、北部九州地方の板付Ⅱa式の特徴をそなえているものである。ただし、北部九州地方のものと異なる点は、甕形土器における刷毛目調整の消極的な使用や、壺形土器の施文パターン等があげられる。特に施文では、122の凸帯文、139・140の刺突文・竹管文、128の木葉文、141~143のタテ割り区画による施文技法が注意を要するものであろう。

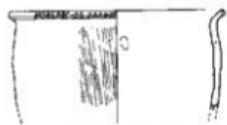
次に課題である。出土状況にも関係するが、本資料の器種構成の是非とその比率、また、各器種の形態の把握、さらには甕形土器における二系統の前後へのつながり等多くのものがあげられる。いずれも、今後の資料によって確認しなければならないものである。

本資料は、現時点においては、松山平野における弥生前期土器の様相が知れる資料としては最も古い段階の時期に比定されるものであり、平野内、更には西瀬戸内地方の前期古~中段階の土器様相が知れる数少ない資料として注意を要するものといえる。

（梅木）

壺形土器

小 結



如意形a (22点)

凸带文系b (4点)

壺形土器

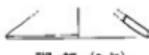
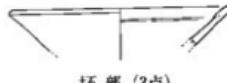


大型 (16点)

中型 (28点)

小型 (5点)

高壺形土器



环部 (3点)

脚部 (1点)

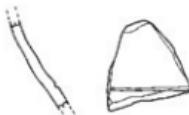
鉢形土器



如意形 (1点)

0 10 20cm
(S=1:6)

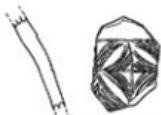
壺形土器の胸部施文



横沈線文 (26点)

横十綫沈線文 (3点)

山形文 (13点)



弧文 (13点)



刺突文 (1点)



その他沈線化した段部 (14点)

0 5 10cm
(S=1:4)

第44図 器種構成と施文分類

第V章 朝美澤（2次）・辻町遺跡調査の成果と課題

平成3年に実施した朝美澤（2次）遺跡と辻町遺跡の調査では、松山平野における土器編年の資料となるものを確認し、さらに、古照遺跡をつかさどる宮前川中流域の遺跡様相が知れる資料が得られた。

弥生時代

朝美澤遺跡（2次）では、前期前半の好資料と中・後期の資料が出土した。前期前半の資料は、包含層出土ではあるが、異時期の遺物の出土ではなく、一括遺物に順ずる好資料として認められよう。壺形土器には口頸部境に段をもち、甕形土器では沈線文ではなく、高坏形土器では坏内面に段を有する。以上の点において、北部九州地方の板付Ⅱa式の土器様相をもつ。よって、平野内での当該期の良好な資料がない現時点においては貴重な資料であるといえる。また、瀬戸内地方の弥生前期土器研究にとっても好資料となるものであると考える。

古墳時代

辻町遺跡S X 1の一群の土器は、器種構成や滑石製白玉が検出されたことで祭祀性の強い遺構であることは確かであろう。ただし、祭祀の対象物が明確でない点で課題を残したものとなつた。遺物研究の視点からは、祭祀遺構の性格が強いが、出土土器には、特別に祭器化された様相は認められず、生活品と同形態を示すものと判断できる。よって、5世紀後半の土器編年の資料として良好なものといえる。

古代～中世

朝美澤遺跡（2次）では、6～8cの遺物包含層と、古代～中世に比定される掘立柱建物址が検出された。また、辻町遺跡では、輸入陶磁器が出土している。南接する古照遺跡地帯では、近年、同時代の資料が増加しており、同地帯の報告にて、今回の資料並びに遺跡の確かな評価がなされるものと考える。古照遺跡一帯の調査の整理・報告に期待するものである。

以上、本書では、朝美澤遺跡（2次）、辻町遺跡の調査報告を行った。両遺跡とも、集落としては南接する古照遺跡と同じ母体のものである。古照遺跡が発見され早20年となる。現在もなお、古照遺跡は調査され（8次）ている。

図 版

図版例言

1. 構造の撮影は、大西朋子・宮内慎一・真木潔が行った。

使用機材：

カメラ アサヒペンタックス67 レンズ ペンタックス67 55mmF4 他
ニコンニューFM2 他 ズームニッコール28~85mm 他
フィルム ネオパンSS

2. 遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カメラ トヨ/ビュ-45G レンズ ジンマーS 240mmF5.6 他
ストロボ コメット/C A-32 2灯・C B 2400 2灯 (パンク使用)
スタンド他 トヨ/無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム 白 黒 ブラスXパン4x5
カラー エクタクロームE PP4x5

3. 造構写真の焼き付け及び遺物写真のフィルム現像・焼き付けは、大西が行った。

(白黒に限る。)

使用機材：

引伸機 ラッキー450MD レンズ エル・ニッコール135mmF5.6A
ラッキー90MS エル・ニッコール50mmF2.8N
印画紙 イルフォードマルチグレードIII RC

【参考】 「埋文写真研究」 Vol.1 1990 Vol.2 1991

(大西朋子)



1. 調査地遠景（南西より）



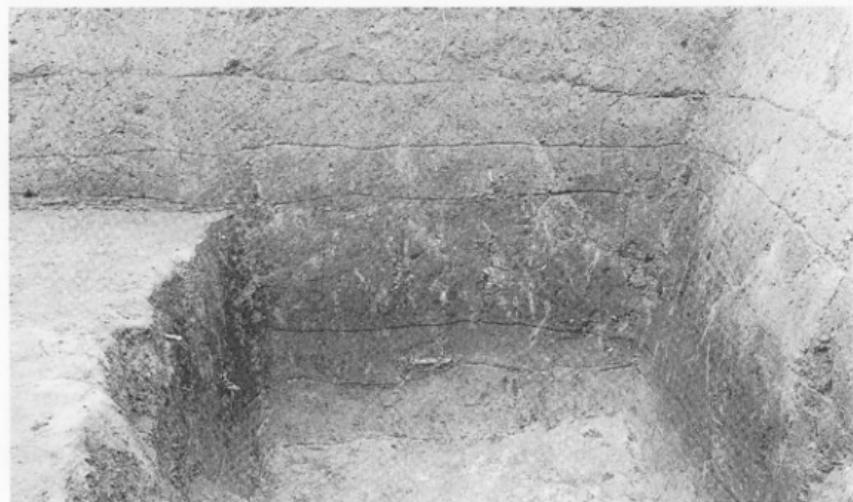
2. 遺構検出状況①（南より）

朝美澤遺跡 2 次調査

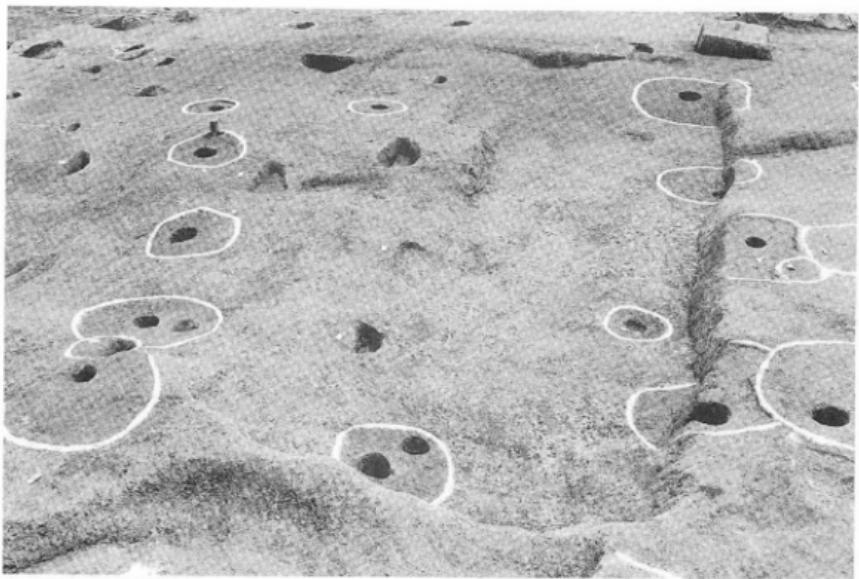
図版二



1. 遺構検出状況②（西より）



2. 北東隅壁土層（南より）



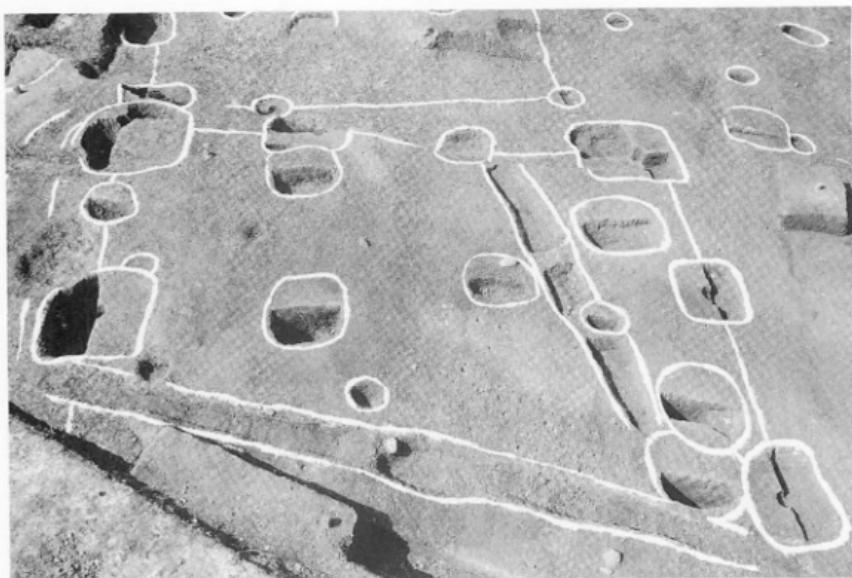
1. 掘立 1 ① (西より)



2. 掘立 1 ② (南より)

朝美澤遺跡 2 次調査

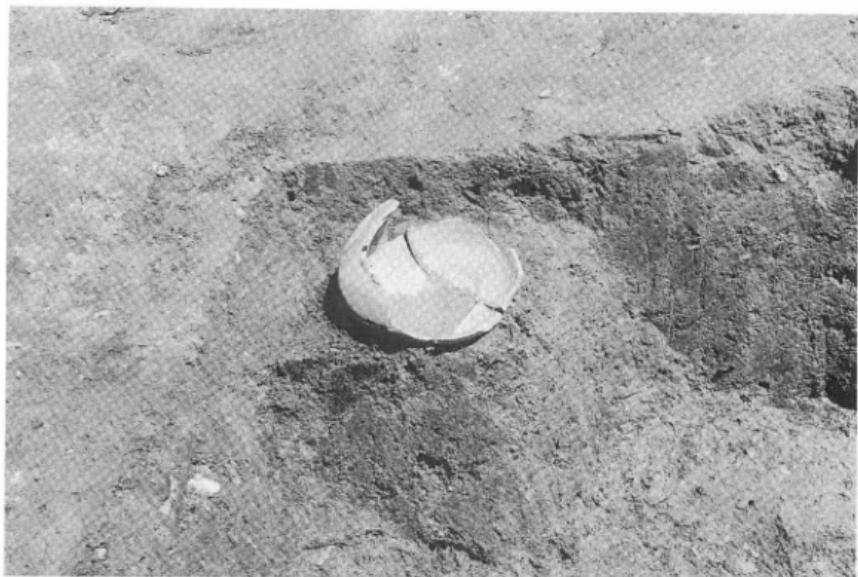
図版四



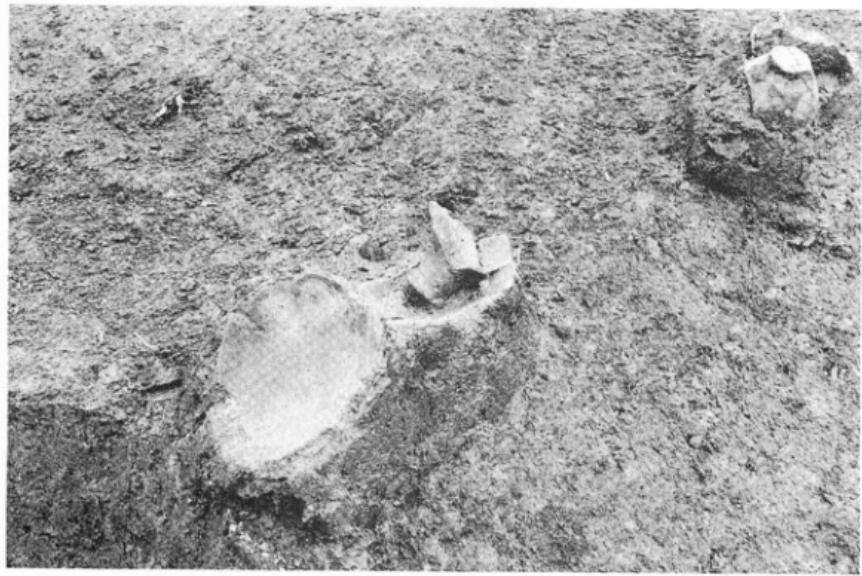
1. 掘立 2 (南より)



2. 掘立 3 (南より)

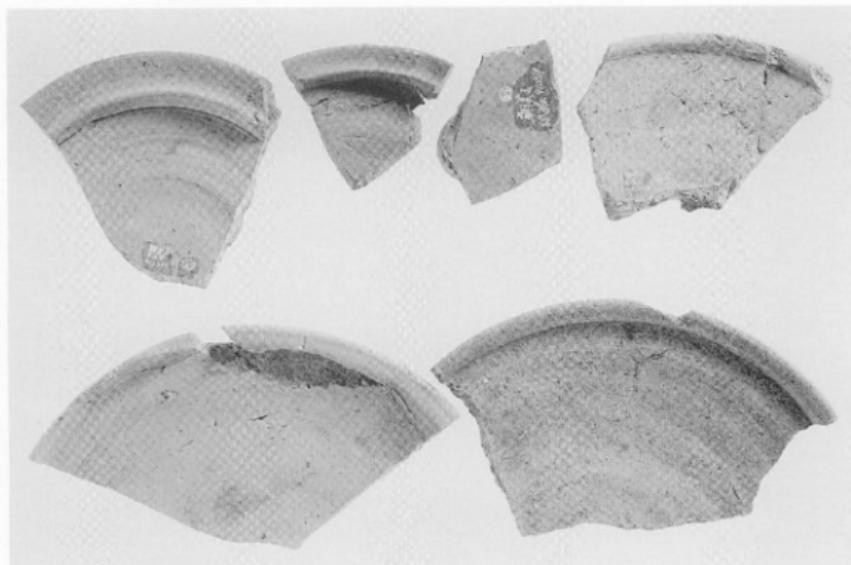
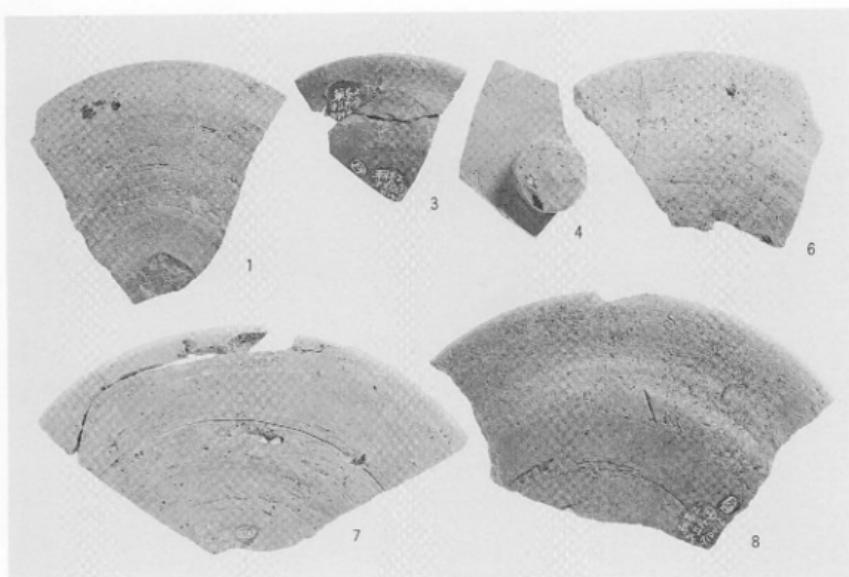


1. 遺物出土状況①（西より）

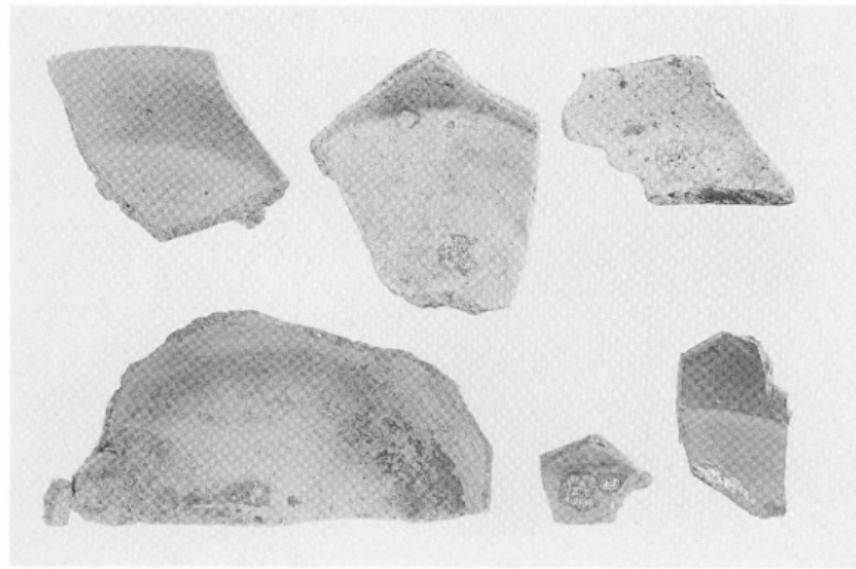
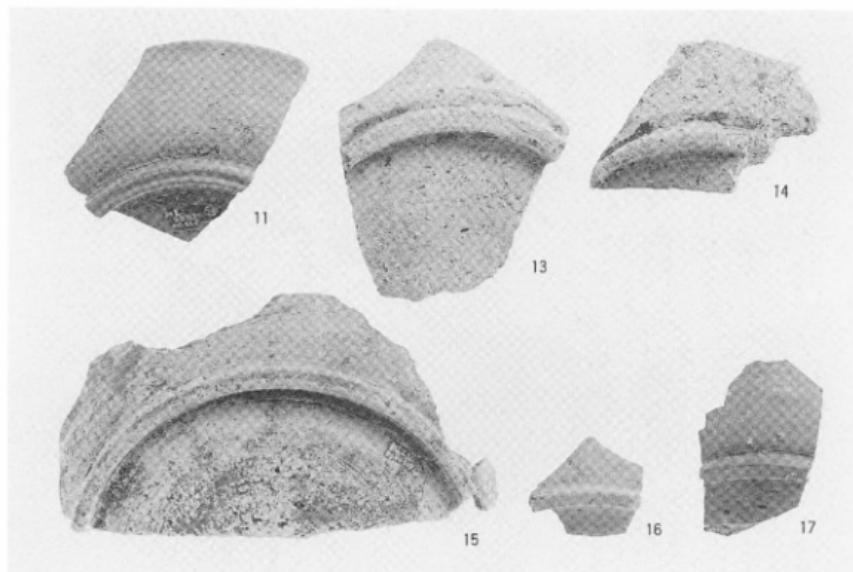


2. 遺物出土状況②（西より）

図版六

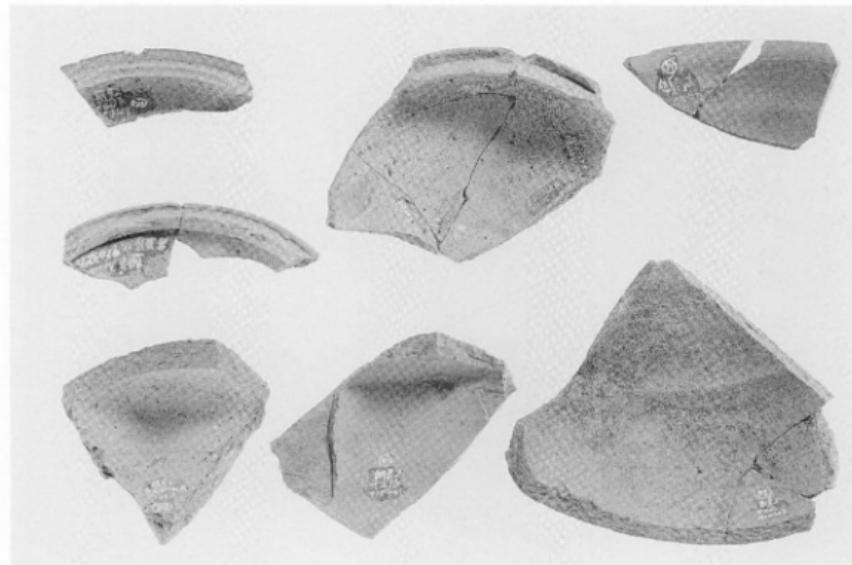
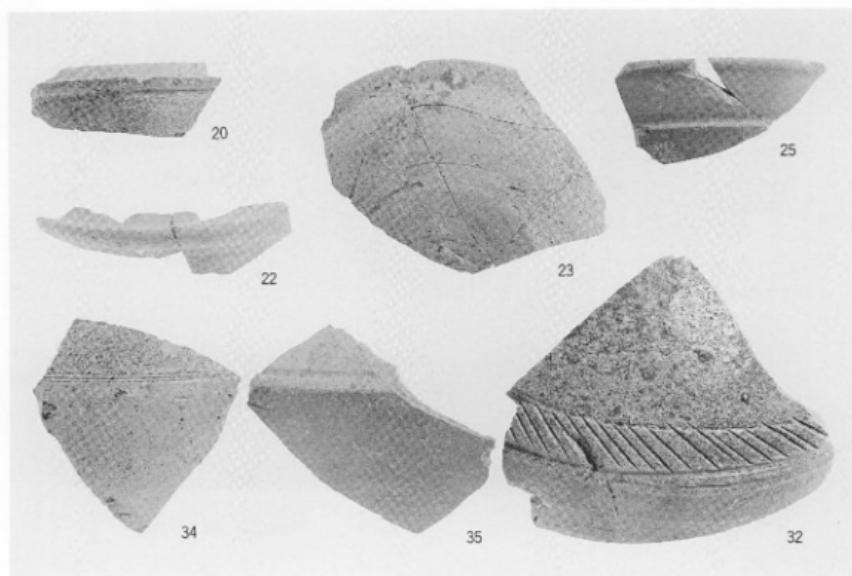


1. 第Ⅱ層出土遺物 ① [上]：外面，[下]：内面



1. 第Ⅱ層出土遺物② [上]：外面，[下]：内面

圖版八



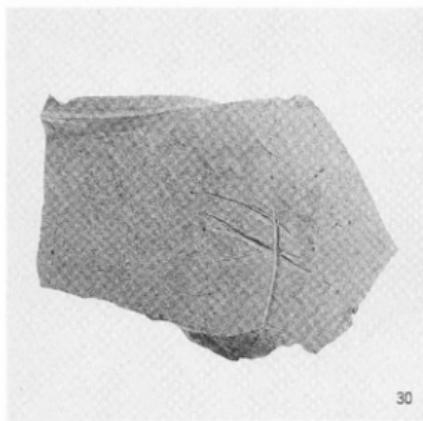
1. 第Ⅱ層出土遺物 ③ [上]：外面，[下]：内面



28



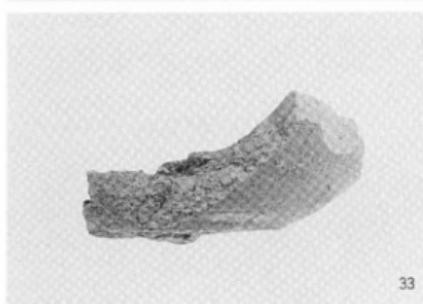
29



30



31



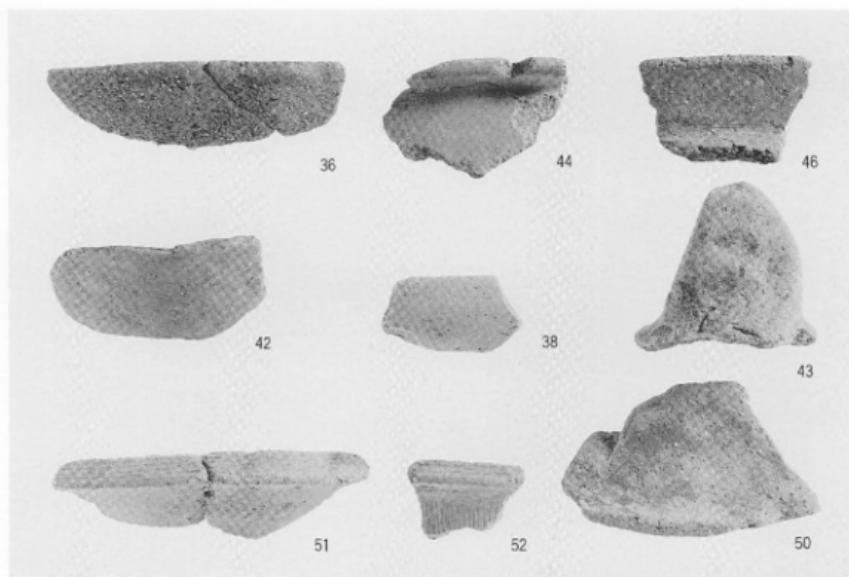
32



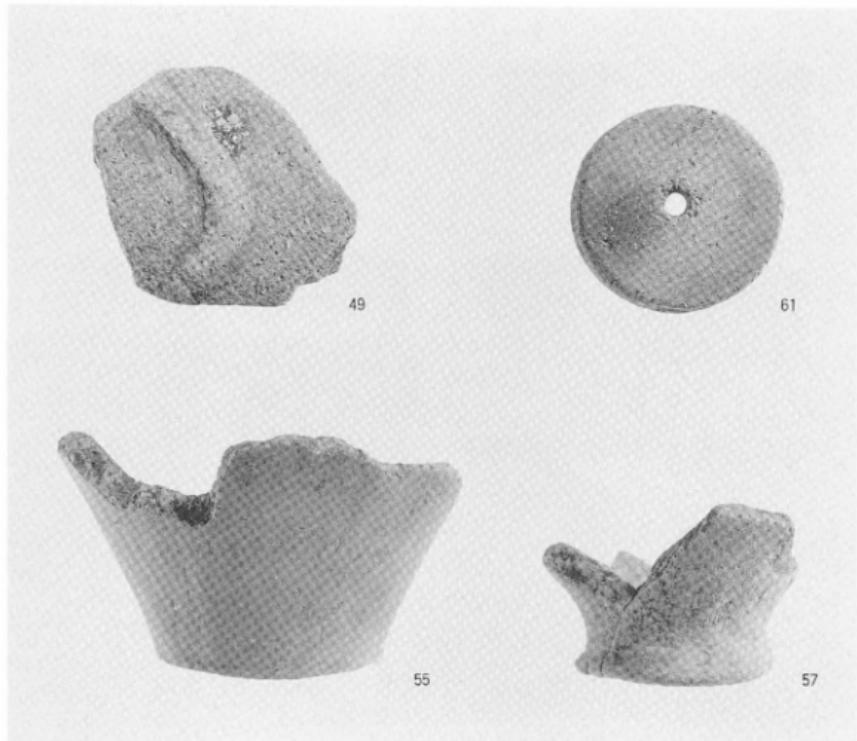
33

1. 第Ⅱ層出土遺物④

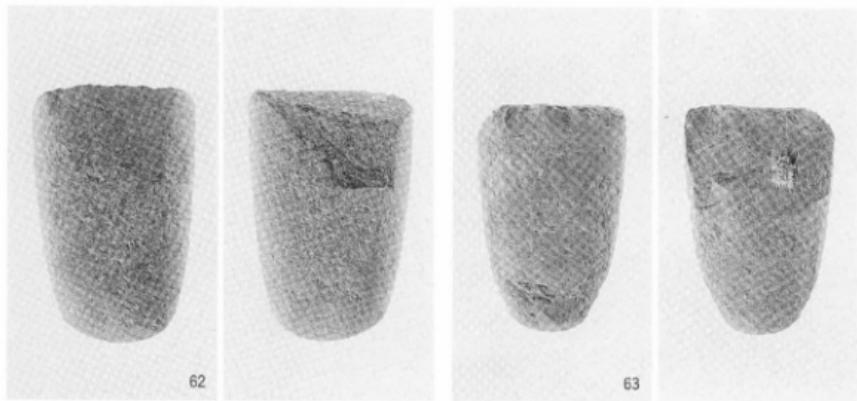
圖版十



1. 第Ⅱ層出土遺物(36・38・42・43) 第Ⅲ層出土遺物(44・46・50~52) [上]：外面，[下]：内面

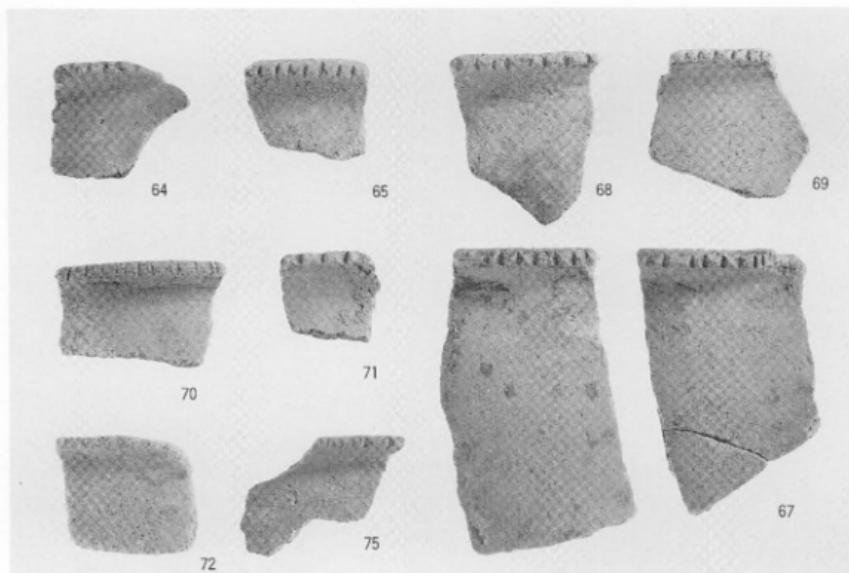


1. 第Ⅲ層出土遺物

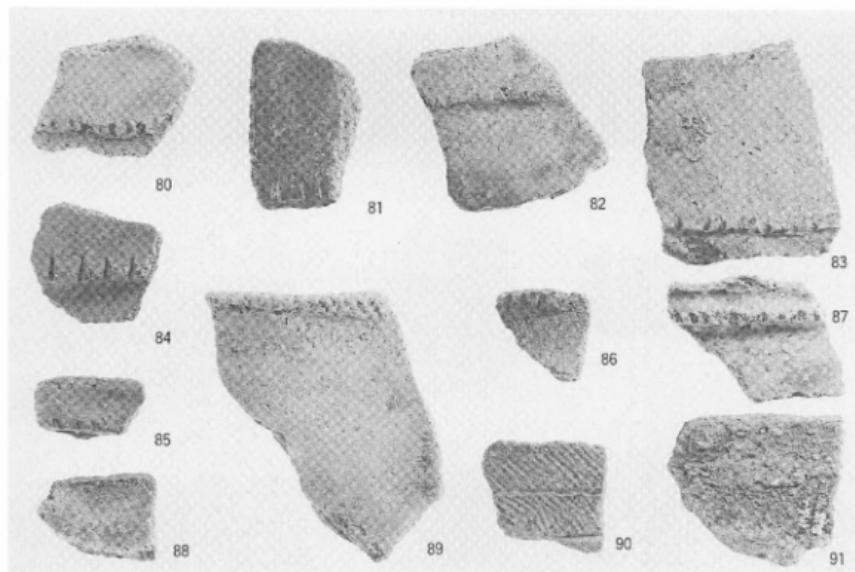


2. 第Ⅲ層出土遺物（石製品）

図版十二

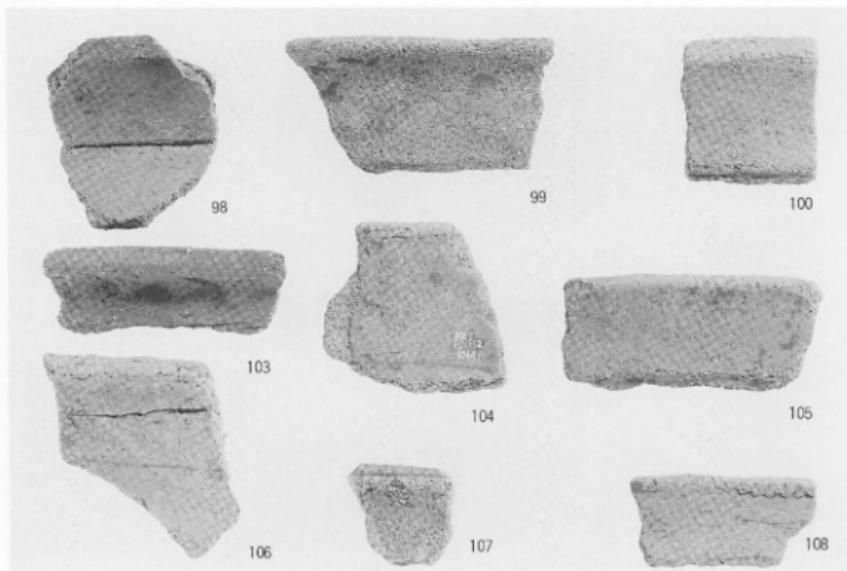


1. 第Ⅲ層下部出土遺物①〔上〕：外面。〔下〕：内面

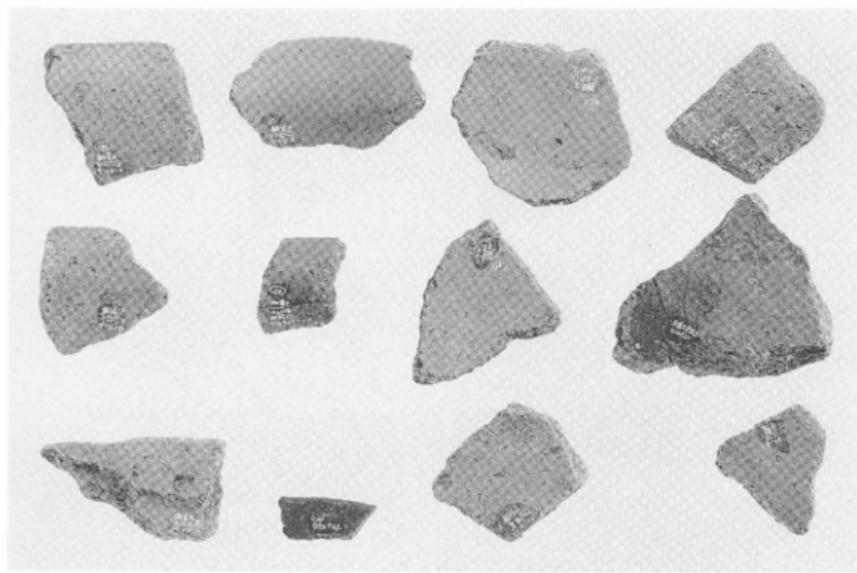
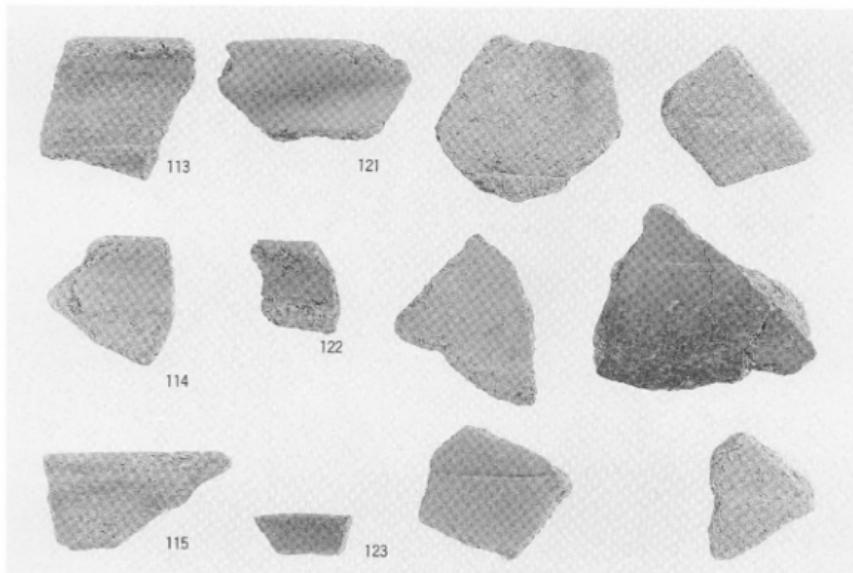


1. 第Ⅲ層下層部出土遺物②〔上〕：外面，〔下〕：内部

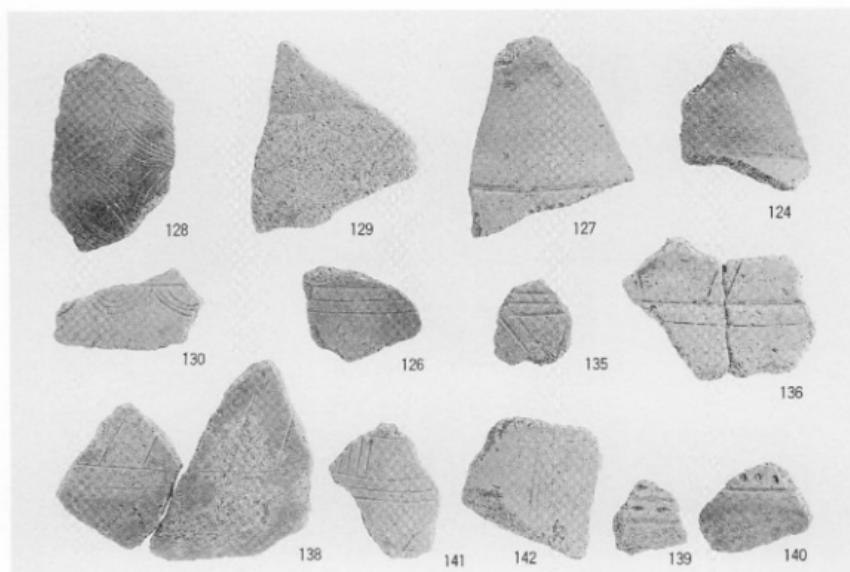
図版十四



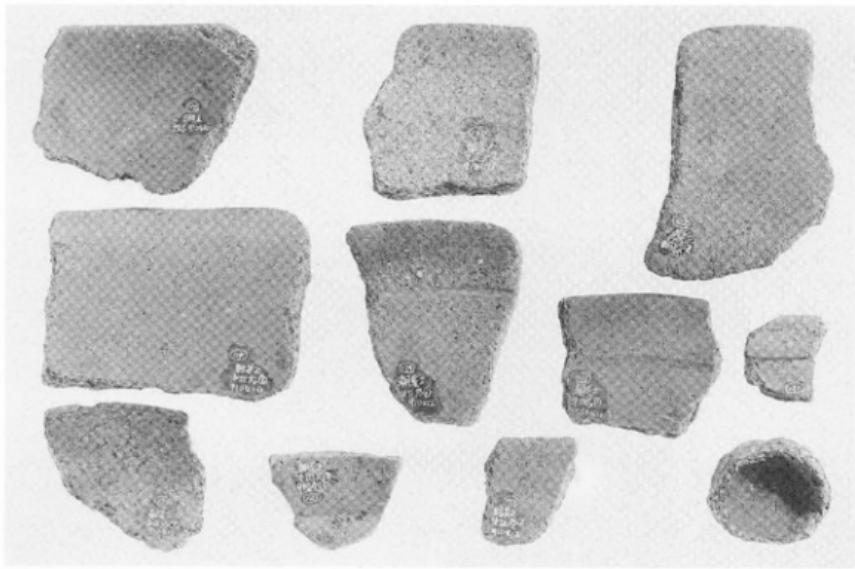
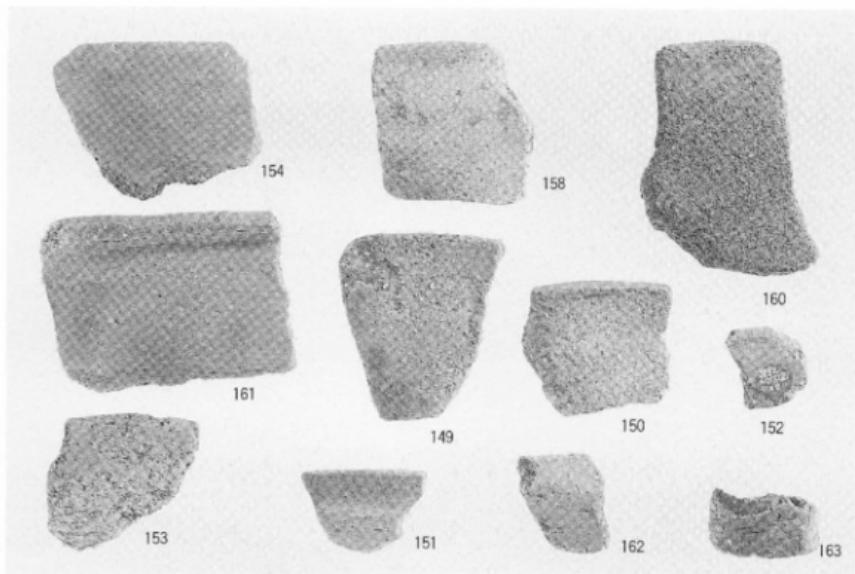
1. 第Ⅲ層下層部出土遺物③〔上〕：外面，〔下〕：内面



1. 第Ⅲ層下部出土遺物 ④ [上]：外面，[下]：内面

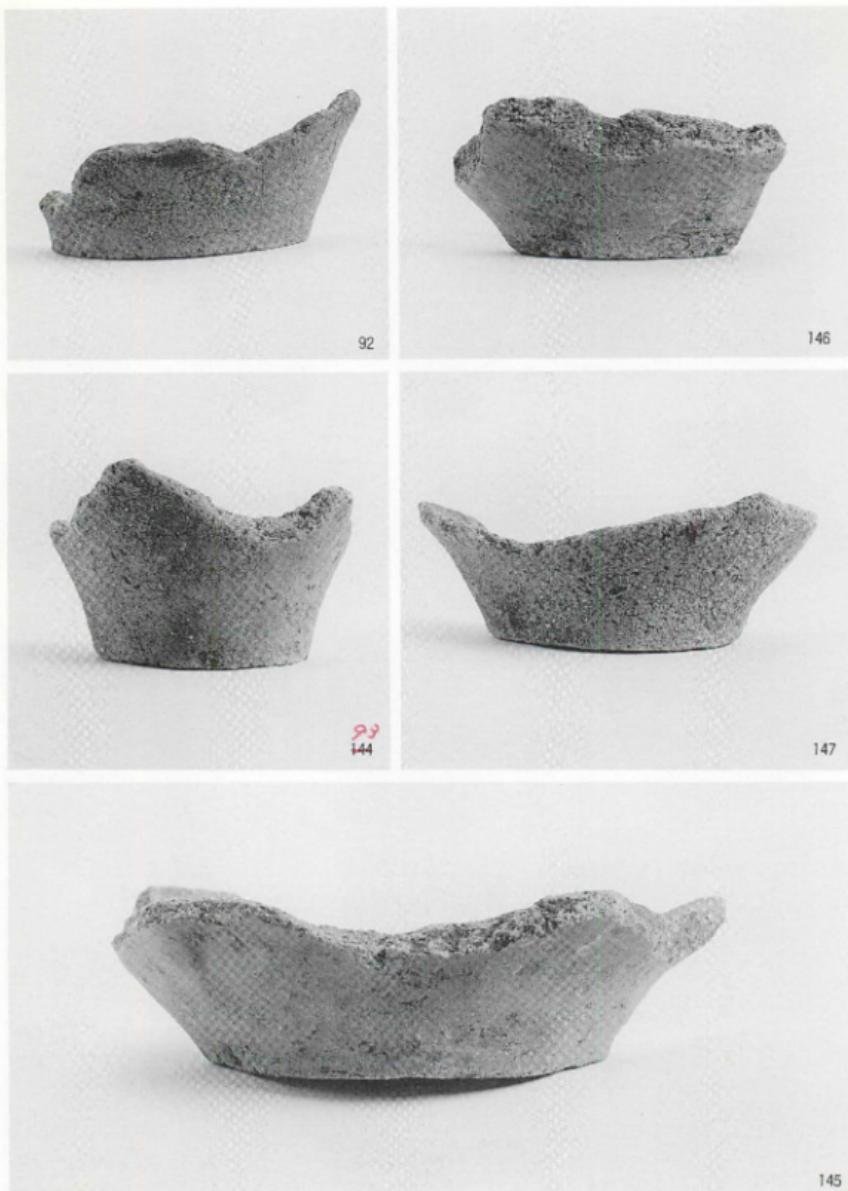


1. 第Ⅲ層下層部出土遺物 ⑤ [上]：外面，[下]：内面



1. 第Ⅲ層下層部出土遺物 ⑥ [上]：外面，[下]：内面

図版十八



1. 第III層下層部出土遺物 ⑦

辻町遺跡

図版十九



1. 辻町遺跡遠景（西より）



2. 調査区全景（北より）

辻町遺跡

図版二十



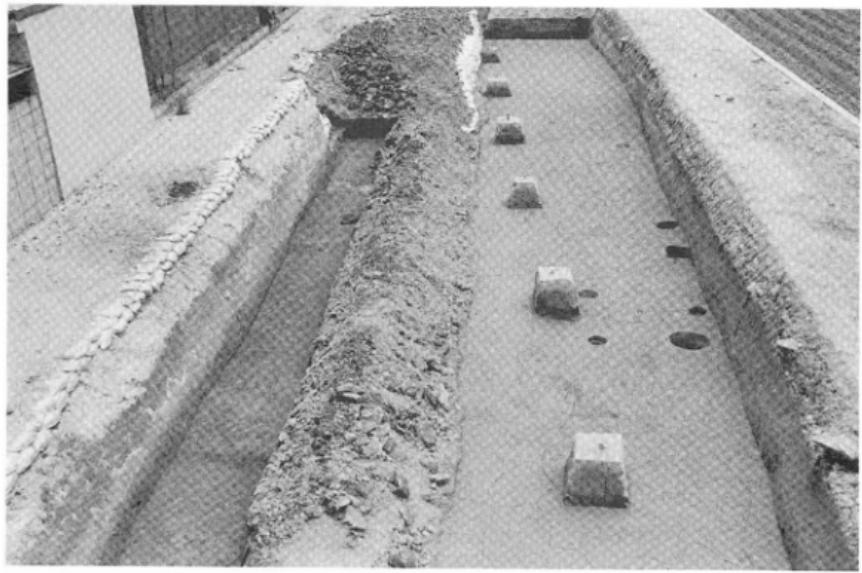
1. 西壁土層（東より）



2. 第Ⅷ層遺構検出状況（北より）



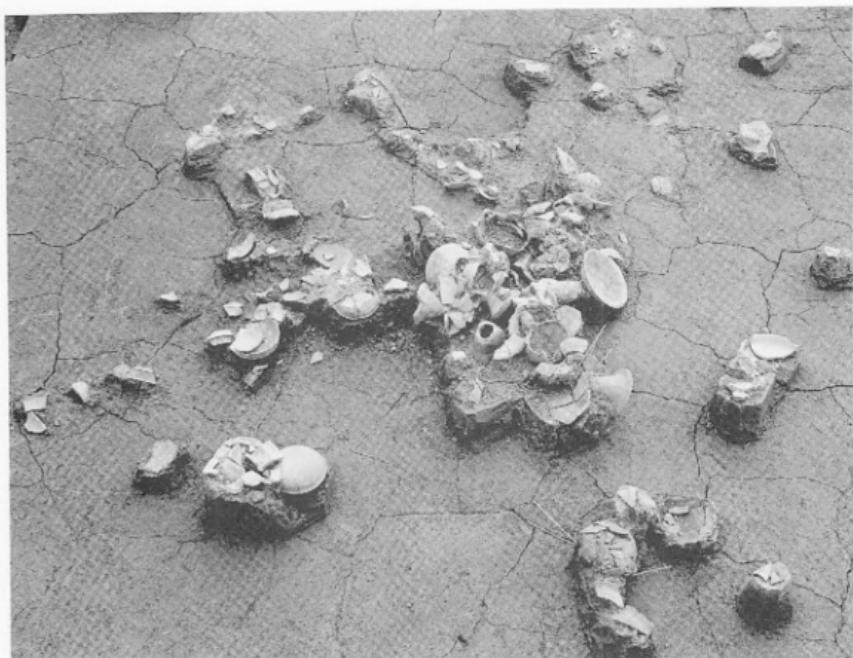
1. 第1層構造検出状況（北より）



2. 第1層中位部構造検出状況（北より）

辻町遺跡

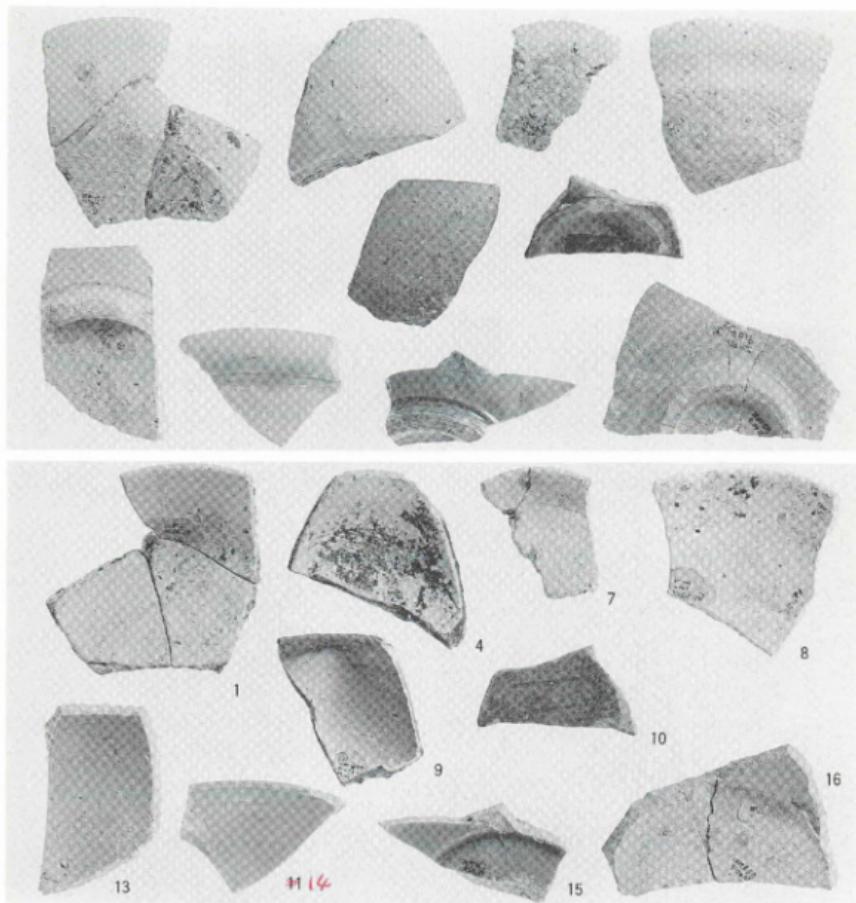
図版二十二



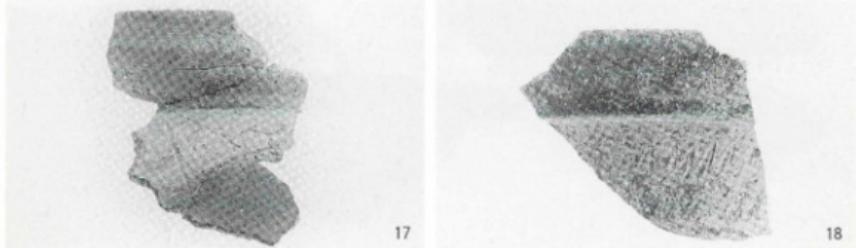
1. SX1 出土状況①(西より)



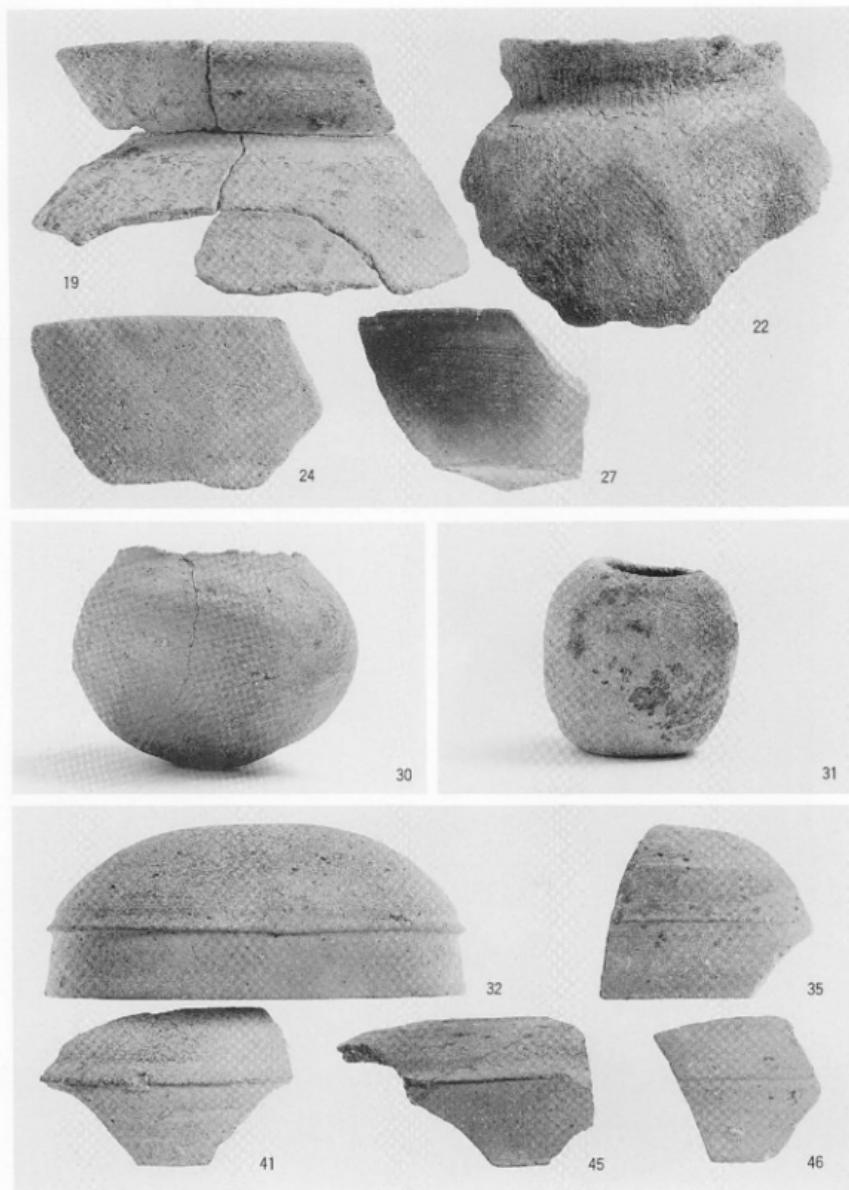
2. SX1 出土状況②(北より)



1. 第V層出土遺物



2. 第Ⅳ層出土遺物



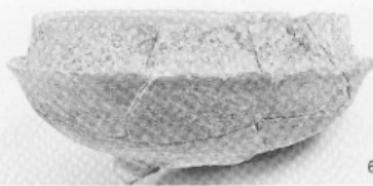
1. 第1層出土遺物①



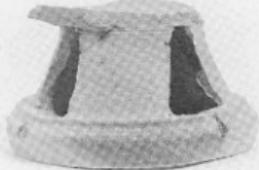
53



55



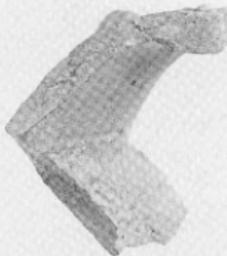
63



65



56



72



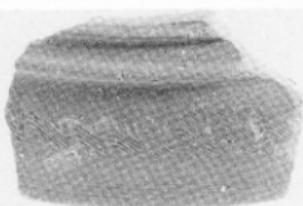
57



73



62



75

1. 第四層出土遺物 ②



76



77



80

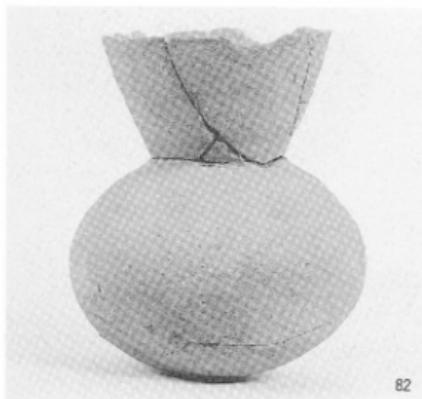


78

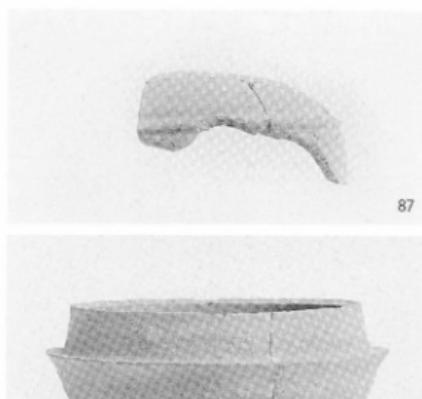


81

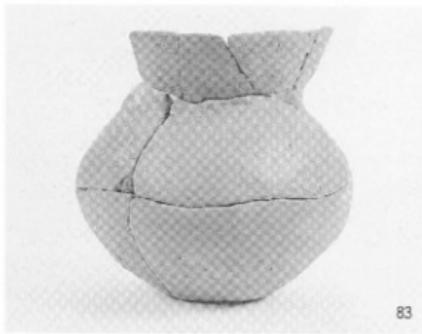
1. SX1 出土遺物①



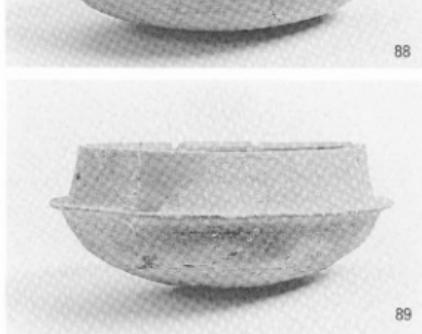
82



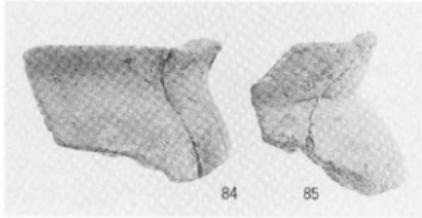
87



83

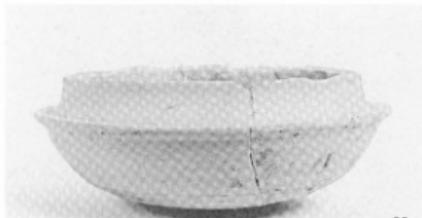


88



84

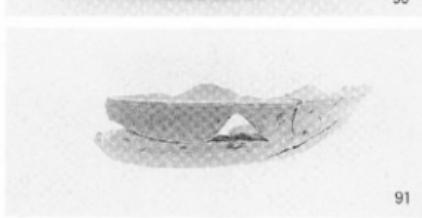
85



90



86



91

1. SX1 出土遺物 ②

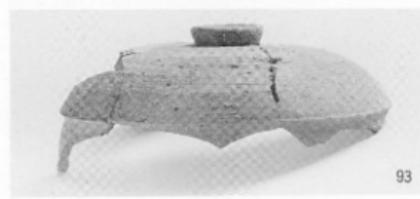
圖版二十八



92



96



93



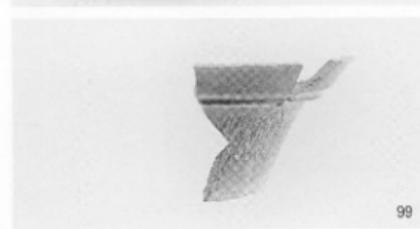
97



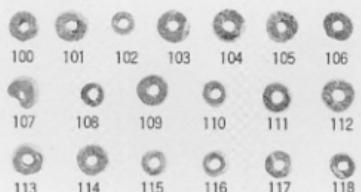
94



98



99



1. SX1 出土遺物③

松山市文化財調査報告書 第29集

朝美澤遺跡・辻町遺跡

平成4年8月31日 発行

編 集 財団法人 松山市生涯学習振興財団

発 行 埋蔵文化財センター

〒791 松山市南育院町乙67番地 6

TEL (0899) 23-6363

印 刷 岡田印刷株式会社

〒790 松山市湊町7丁目1-8

TEL (0899) 41-9111
